

を異にしてゐるそして是等の蕨手は何れも下向すれども圖版第一一二二圖及び第一一五四圖の如く反對に上向せる者も稀にはある又第一一二二圖及び第一一二五圖の如く瓦面を單線若くは複線にて四分して成りたる間地に扇形の輪郭を作り其内に双捲蕨手文を容れた者があり第一一八圖の如く中心の稍小なる隆起より直ちに二條の直線を四出せる者もあり又第一一三三圖及び第一一三八圖の如く中心の内圏外双捲蕨手文の下に矩形を作る者もある又は等蕨手文は一般に陽起すれども第一一四八圖及び第一一四九圖の如く陰刻線より成れる者もある第一一五〇圖及び第一一五一圖の瓦當は普通双捲蕨手文の下に一珠文を置ける者にして前者は特に雄勁の氣象をあらはしてゐる漢代を下る者ではあるまい又本文第一一〇圖は此珠文の代りに陽線小圓を入れ内圏に接着せしめた者であり更に本文第一一一圖は普通の双捲蕨手文の背部が外圏に接着して恰も外圏より左右の手先が垂下せしが如くなつたのである

(口) 四出双捲蕨手頭文 圖版第一一五二圖の瓦當は普通形式と異り稍小なる中心隆起外の内圏より二條の線を四方に出だして各其端に双捲蕨手を冠し更に其間に四條の單線を隅行きに射出して外圏に達せしめ以て瓦面を八區に分ち各區内に稍大なる珠文を配し別に内圏より此珠文に向ひ短き線を出だし珠文に達せず途中に消えてゐる圖版第一二〇九圖の瓦當は中央部殘缺不明なれども恐らくは半球隆起を作りしなるべく其周圍を二重の方郭を以て繞らし此方郭より四方に二條の線を出だし其端に大小二重の双捲蕨手を冠し蕨手の捲

端著しく膨れてゐるのは珍らしき手法である元來四出線端に双捲蕨手を冠するは支那に於ては秦漢時代に多く見る手法であるが樂浪にては此兩種の瓦當以外其形跡を見ざるは寧ろ不思議のことである

(ハ) 四出双頭蕨手文 圖版第一一五三圖の如く瓦當の中心に小なる半球隆起を作り此隆起より四方に幹線を出だし其端左右に分岐して捲回双頭を成してゐる者で頗る雄大の風を帯びてゐる

(ニ) 葉狀蕨手文 此種の者は甚だ稀である圖版第一一五六圖の瓦當は即ち是れで周縁狭く中心には大なる饅頭形の周圍に二重の内圏を繞らし二條の四出線を出だすこと常の如く各區畫内に葉狀の輪郭を有せる一種優雅な蕨手文を作り其上部左右に各一珠文を點じてゐる

(ホ) 二重双捲蕨手文 圖版第一一五七圖乃至第一一六〇圖は其實例にして特に第一一五七圖の瓦當は完全にして最代表的である其周縁高く内外圏を有し内圏内の中心饅頭形は二重より成れるも珍らしく更に四出二條の線により分かれたる各區内に大小の双捲蕨手文を二重に重ね更に其下に當れる處の内圏より芽の如き者を作り出してゐるのも面白い手法雄勁にして技工も亦精鍊亦漢代に屬すべき者である第一一五八圖第一一六〇圖は同意匠の者又第一一五九圖の瓦當亦二重双捲蕨手文を用ひたれども四出線は一條にして下に芽の如き者を缺いてゐる因に第一一六一圖は殘缺に過ぎざれども大なる蕨手の下に孤を反接せしが

如き者を容れてゐるのは他に稀なる手法である

(ハ) 四出双枝間双捲蕨手文 圖版第一一六二圖乃至第一一六七圖の六種の瓦當文之に屬し特に第一一六五圖及び第一一六六圖の瓦當は同手法にして代表的である中心の半球様隆起の外に二重の内圈ありて是れより出だせる二條の四出線の上部に於て斜線を左右に支出し其間に双捲蕨手文を容れ頗る細麗の風を示してゐる第一一六三圖及び第一一六七圖の瓦當は同一型なれども手法は稍粗豪である第一一六二圖の瓦當は同じ意匠を用ひし外中心を更に方形の輪郭を以て圍んでゐる第一一六四圖の瓦當は此形式の最も纖巧なる手法を示せし者にして二重の双捲蕨手文を重ねてゐる

(ト) 對生單捲蕨手文 圖版第一一六八圖乃至第一一七一圖及び第一一七四圖の瓦當文の如く一條若くは二條の四出線によりて分かれたる區間に内圈より若くは内圈外に作られたる扁平なる双捲蕨手の背より直ちに二莖の單捲蕨手を對生せしめし者にして亦一種の雅趣を具へてゐる

(チ) 四出對生單捲蕨手文 圖版第一一七五圖乃至第一一七七圖の如く中心の半球隆起より若くは内圈より直ちに四方に二莖の單捲蕨手を對生せしめし者にして第一一七七圖の瓦當は最も雄勁の精神に富んでゐる又第一一七六圖の瓦當は各對生双莖の間に一若くは二の珠文を配置してゐる又第一一七八圖及び第一一七九圖の瓦當は對生單捲蕨手の外方に旋回せる間に内圈より再小なる對生蕨手を其の下に出だし樂浪瓦當中最も纖巧なる手法を弄し

てゐる圖版第一一八〇圖の瓦當は前者の對生小蕨手の代りに双捲下向蕨手を容れた者である

(リ) 四出三莖蕨手文 圖版第一一七二圖の瓦當は此種の文様をあらはせども瓦面の大部分を失ひたれば充分に知ることが出来ぬ幸に余等大正六年帶方郡治址と思はる、鳳山郡唐土城内より之れと全く同形式の完全なる者を發見したから是れによりて其文様を知ることが出来る即ち中央内圈より四方に三條の莖を挺出せしめ中央の莖は其端左右に長く開きて上に捲き左右の莖の端は其下に覆はれて外方に捲いてゐるかゝして四分されたる各區に双捲蕨手文各一を容れてゐる此文様の手法は頗る樂浪土城内出土の樂浪禮官瓦の蕨手文様とよく似てゐるから年代は彼と大差は無いであらう圖版第一一七三圖の瓦當は前者同様中心の半球様隆起より直ちに四方に三條の莖を出たし中莖の端は丁字頭をなし左右莖の端は強く外方に屈折して鷲頭の如くそして各區内に割合に大なる珠文を容る手法豪健蓋し漢代に屬すべき者であらう是れと全く同形式の瓦當の稍完全に近き者亦鳳山郡の唐土城内より發見せられたから是等は樂浪帶方兩者間の文化の親密なる關係を語る者である

(ヌ) 派生上捲蕨手文 圖版第一一八四圖乃至第一一八七圖の瓦當は中心の饅頭形の周圍の内圈より三條の線を四出し其上部より上捲蕨手を派生せしめ其蕨手の對向せる中間上部に一類内圈に近く二類の珠文を配してゐるのは珍らしき手法である

(ル) 對向單捲蕨手間丁字文葉形文及寶瓶文 此種の瓦當は中央内圈より四出せる二條の

直線の左右に單捲蕨手を作り其蕨手の對向せる中間に丁字形を容るゝ者(圖版第一一八一圖・第一一八三圖又は寶瓶形を容るゝ者第一一八二圖第一一九〇圖第一一九三圖第一一九五圖・第一一九九圖―第一二〇三圖)本文第一一二圖等があり更に二條の四出線より蕨手を左右に派出し其蕨手の對向せる中間に葉形を容るゝ者(第一一八八圖第一一九一圖)寶瓶形を容るゝ者(第一一八九圖第一一九〇圖第一一九二圖第一一九六圖―第一一九八圖第一二〇五圖)等がある

(三) 四葉文

四葉文は漢代に於て或は漆器に或は鏡背に好んで用ひられた而も瓦當文に之を應用せしは極めて稀にして余等の知れる範圍内に於ては唯圖版第一二〇六圖乃至第一二〇八圖及び本文第一一四圖に見ゆる所の瓦當唯一種あるのみである此瓦當は周縁廣く高く一種の線形を有せる外圍との中間に斜線文帶を繞らし中央には二重饅頭形の隆起ありて内圍其周圍を繞り其外に四個の葉形を出だし葉形の輪郭は二重にして内に一珠文を容れてゐる此四個の葉形の間地には上に松皮菱文下に一珠文を配し頗る細巧にして雅趣掬すべき文様を構成してゐる本文第一〇二圖(6)は其斷面を示す

(四) 印花三角形文



約二分一大

109—114 土城出土瓦當 六種

(109—111, 113, 114 中村眞三郎氏藏)

(112 八田氏藏)

此瓦當文は極めて稀にして圖版第一二一〇圖の瓦當は從來知られたる唯一の例である是れは瓦當型を用ひずして製作の際平板なる瓦當面に三角形の木片を以て其尖頭を内にし底邊を外にして周邊に沿ふて竝べ印し更に中心點の周圍にも同様に竝べ印して恰も菊花の如き文様を作つたので極めて原始的手法である

(五) 六出間珠文

此瓦當亦希觀の者にして余等の知る所唯本文第一一三圖の瓦當唯一あるのみ即高き周縁と中央半球様隆起の間に太き内外圈を繞らし此内外圈間の主帶を六條の射出線にて六區に分ち各區に一珠文を配置せし者にして手法極めて簡なれども自ら雄大の風を示してゐる

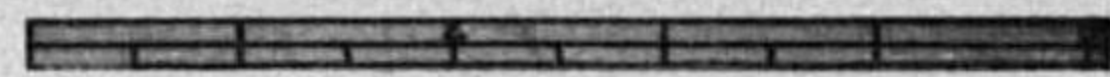
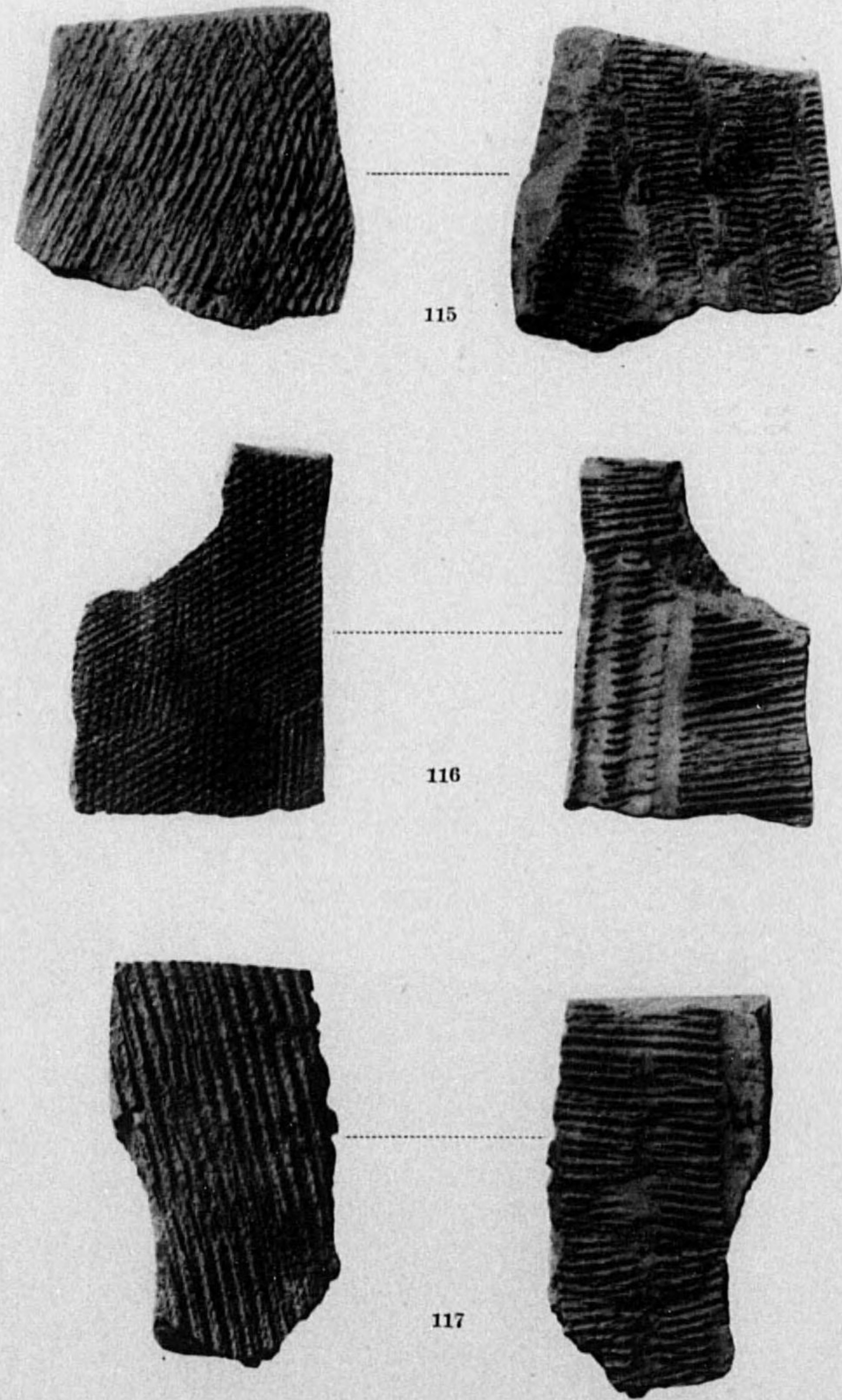
二 平瓦及び丸瓦

樂浪時代の瓦屋は即ち今の所謂本瓦葺にして平瓦を竝べ其上に丸瓦を伏せたので其軒先に當れる所は既記の如く丸瓦の端にのみ瓦當を作つたのである平瓦は牝瓦にして支那にては之を瓦と稱し丸瓦は牡瓦にして支那にては之を甌瓦又は甌瓦といつてゐる樂浪時代の平瓦丸瓦の破片は樂浪土城・粘蟬土城内に豊富に遺存し又當時の古墳の埴輪間に屢ば嵌挿せられてゐる其質一般に灰白色なれども往々灰黒色の者もあり普通の者は稍軟質なれども亦堅緻の者もある

(一) 平瓦 平瓦の外表面は一般に縦に繩文を有すれども往々斜行繩文の綜緒せる者があ
 る而も其内面は常に横に繩文を有し且往々篋若くは指頭にて處々縦てに擦過せる痕跡を示
 してゐる此の如く平瓦の外表面は縦行繩文なるに反し内面が横行繩文なるは樂浪瓦の特質に
 して他の時代の者には決して見ることができぬ本文第一一五圖乃至第一一八圖の平瓦の破
 片は其表裏の手法を示せる者にして上記の特色を直ちに看取することができる而も平瓦中
 往々内面に第一一九圖第一二五圖及び第一二六圖の如く布目を有する者もある特に第一一
 九圖は其内面に横行繩文の上に布目をあらはしてゐる又第一二〇圖の如く内面に横行繩文
 の上に一種幾何學的文様の打痕を見ることがある

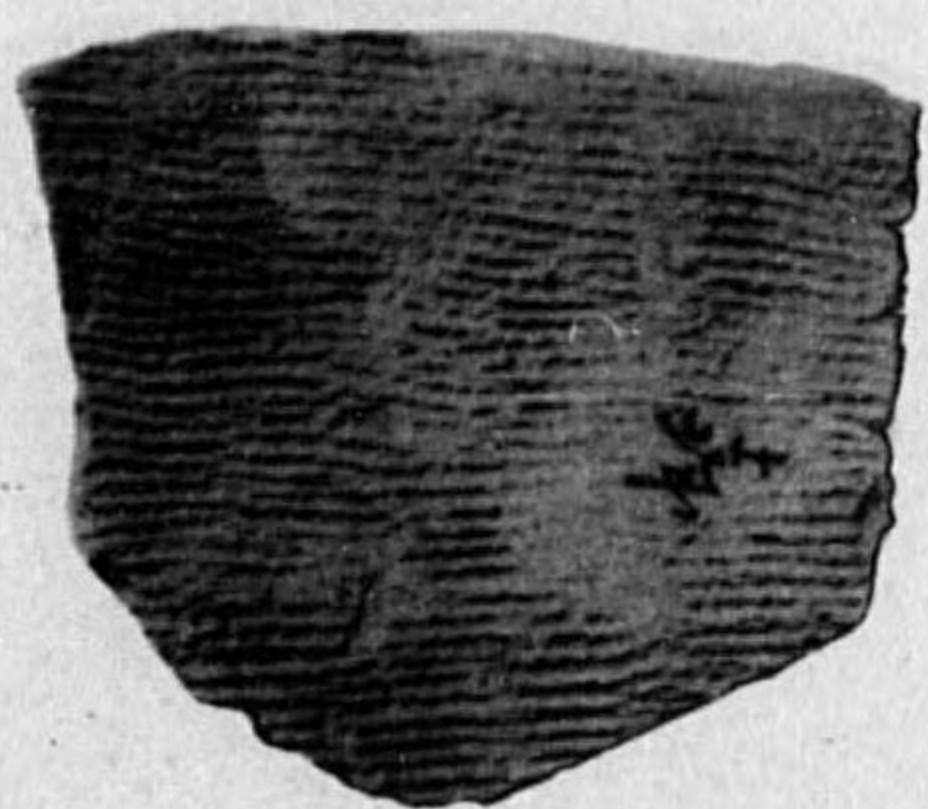
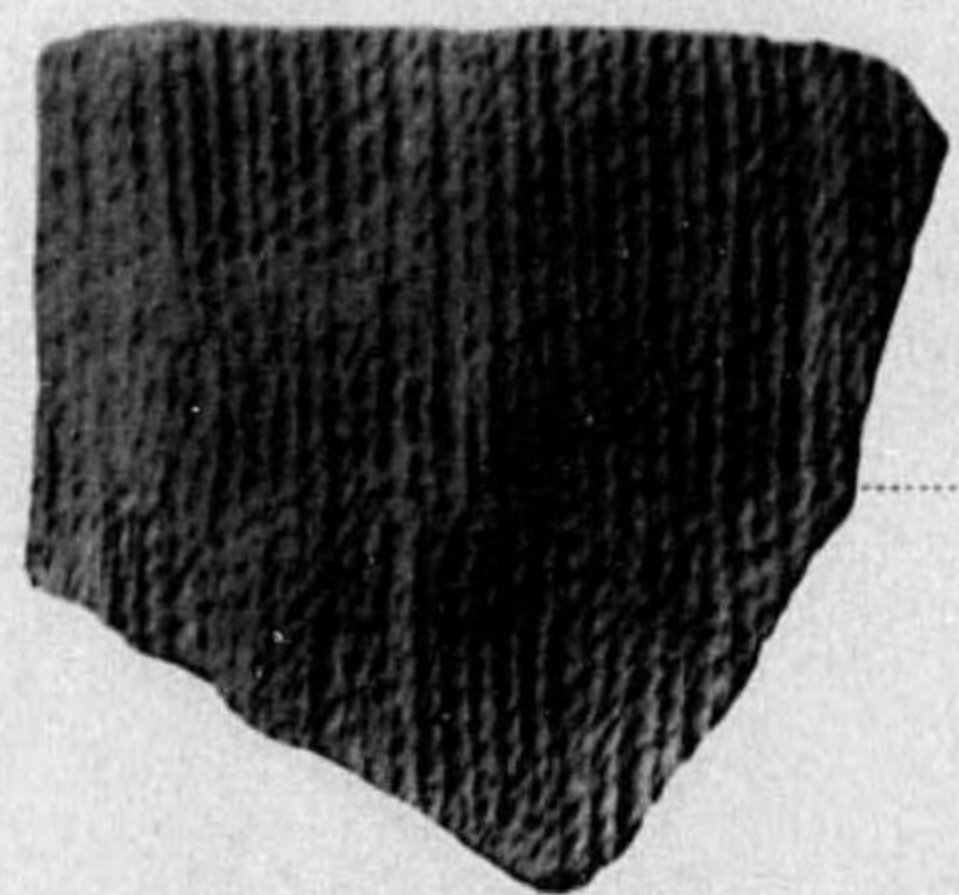
更に平瓦の左右側面を見るに其内面より瓦の厚さの三分の二前後まで刃物を以て切り他
 の殘部を此切取線に隨ひ破り去りたる形跡を存してゐる是れにより當時平瓦の製法を推想
 することができる

當時の瓦工は今も朝鮮の瓦工が襲用せるが如く先づ桶側様の者を回轉臺均の上に載せ其
 周圍に水にて濕したる廣細き繩目を有する若くは苧布を張り別に瓦の厚さに切り取りたる
 粘土を以て其外圍を覆ひ足にて回轉臺を回轉しながら苧絲を透間なく巻き付けたる有柄の
 叩き板(今朝鮮の瓦工は絲を卷かず板面に波形又は籠目等を陰刻せるを用ふを以て横に此粘
 土を打ち固める隨て繩目文様が縦にあらはれる打方により斜めにもなるそれを終れば桶側
 様を上より引き出し席又は苧布を取り出し跡に残れる圓筒を運び去りて之を乾燥し其生乾



115-117

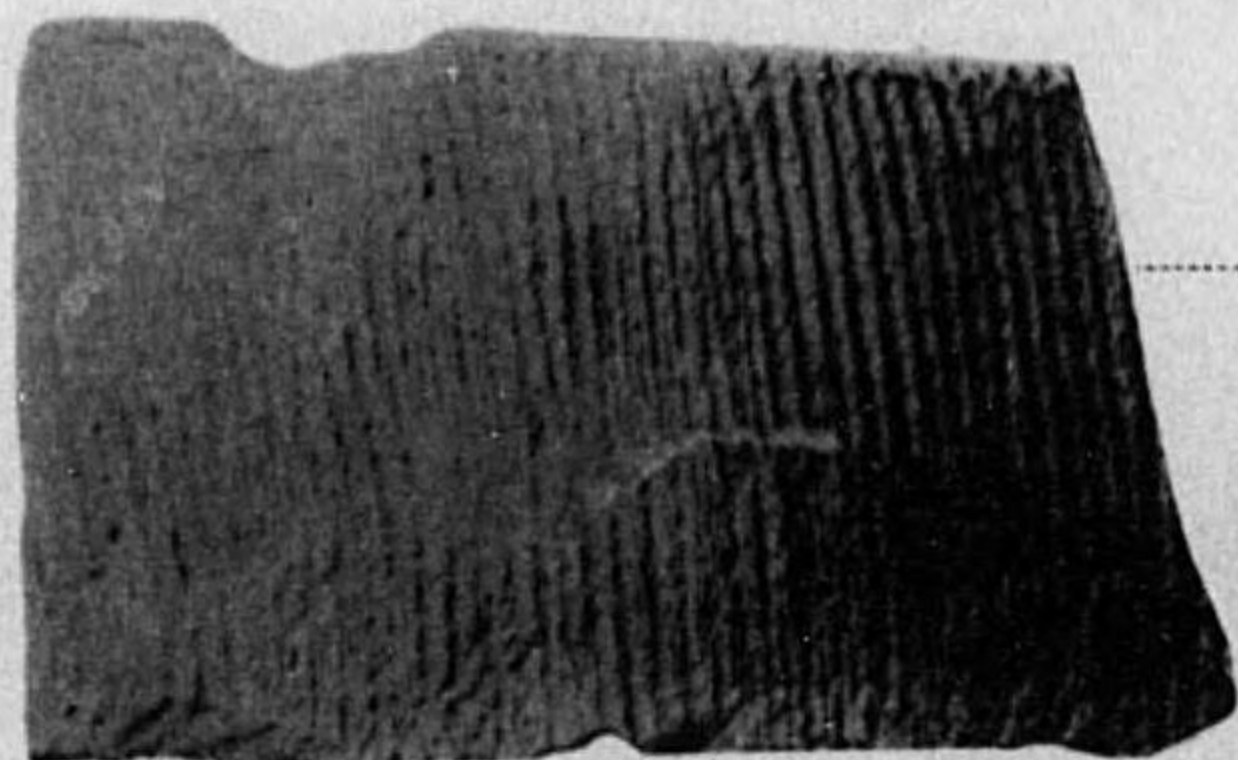
土城出土平瓦斷片 三種



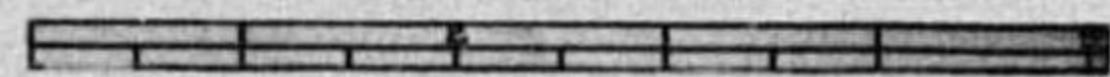
118



119

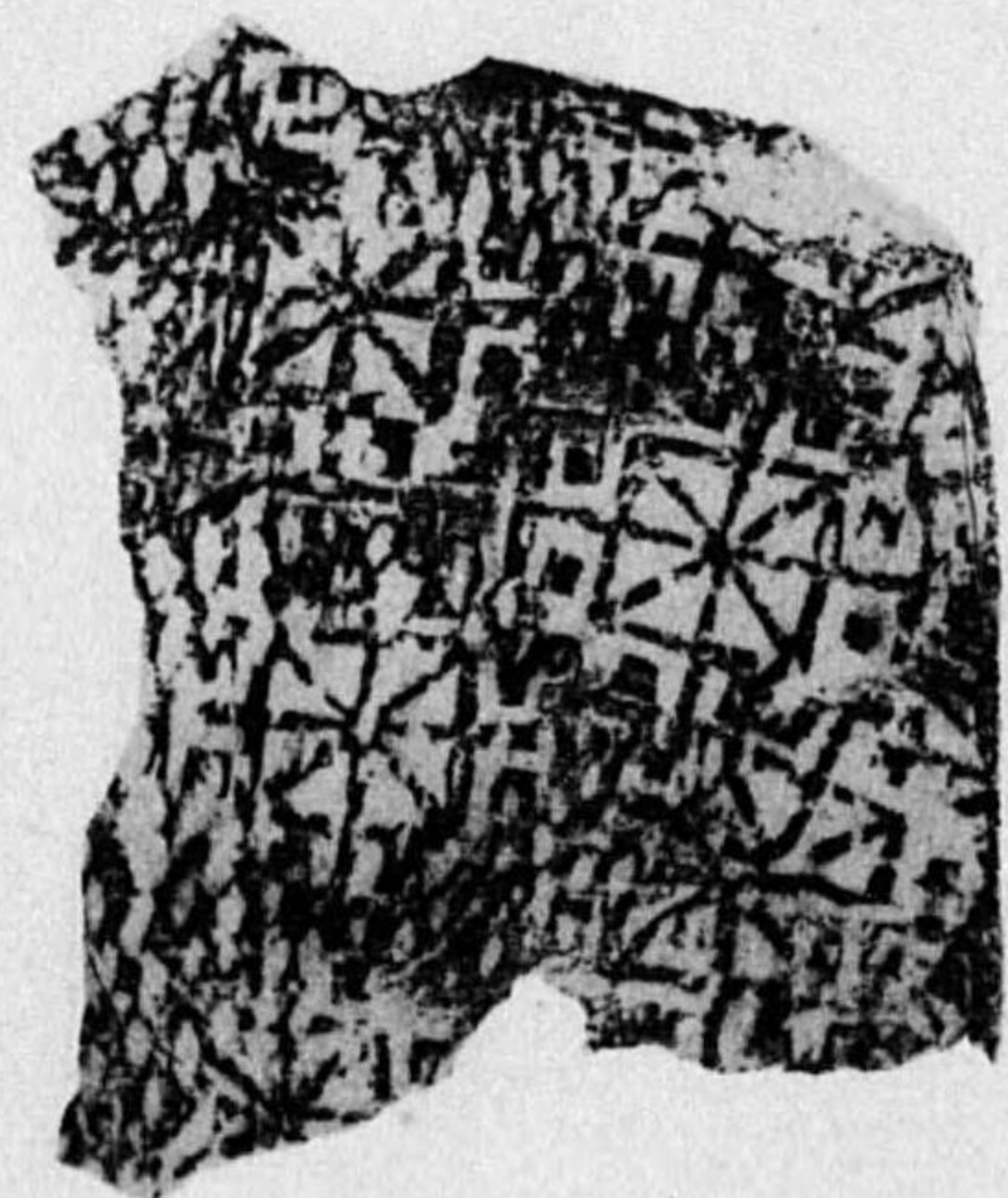


120

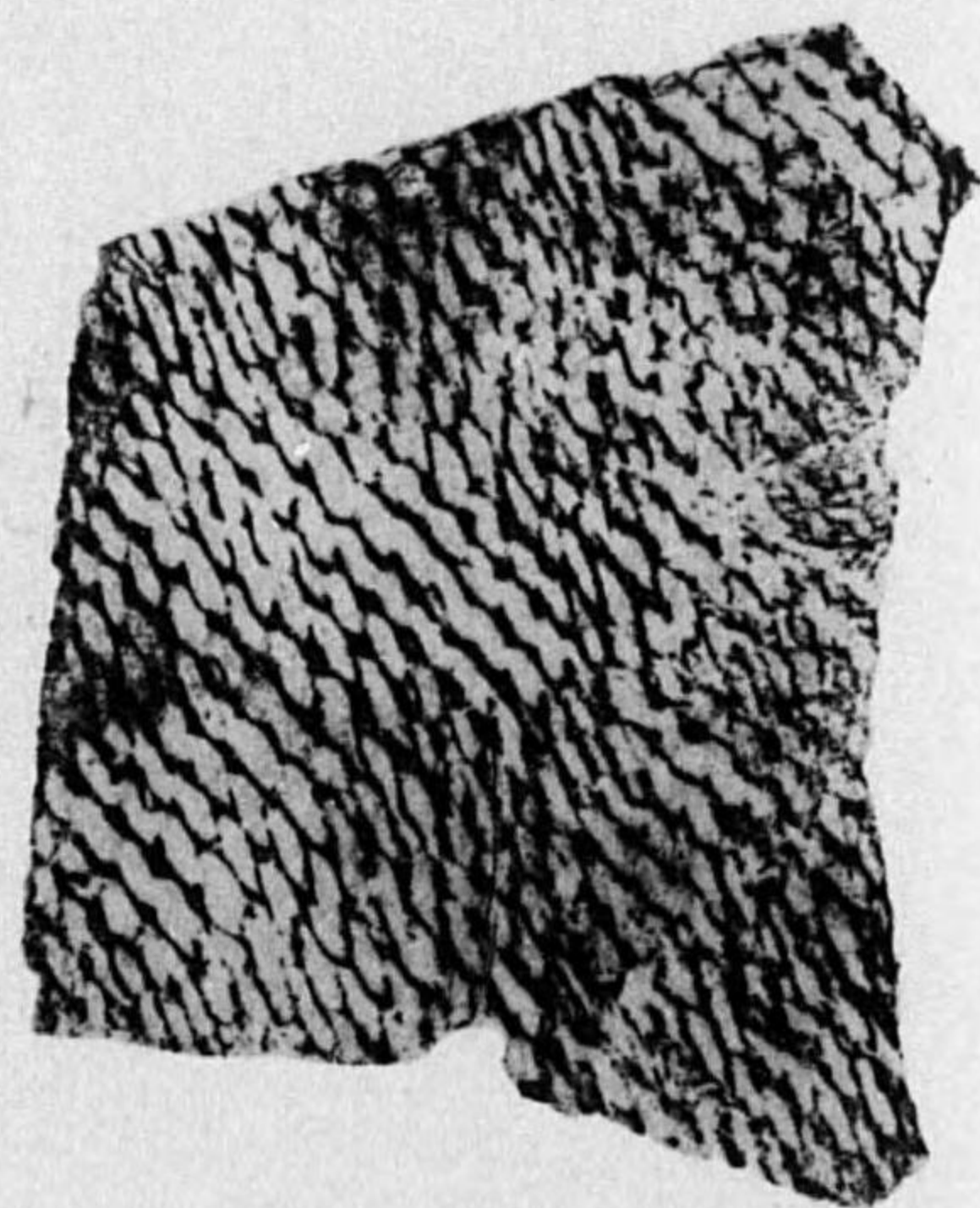


118—120

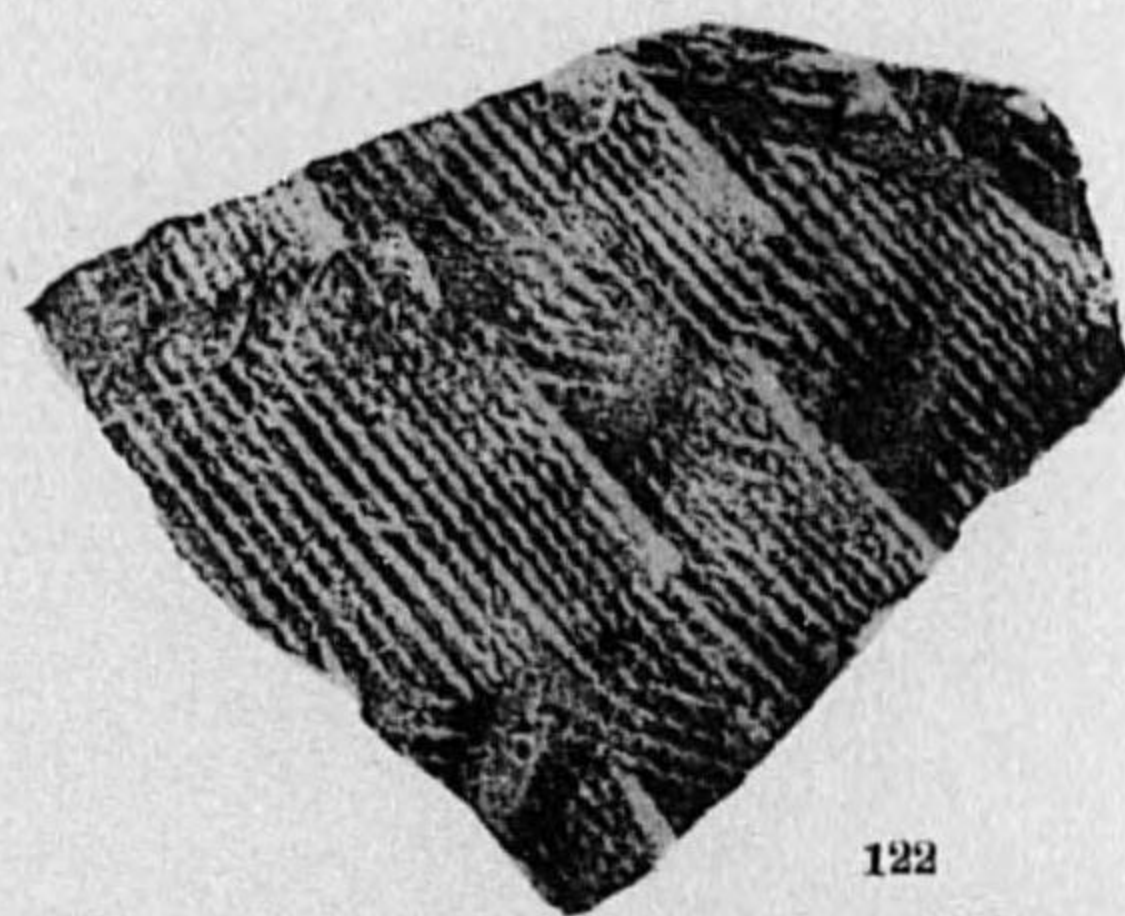
土城出土平瓦斷片 三種



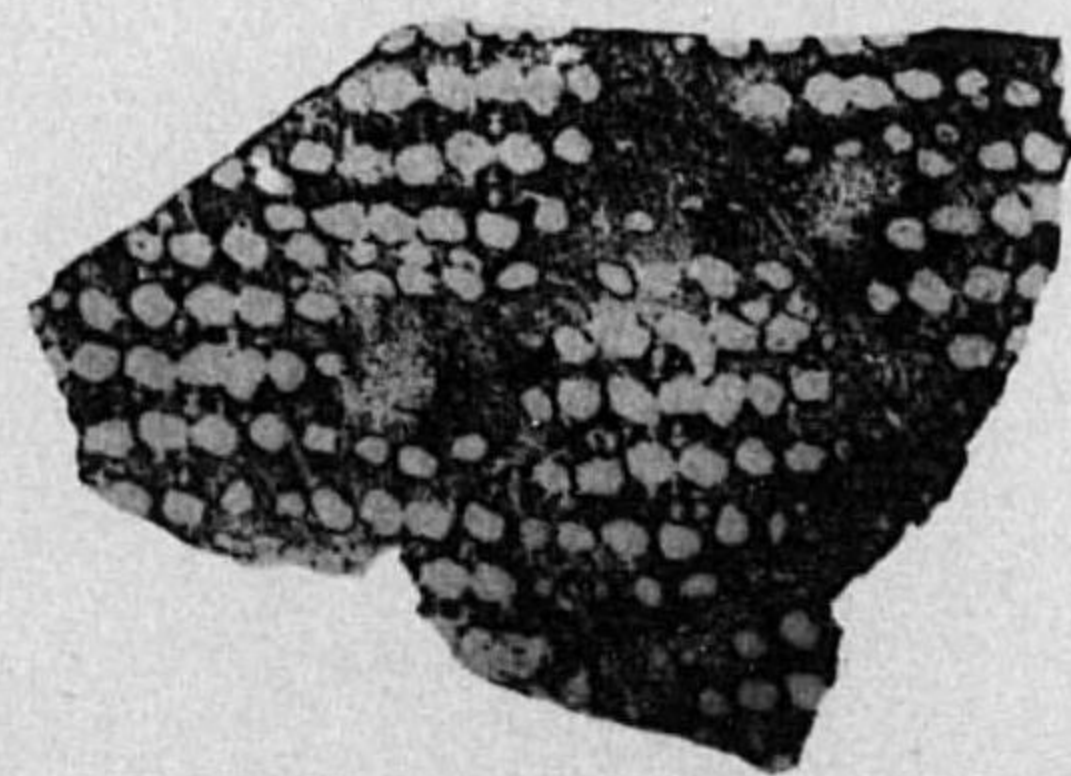
121



123



122



121—123

土城出土平瓦斷片 三種

きの時内側より縦てに鎌の如き刃物を以て四ヶ所切り付くること厚さの約三分の二以上に至り此切截線に随ひ打ち裂けば容易に四枚の平瓦を得るのである樂浪平瓦の兩側邊が内面よりの切截痕を有するは之れが爲めにして内面の横行繩文は蓆を桶側様の周圍に横に巻きしが爲め又布目は布を巻きしが爲め又本文第一一九圖の如く繩文布目文の重なるは布を巻きし上を更に蓆を巻きし爲めの痕跡にして外面の縦行繩文は外部よりの打痕である又内面に往々縦てに指頭擦過痕を存するは桶側を抜き去り蓆又は布を取り去りし後瓦工が慣習的に指頭を以て内面を下より上に向ひて擦過した者の様である是れは或は軟質の粘土圓筒が内側に向ひ歪み易き性質を匡正するの用意に出た者かも知れぬ

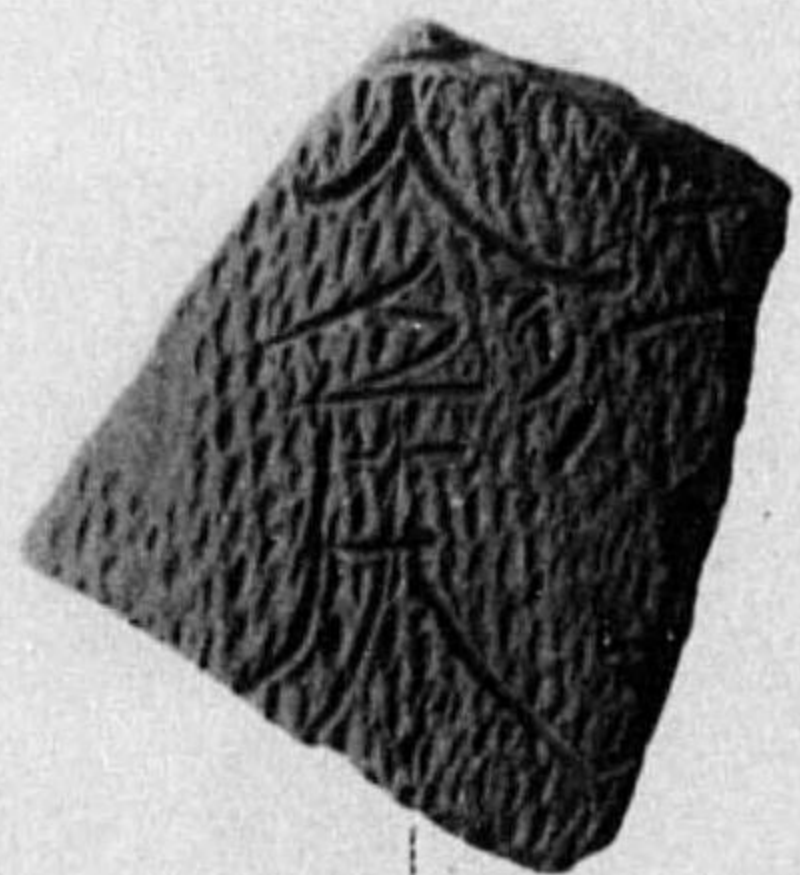
更に平瓦内面の幾何學的打痕は如何にして生じたか此打痕は本文第一二〇圖乃至一二三圖の如く色々の文様をあらはしてゐるが是れは今も朝鮮の陶工が粘土を以て陶器を造る際大體の形成りし後粘土を打ち締めんが爲め行ふが如く樂浪郡時代に平瓦製作の時粘土圓筒の内部に一方に短き把手を有し他方に或文様を陰刻せる木片又は陶片本文第一四七圖第一四圖參照を左手にて當てがひ右手にて絲卷きの叩き板を以て外部より其部分を打締め打固め以て瓦質の堅緻を期したのである本文第一二〇圖及第一二一圖は既に圓筒の内部に横行繩文の着きし後打締めの爲めの木片に陰刻された一種の幾何學的文様が處々に打痕を遺したのである本文第一二二圖には點滴様文第一二三圖には田字様文の打痕があらはれてゐる特に第一二二圖の瓦片の外部には外より打ち付けた絲卷叩き板の打痕が割合に明かに見ら

る。

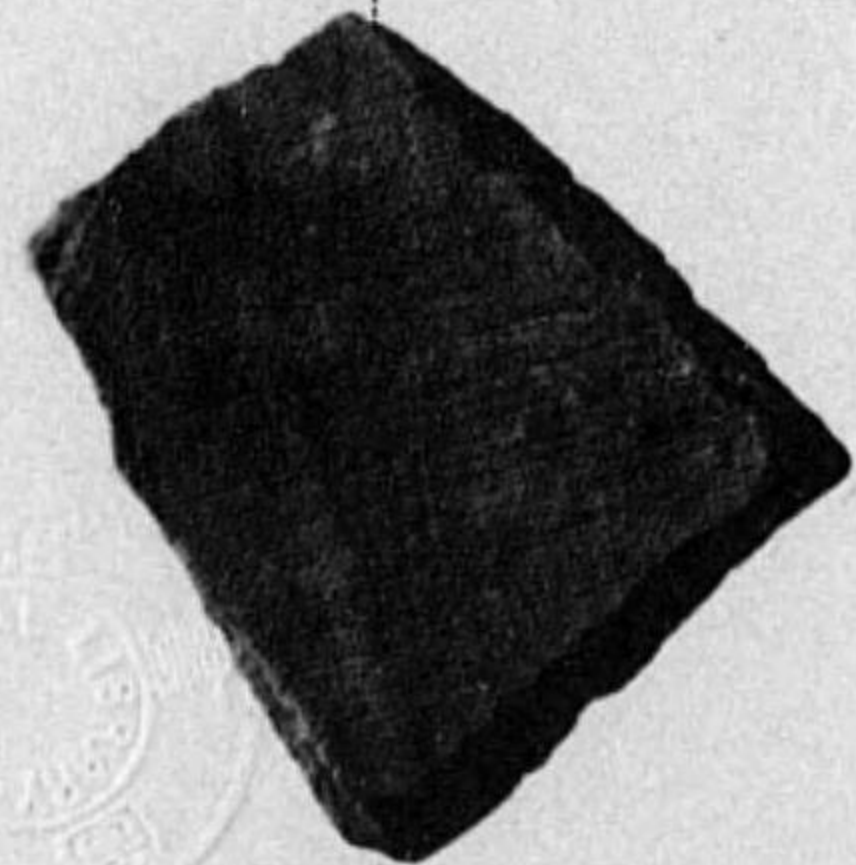
平瓦の内面又は外面には稀に篋書の文字がある本文第一二四圖は外面に施せし者にして何といふ字か讀むことができぬ第一二五圖亦外面に作りし者、俟の字だけは讀めるが他は殘缺の爲め不明である第一二六圖は内面に篋書せし者上の字は上半を失ひたれども孫であらう次は保である其次は唯僅かに頭部を少しく遺せるのみにて到底讀むことができぬ

(二) 丸瓦 丸瓦の破片亦平瓦と同様樂浪土城内及び粘蟬土城内に多く散亂してゐる幸に完全なる者が二個山田氏の蒐集にかゝり今總督府博物館の手に歸してゐる本文第一二七圖の丸瓦は頭部に次の丸瓦の底部を承けが爲めの一段低き作り出しがある此作り出しを除き長さ一尺七寸九分作り出しの長さ一寸徑は頭部五寸二分底部六寸三分高さ三寸八分にして厚さは七分稍軟質にて灰色を呈してゐる第一二八圖の丸瓦は同形式にして稍小長さ一尺一寸三分作り出しの長さ一寸四分徑は頭部四寸六分底部五寸二分高さ二寸六分厚さ四分前者と同質である共に内面には横行繩文をあらはし外面には繩文打痕を遺せるが甲は縦行斜行相交はり乙は大體縦行勝ちである瓦の左右兩端の縁邊は外面より厚さの大部分を切り打ち裂きたる形跡を存してゐる

其製作の方法は亦今日朝鮮瓦工の猶襲用せるが如く廻轉臺上に長く圓き棒の下部を一段小さく作り出せる者を立て其周圍に平瓦の場合の如く席を巻き其上に粘土を所要の厚さに切り取りし者を巻き付け絲卷打板を以て廻轉臺を回しながら外部より粘土を打締め打固む



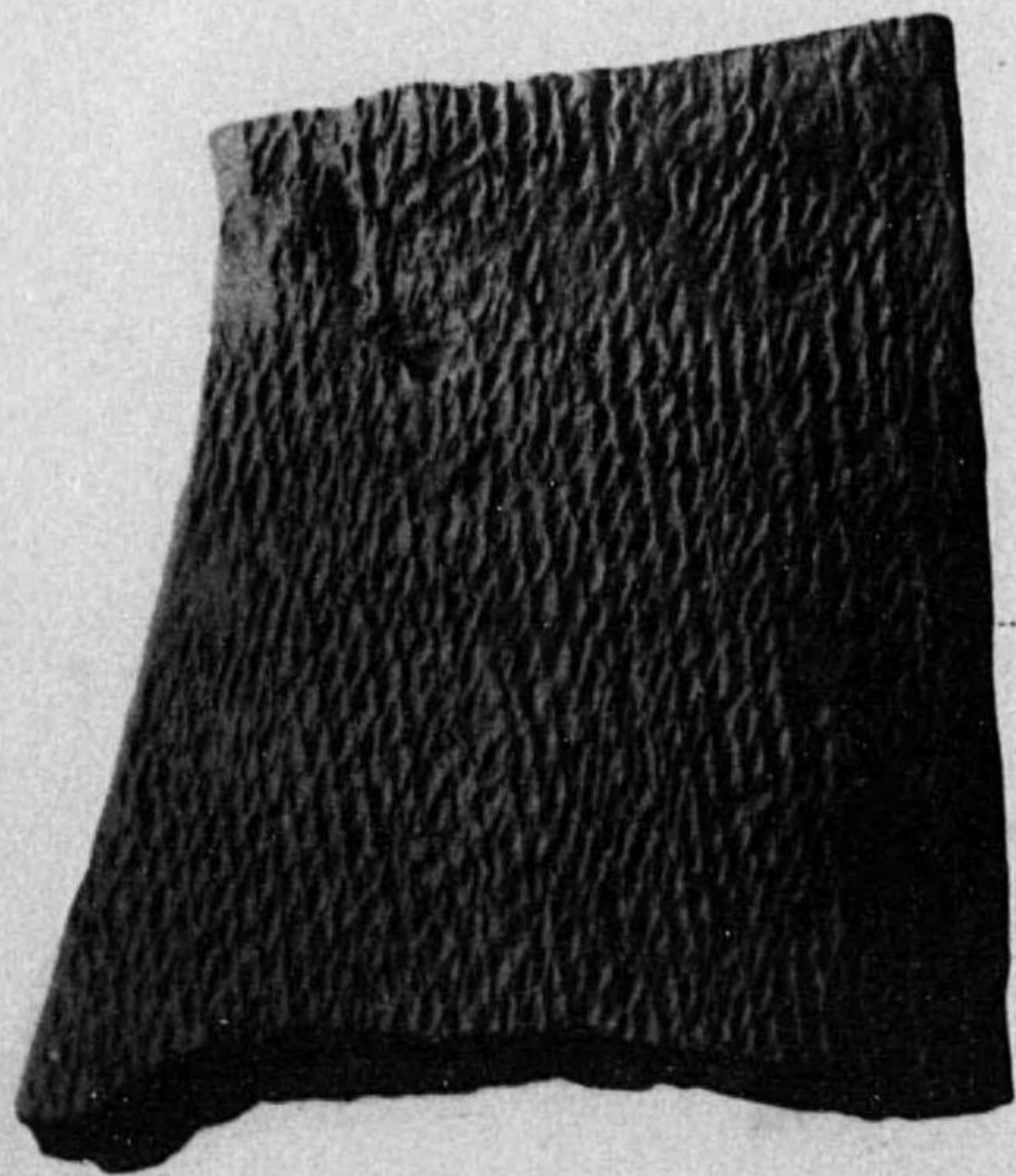
125



124

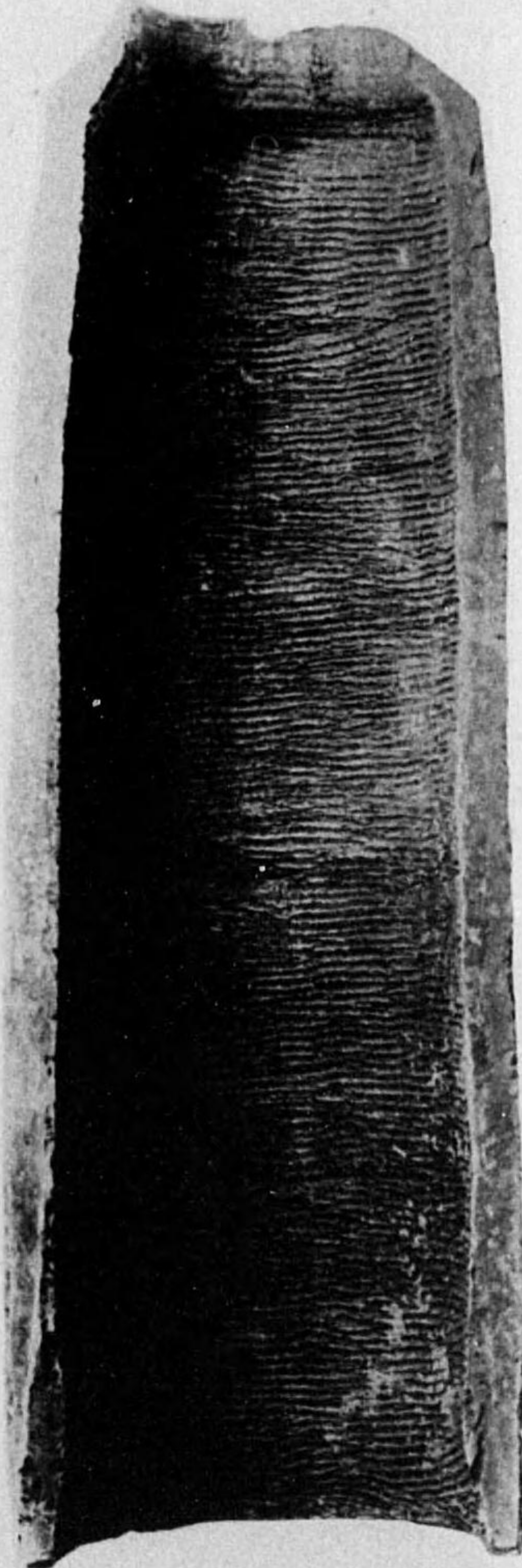


126





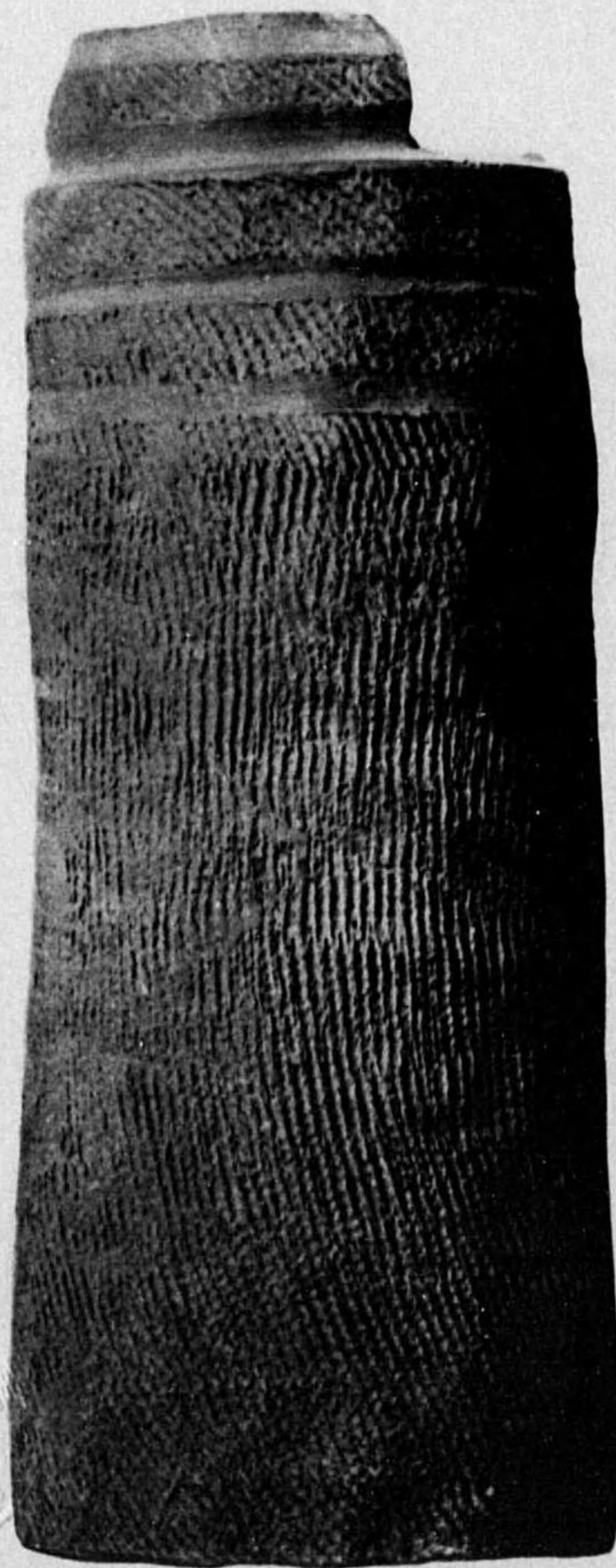
表



裏

127

土城出土丸瓦 (總博藏)



表

128



裏



表

129



裏

128

土城出土丸瓦 (總博藏)

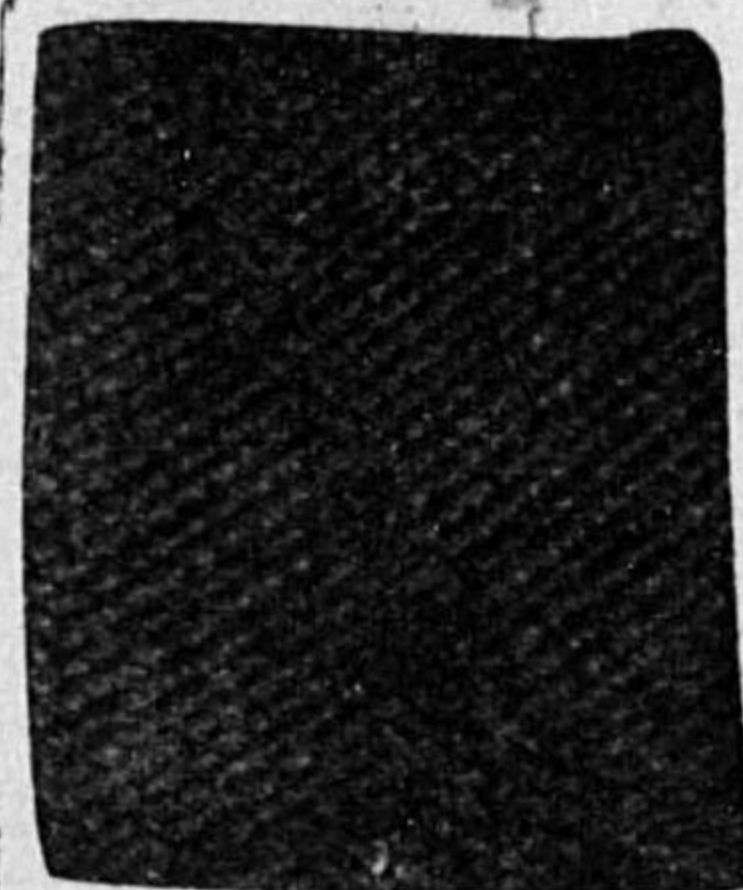
129

同 丸瓦斷片

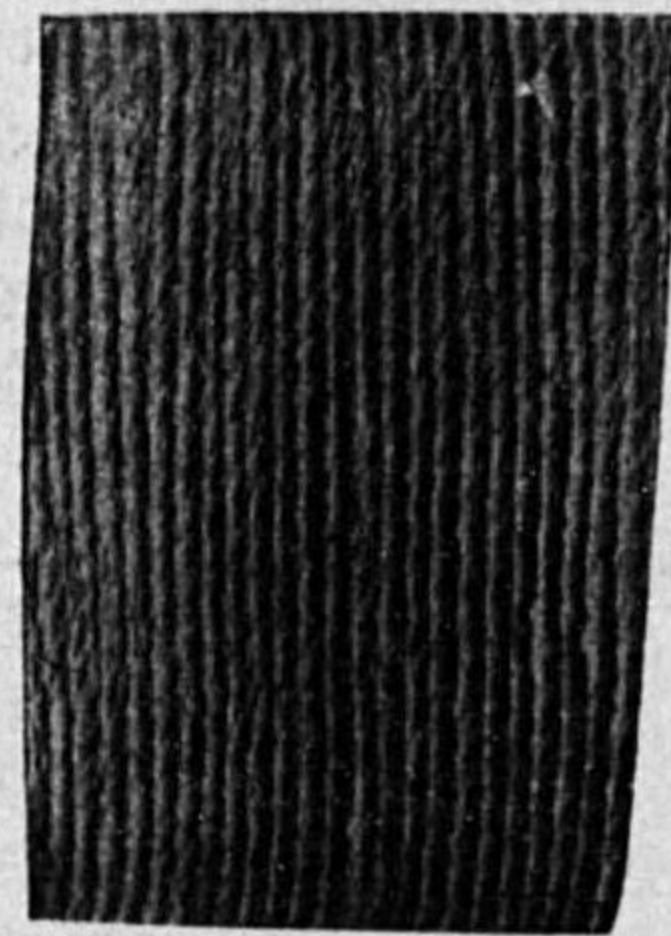
ること平瓦製作の時と同じく然る後上より丸棒を抜去り席を取出しかくして出来たる圓筒を他に運びて乾燥せしめ生乾きの時内部の下方より上に向ひ切截線を作ること前後二條に



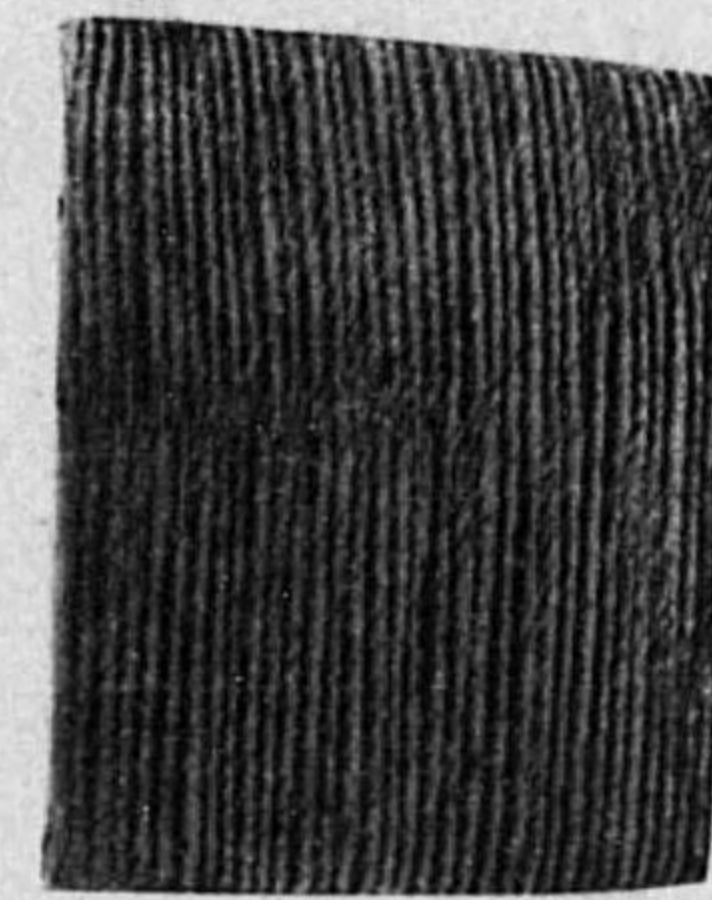
130



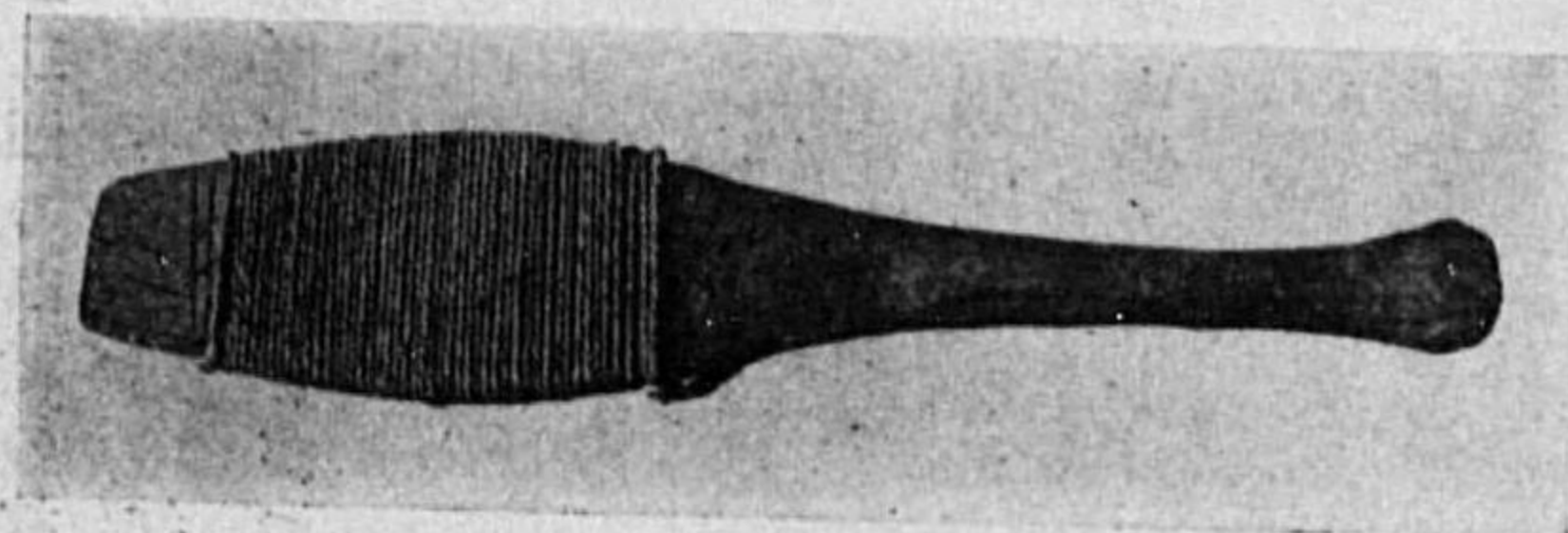
131



132



133



134

130—133 試製平瓦繩文 四種
134 麻絲卷叩板

して此切截線より打破れば二箇の丸瓦が出来る樂浪丸瓦内外の繩文左右縁邊の切截痕は此製法を裏書きする者である又丸棒の周圍に席の代りに布を巻くこともある其時には本文第

一二九圖の如く内面に布目痕をあらはすのである

本文第一三四圖の叩き板は今朝鮮に於て瓦工の使用せる者にして關野は之れに麻絲を卷きたる者を以て粘土の表面を打ち叩き本文第一三〇圖乃至第一三三圖の四種の打痕を試みに作つた其麻絲の太細と叩き方により生じたる打痕文は樂浪出土の平瓦丸瓦の打痕と殆ど一致してゐる是れにより既記の如く樂浪郡時代瓦製作の方法を想像することができると思ふ

第三章 陶器

一 陶器の種類

漢代には墓中に明器として多くの瓦器即ち陶器を納れた後漢書禮儀志によれば陵中に藏めし瓦器は次の如くである

甕三大さ各三升を容る各甕それ〳〵醴醢及び屑を容る

甗二大さ各二升を容る各甗それ〳〵醴及び酒を容る

瓦甕一、瓦甗二、瓦釜二、瓦甗一、瓦甗十二各五升を容る

瓦案九 瓦大杯十六各三升を容る、瓦小杯二十各二升を容る

當時の貴族一般人民はそれ〳〵分に應じて此種の明器を墓中に納れたであらう樂浪郡の古墳中余等の發掘せし者より多種多様の陶器を獲しことは既に前に説いた又近年土民が盜掘を企てしより其出土品も多量に上り是等は大抵好事家の手に歸した今從來出土せる陶器の種類を擧ぐれば

甕壺杯勺、甗案、盤、槩陶印

等にして特に明器として模造せし者には左の如き者がある

釜、甗井鼎、陶雞、陶狗、陶鸞、陶豚

二 陶器の性質

樂浪出土の陶器は其焼き方より次の三種に分かつことができる

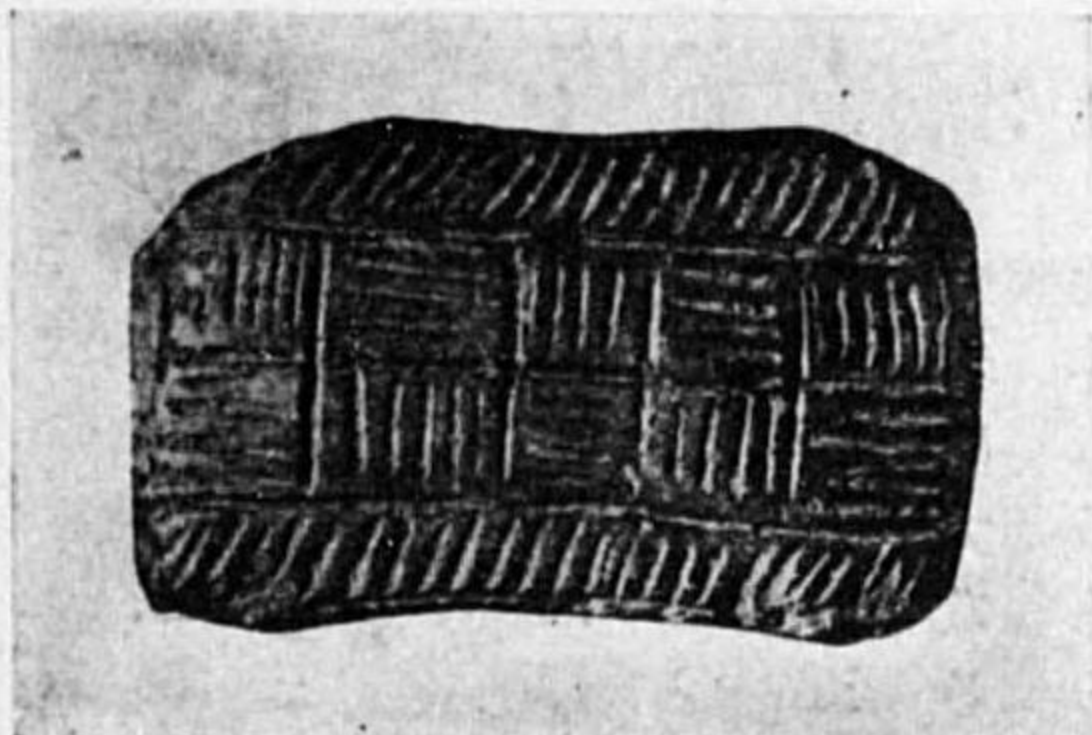
(一) 厚手白質 (二) 薄手灰黒質 (三) 綠釉赤質

(一) 厚手白質陶器 主として甕及び壺の類にして粘土に砂粒を混じて焼成せし者である胎質灰白色を帯び頗る厚く且堅い其表面は白土にて塗りしかと思はるゝほど白い甕壺共に口濶く頸短く腹大に底に向ひて窄まくなつてゐるのが特色で往々下部に繩文打痕を有し其口邊の手法は圖版第五〇三圖乃至第五〇五圖の斷面圖に見るが如き者最も普通である

(二) 薄手灰黒質陶器 此種の者は大なる甕を除くの外樂浪時代のあらゆる陶器に廣く應用せらる水簸せる粘土にて胎を作れるものにして其質緻密なれどもあまり硬からず且頗る



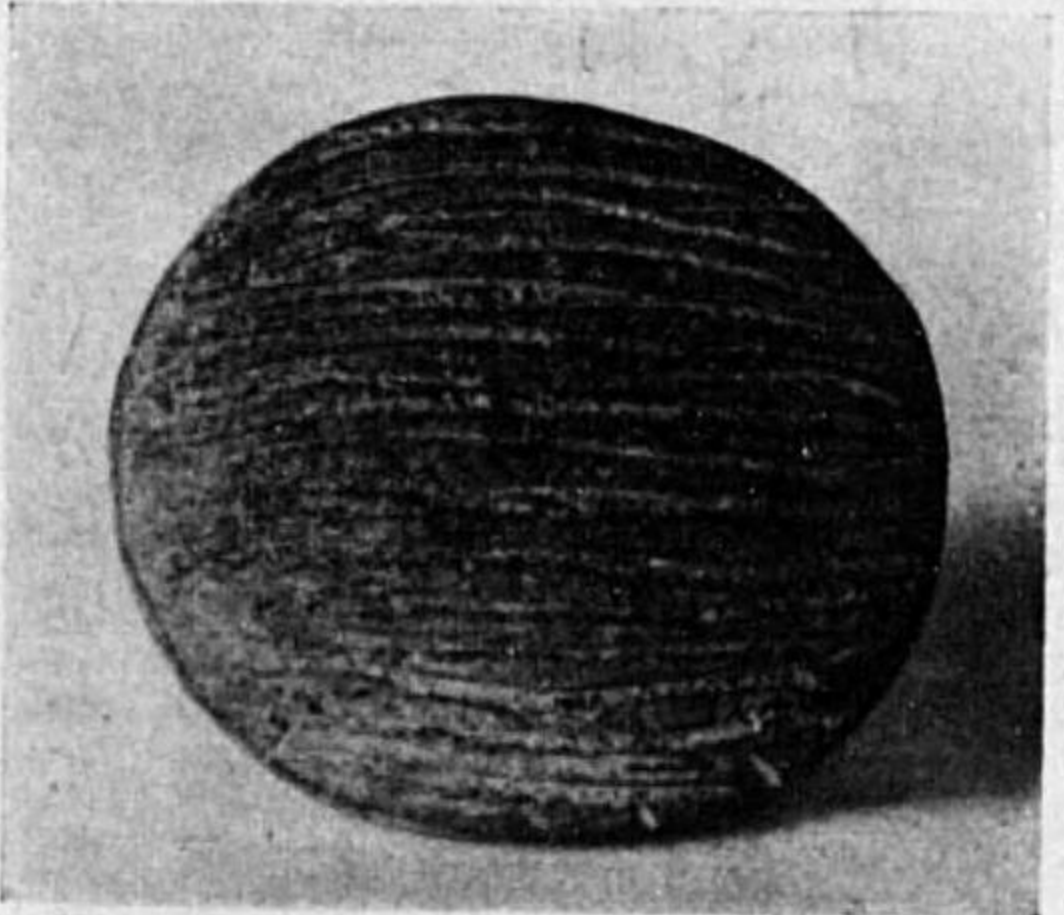
148 支那出土漢把手附陶片 (關野貞藏)



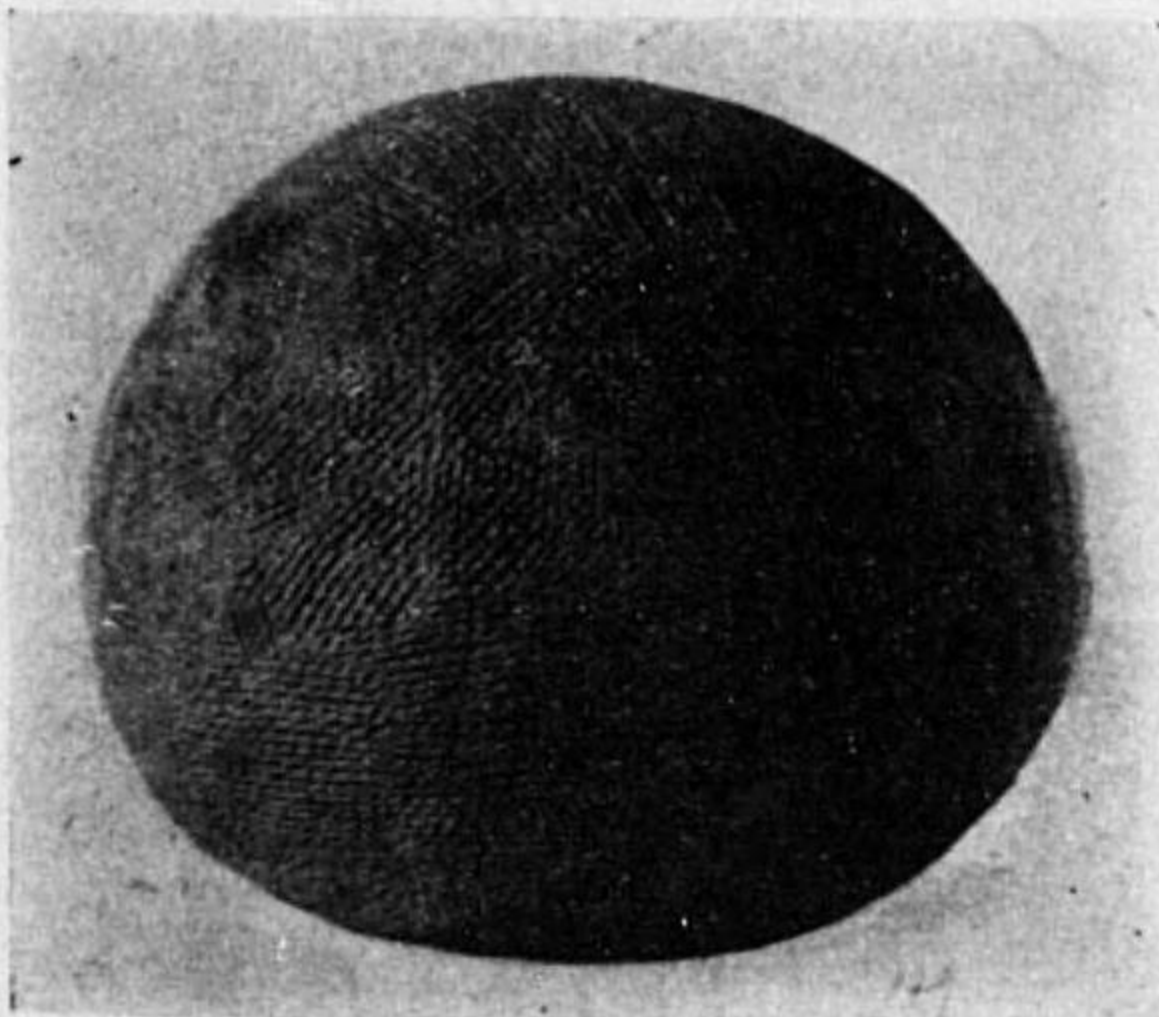
148 支那出土漢把手附陶片 (關野貞藏)



147 支那出土漢把手附陶片 (總博藏)

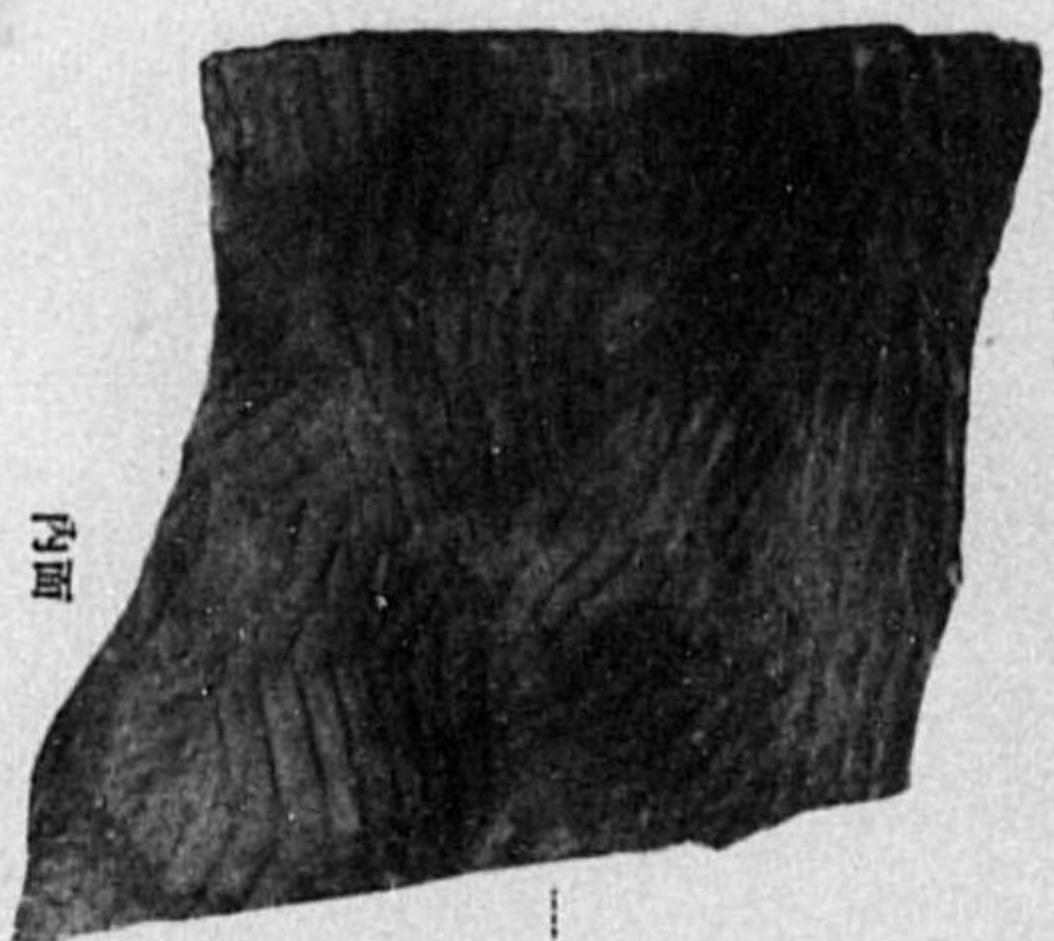


147 支那出土漢把手附陶片 (總博藏)



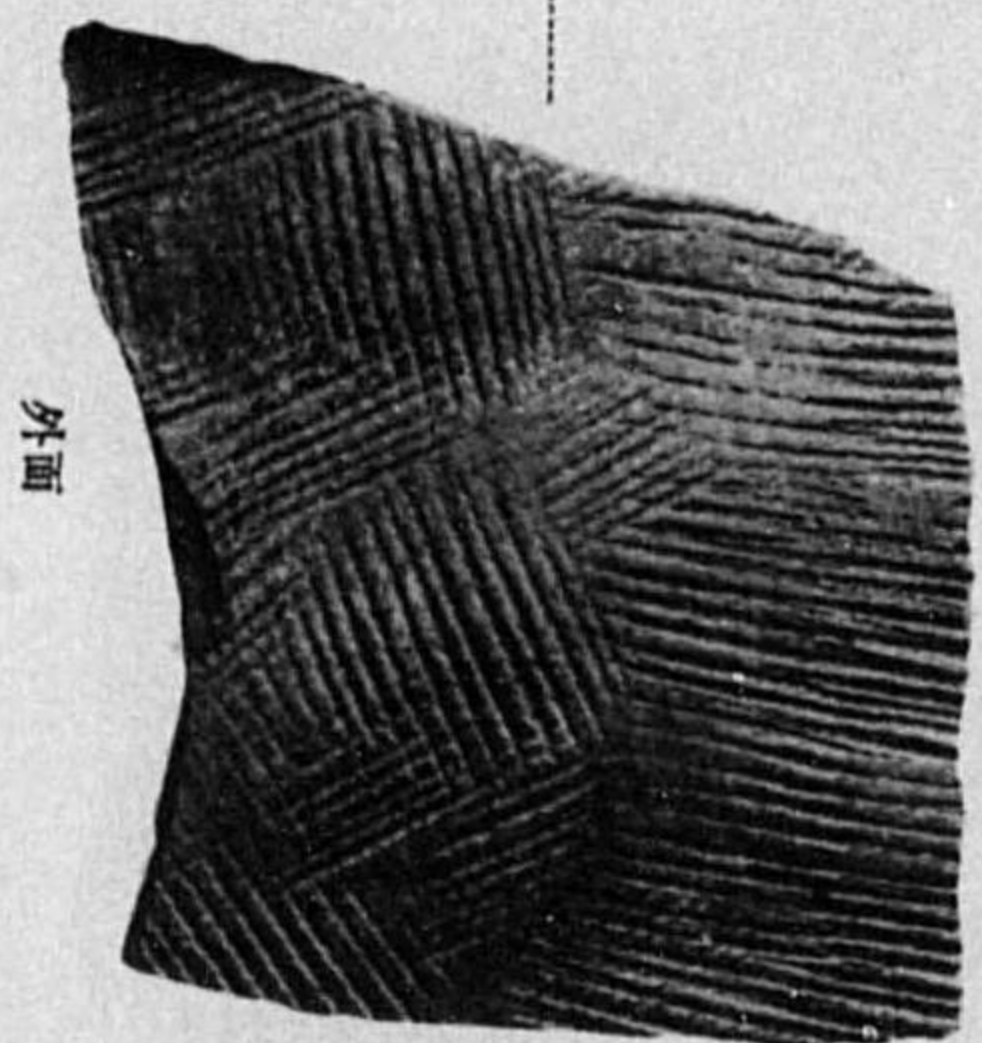
149 試製陶壺繩目文

薄く内部灰色にして外面黒灰色を呈してゐる此種の壺は外部特に胴より底邊にかけて本文第一三五圖乃至第一四六圖の如き諸種の繩文打痕を有し内部に多く第一〇九圖の如き打痕を有してゐる是れは胎土を締固むる爲め或文様を陰刻せる把手附木片又は陶片を内部に當て外より有柄の繩卷きの叩き板を以て打ち固めた痕跡であると思ふ



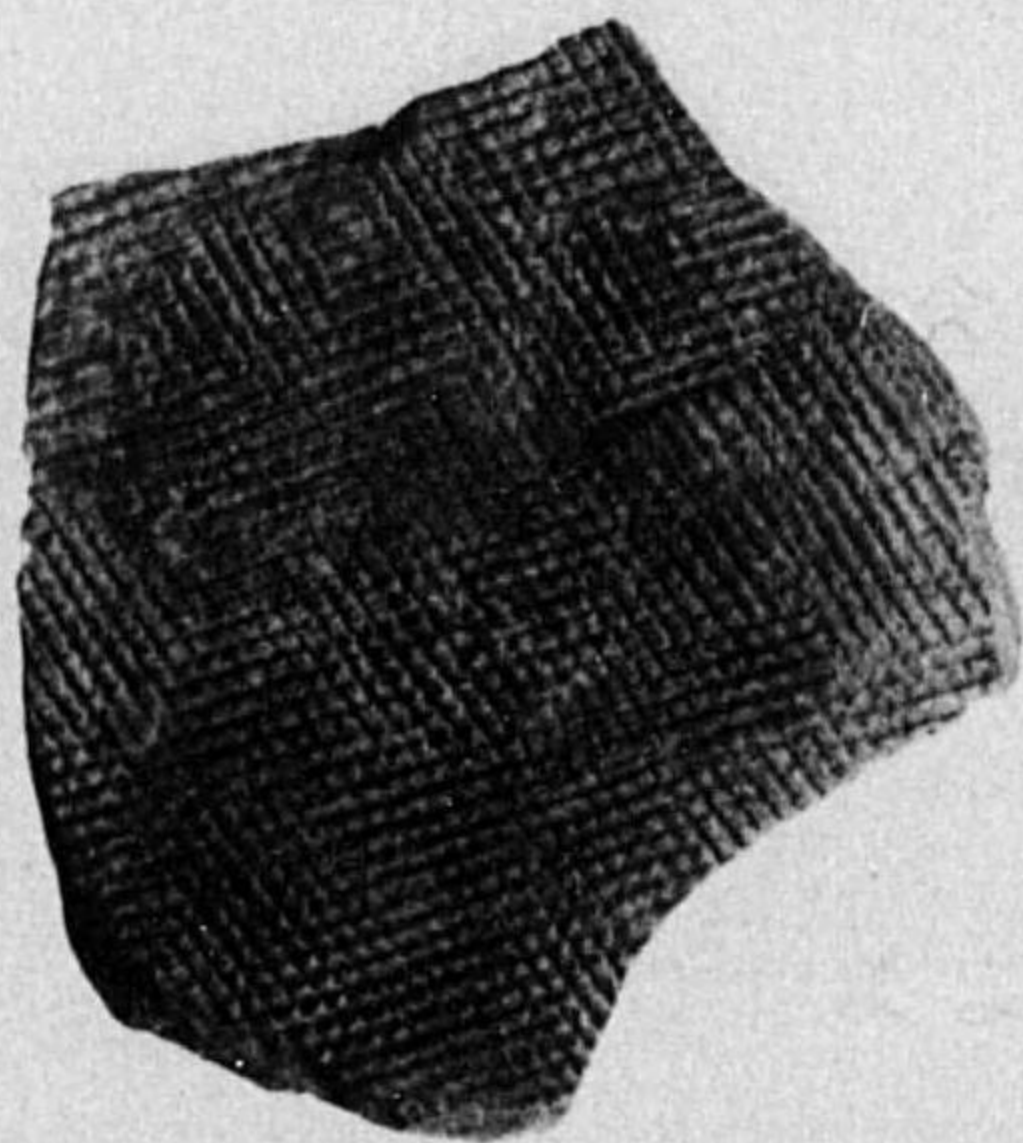
内面

142

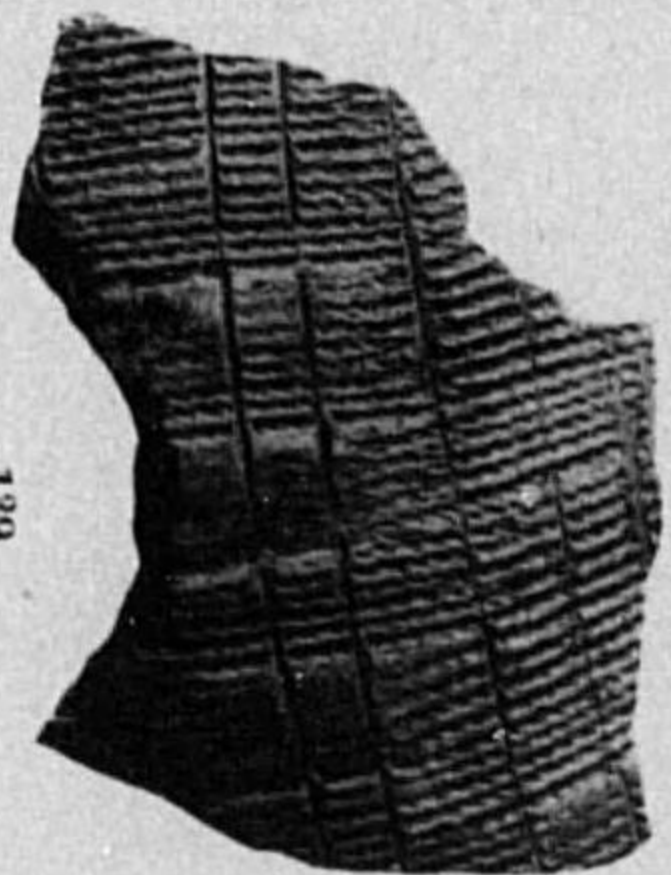


外面

142



141



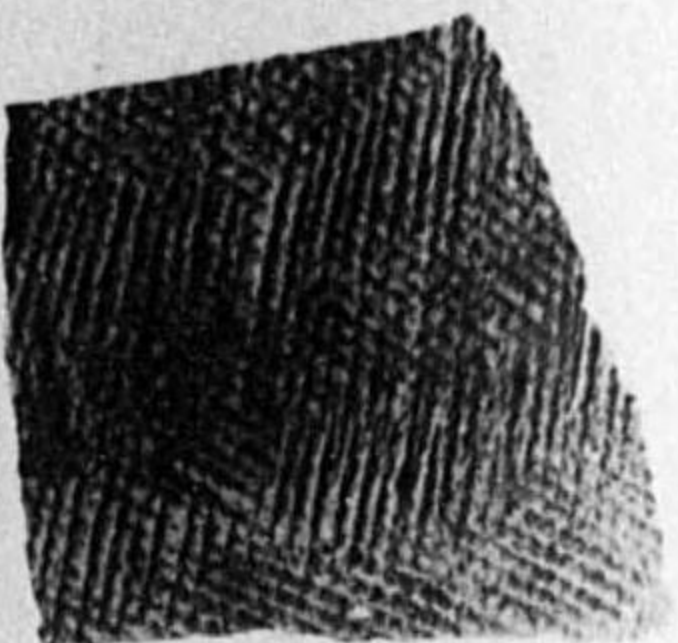
139



136



140



138



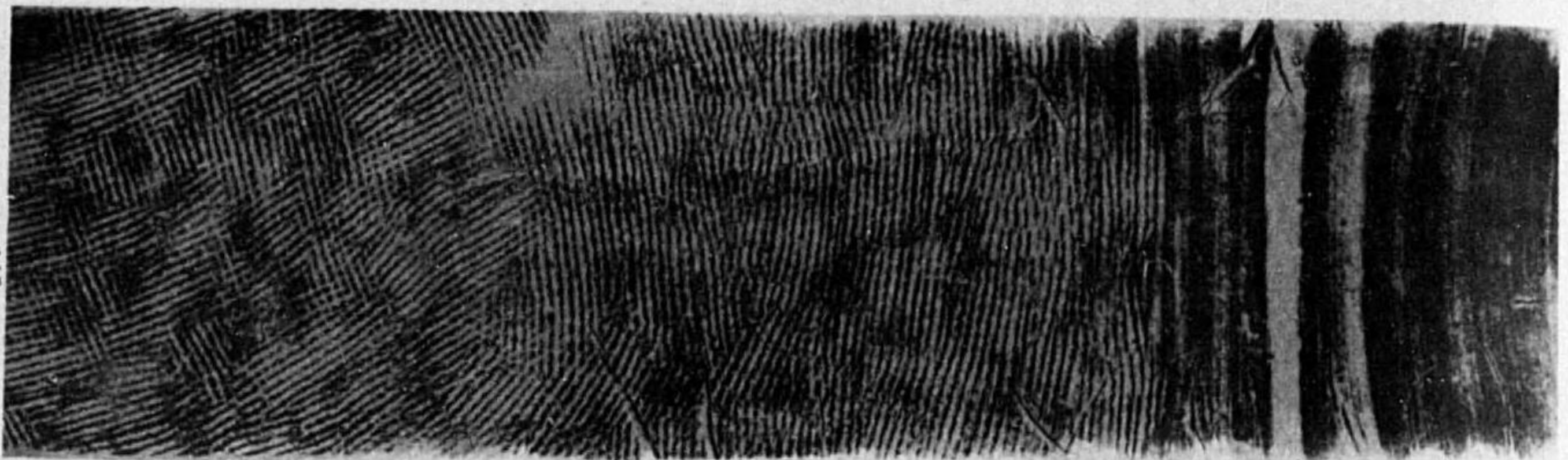
135



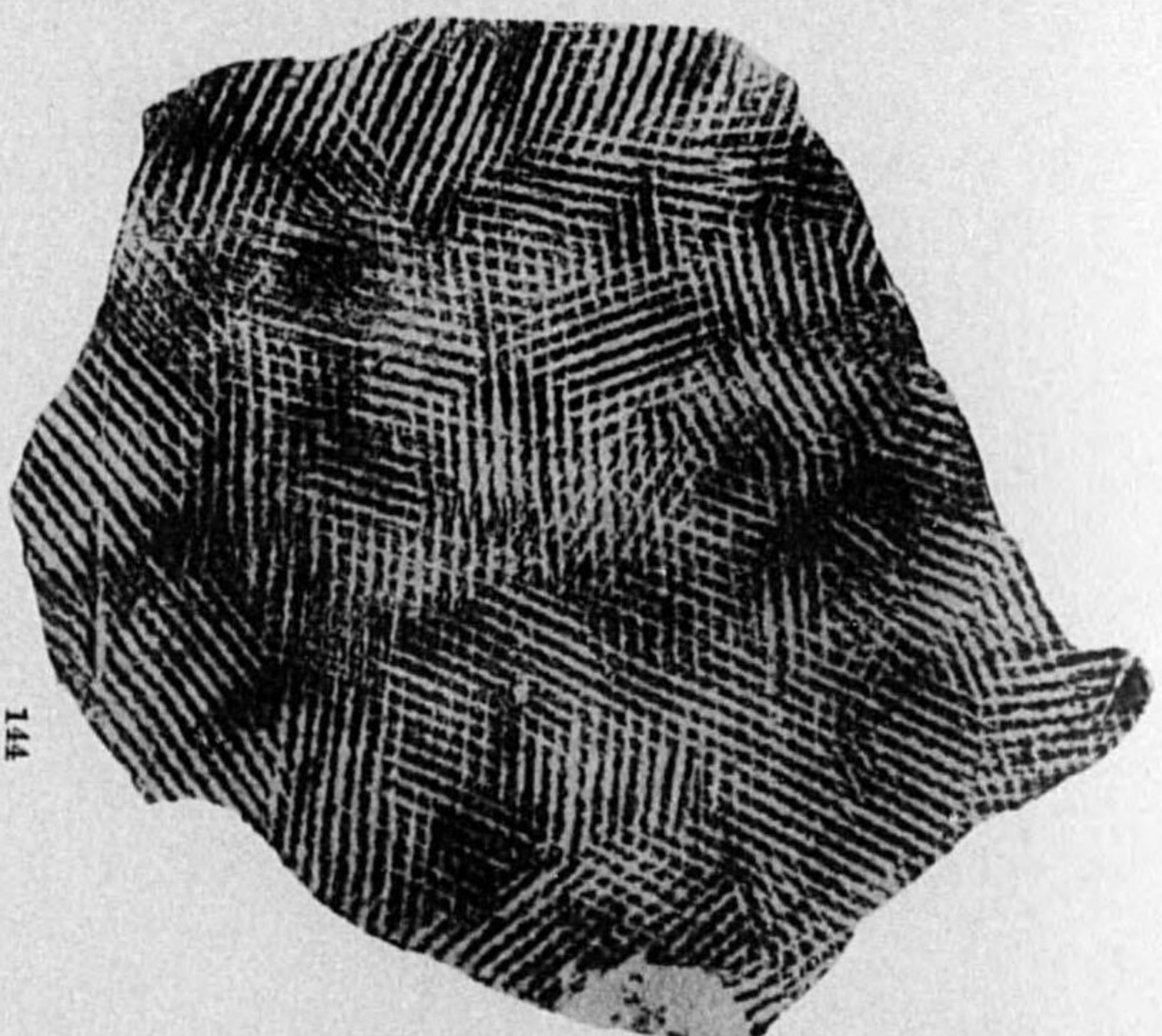
137

135-142

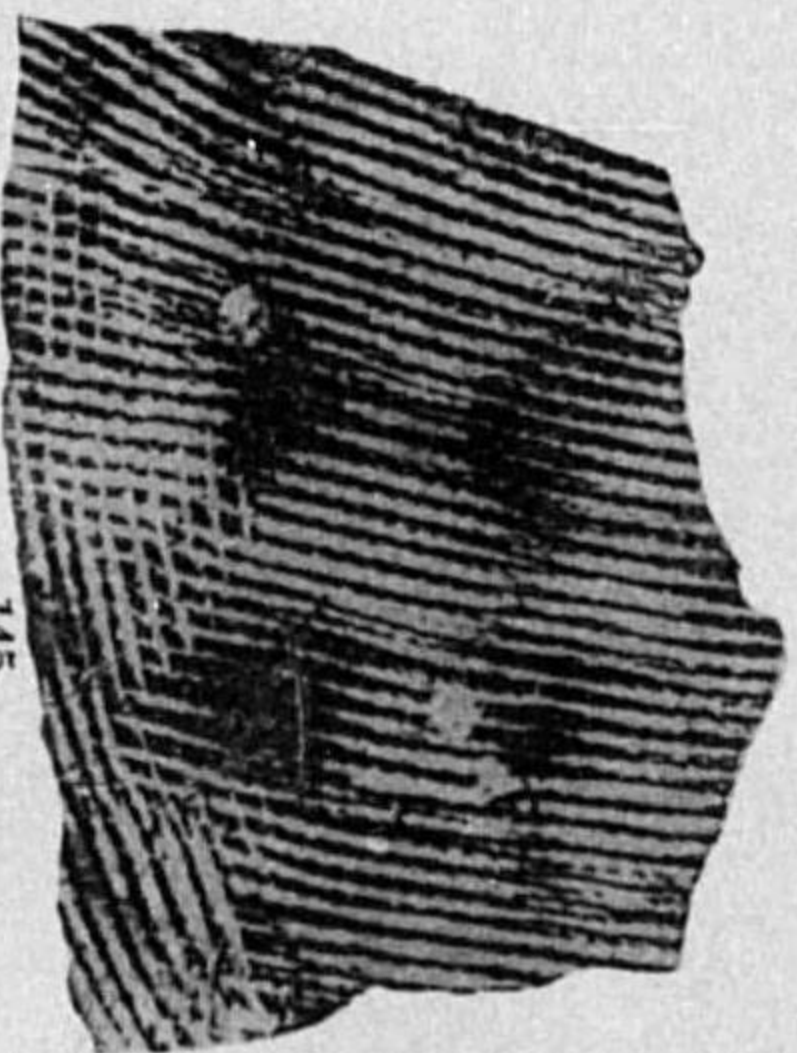
土城出土陶壺断片八種



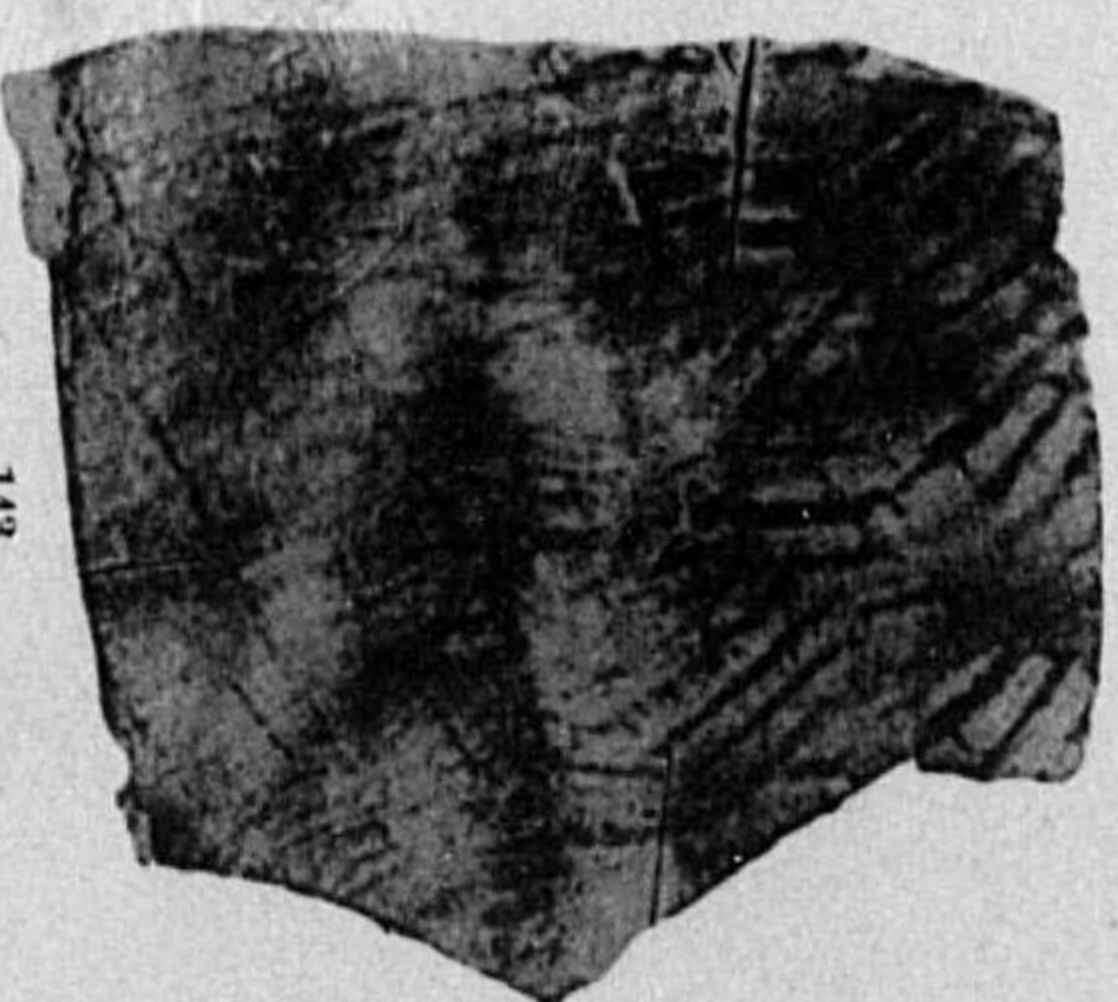
146



144

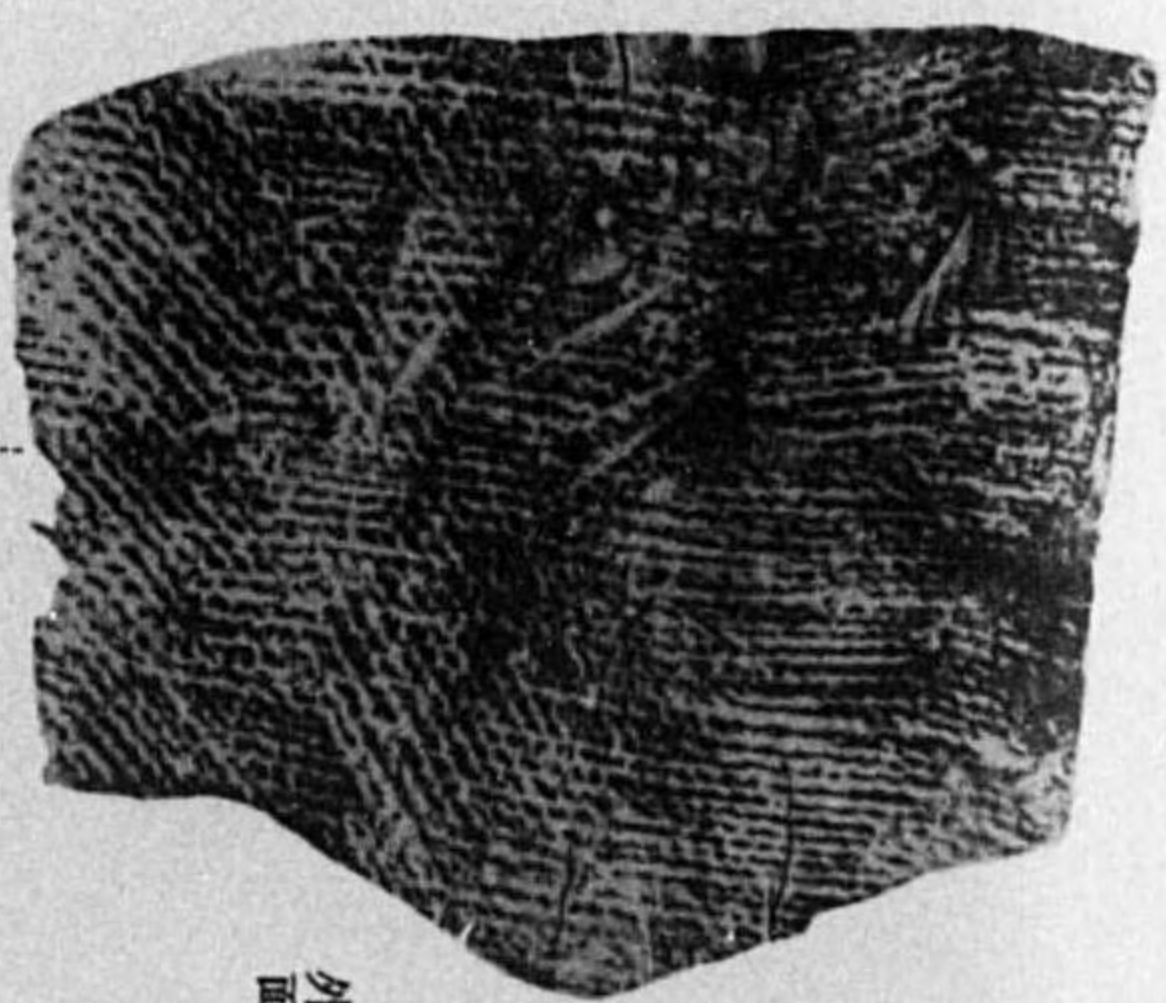


145



143

内面



外面

143—146

大同江面出土陶壺斷片拓本 四種





150 麻絲卷叩板

本文第一四七圖第一四八圖は關野が大正七年北京にて購ひし者にして漢代の把手附陶片である其下面には壺又は甕の内面に適應せしめんがため多少の膨みを有し又簡單なる文様を陰刻してゐる是れが前記の如く壺甕の内面に一種の打痕を印するのである本文第一五〇圖は關野が試みに作つた麻絲卷叩板にして第一四九圖は之れを以て粘土製壺の底側部を叩いて樂浪壺と同様の打痕文を得たのである

(三) 綠釉赤質陶器 漢時代には支那では既に綠釉の陶器が發達してゐたから樂浪郡にも必ず存在したるべきを思ひ余等は永く注意を怠らなかつた大正十一年五月關野が平壤に往きし時山田針治郎氏の蒐集品中黃綠釉の壺を二個見た圖版第一二三九圖第一二四〇圖而其形態手法と其釉の黃綠色なりしとより果して樂浪の遺品なりやを疑しく思つた而るに當時關口半氏の藏品中に綠釉の小盃あるを見た圖版第一二四一圖氏は平壤の安東理髮店主より購はれしよしにて店主は猶他に綠釉陶器を所持せりと話されたそこで氏を介して其廿一日總督府博物館の爲めに之を購入した即ち圖版第一二四五圖の綠釉井幹である是れ余等が始めて樂浪の綠釉陶器を知つた時である當時余等は元平壤覆審法院長勅使河原健之助氏が亦一の綠釉燈架の如き者を所藏せらるゝことを聞いた其年八月關野は仙

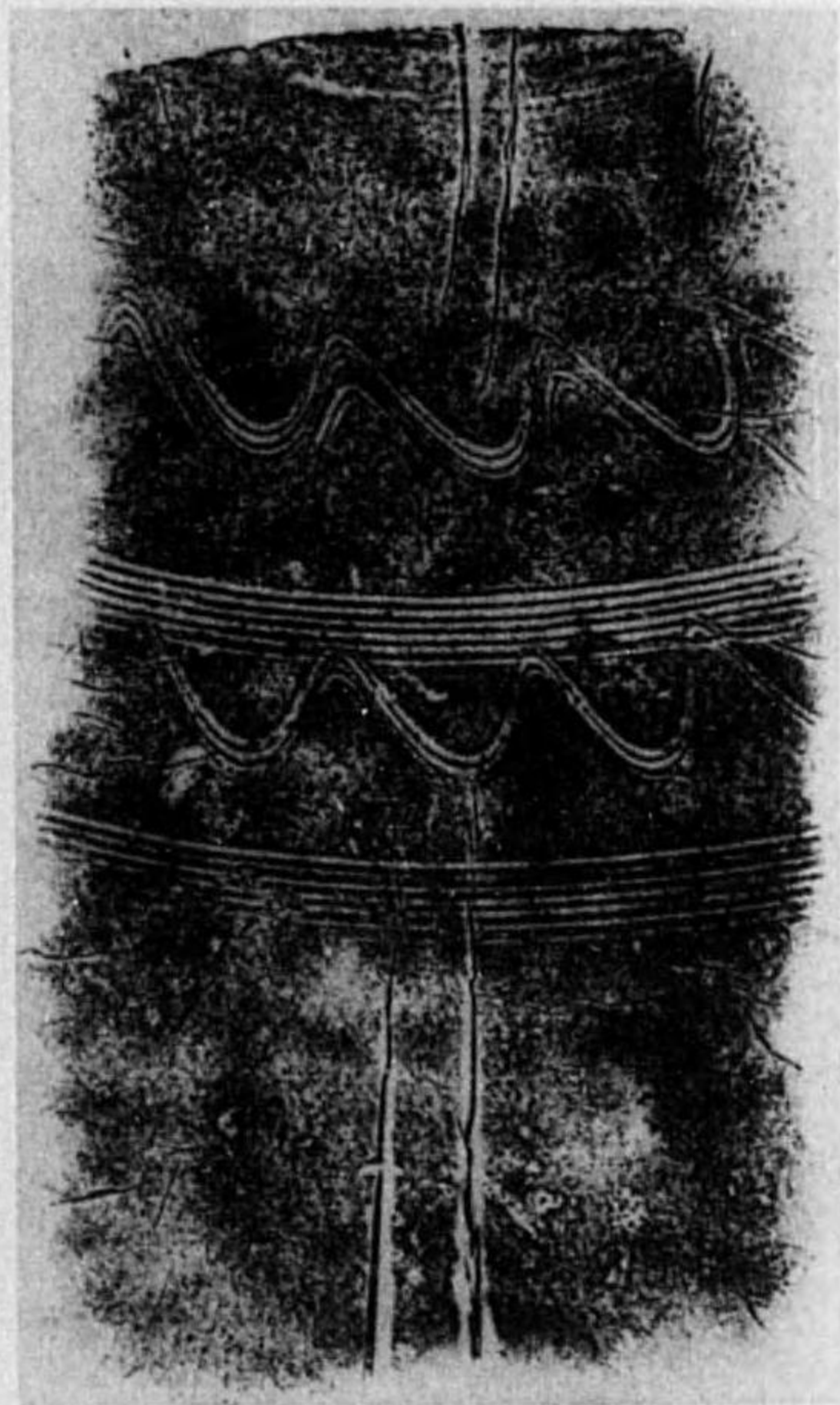
臺に氏を訪ひて之を一覽することを得た(圖版第一二三六圖)其頃までに知られし綠釉陶器は僅に以上の數點に過ぎざりしが大正十三年の四五月頃樂浪古墳の盜掘盛んに行はれし時意外にも多くの此種の遺物が發見せられ綠釉陶器の殉葬亦決して少きにあらざることが明かになつた

此綠釉陶器は胎質灰黃褐色にして稍硬く其表面に綠色の釉藥を施してゐる其綠色は恰も西瓜皮の如く美しき色澤を有する者もあれば既記山田氏蒐集壺の如く殆ど色に近き黃綠色を呈する者も稀にある余は始め多少の疑問を抱きしが後に漢時代にも既に黃綠釉があるから之を樂浪時代の者と定めて差支ないと思ふやうになつた

三 陶器表面の裝飾

陶器の表面は繩文打痕を有せる者もあれば平滑に仕上げられた者もある又往々篋書・櫛搔きの裝飾文様が施されてゐるものもある稀には表面に色彩を施した者も文様を描いた者もある

櫛搔文様には直線文と波文・點畫文とがある本文第一五一圖第一五二圖は波文と直線文とを交互層々に重ねし者にして波文は頗る輕快の趣がある第一五三圖亦中央に波文上下に水平直線文を置きし者其波文は後の古新羅時代の陶器に施されし者に似てゐる而も是れは必しも彼の先驅ではあるまい第一五四圖亦櫛搔にて所々に文様を置きし點畫文と直線文と一



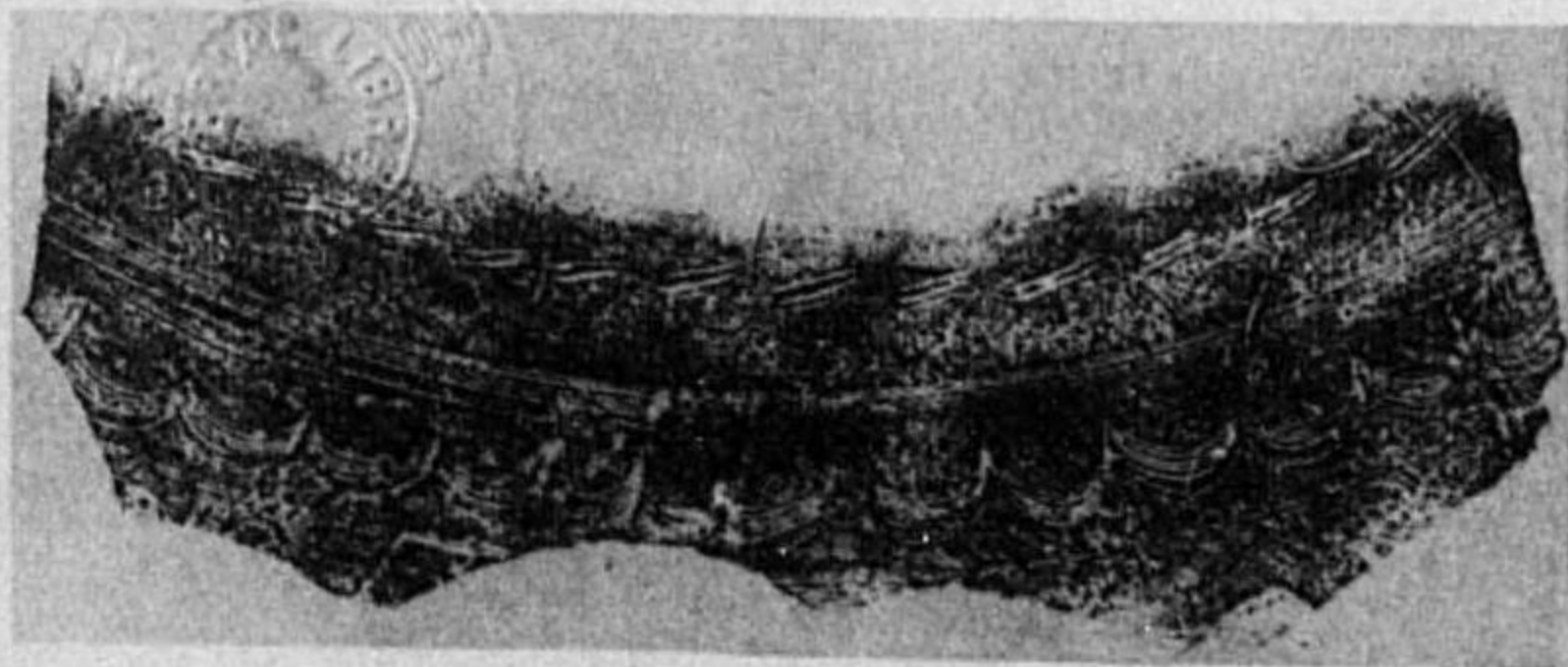
151



153

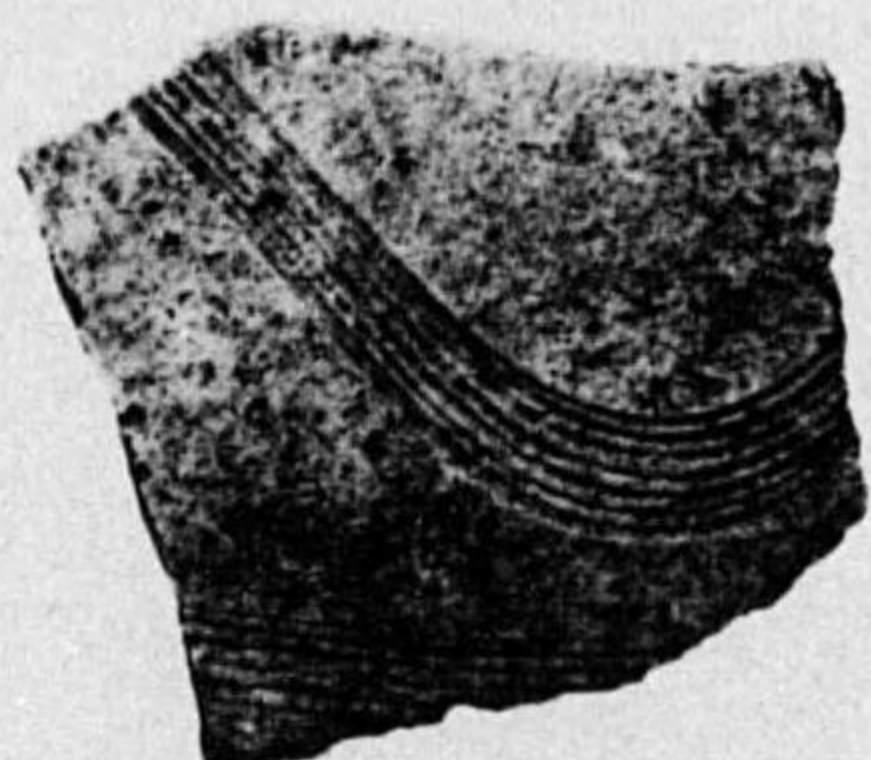


152



154

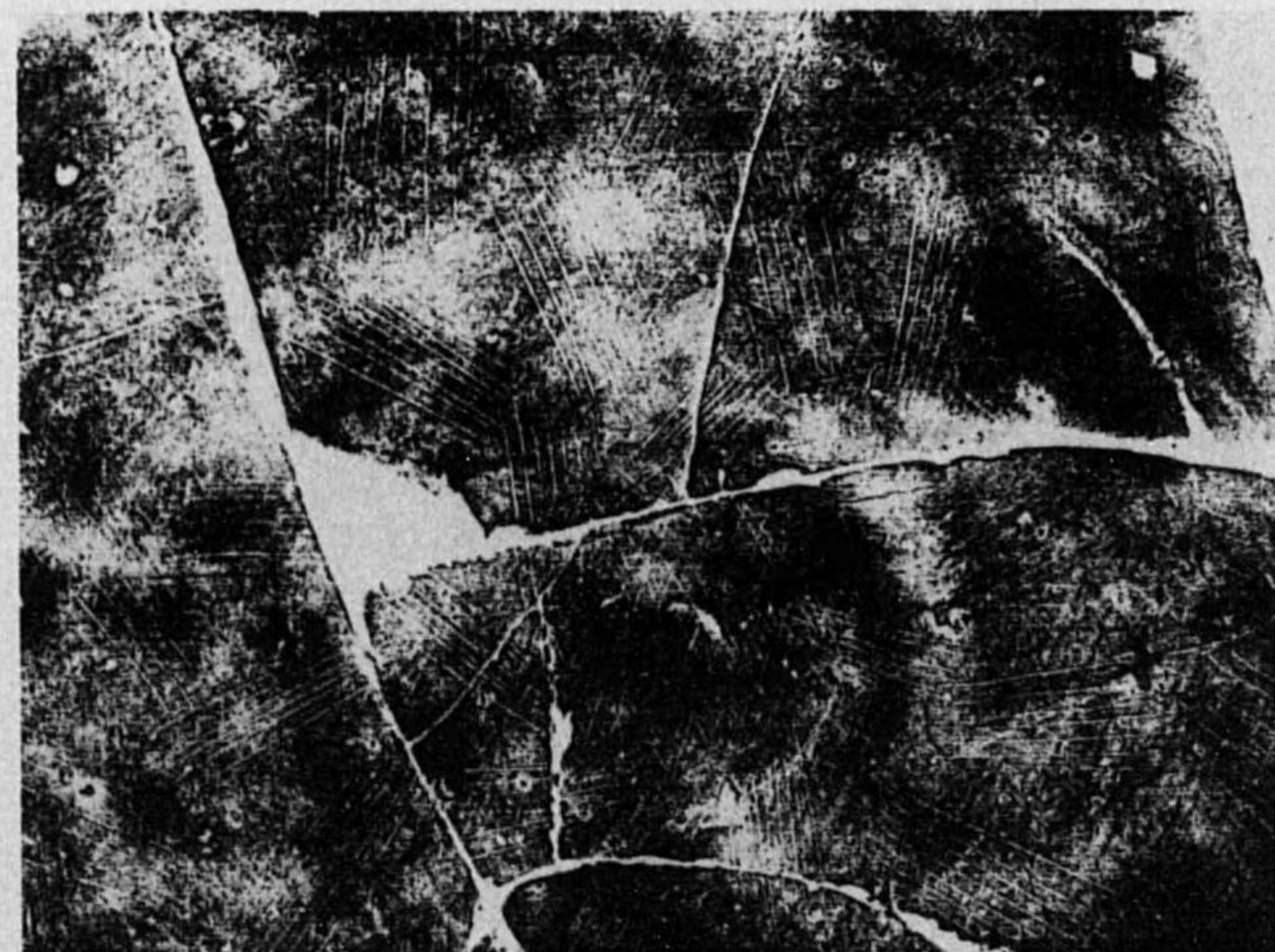
151—154 大同江面出土陶壺篋書文様 四種



155



156



157

155—157

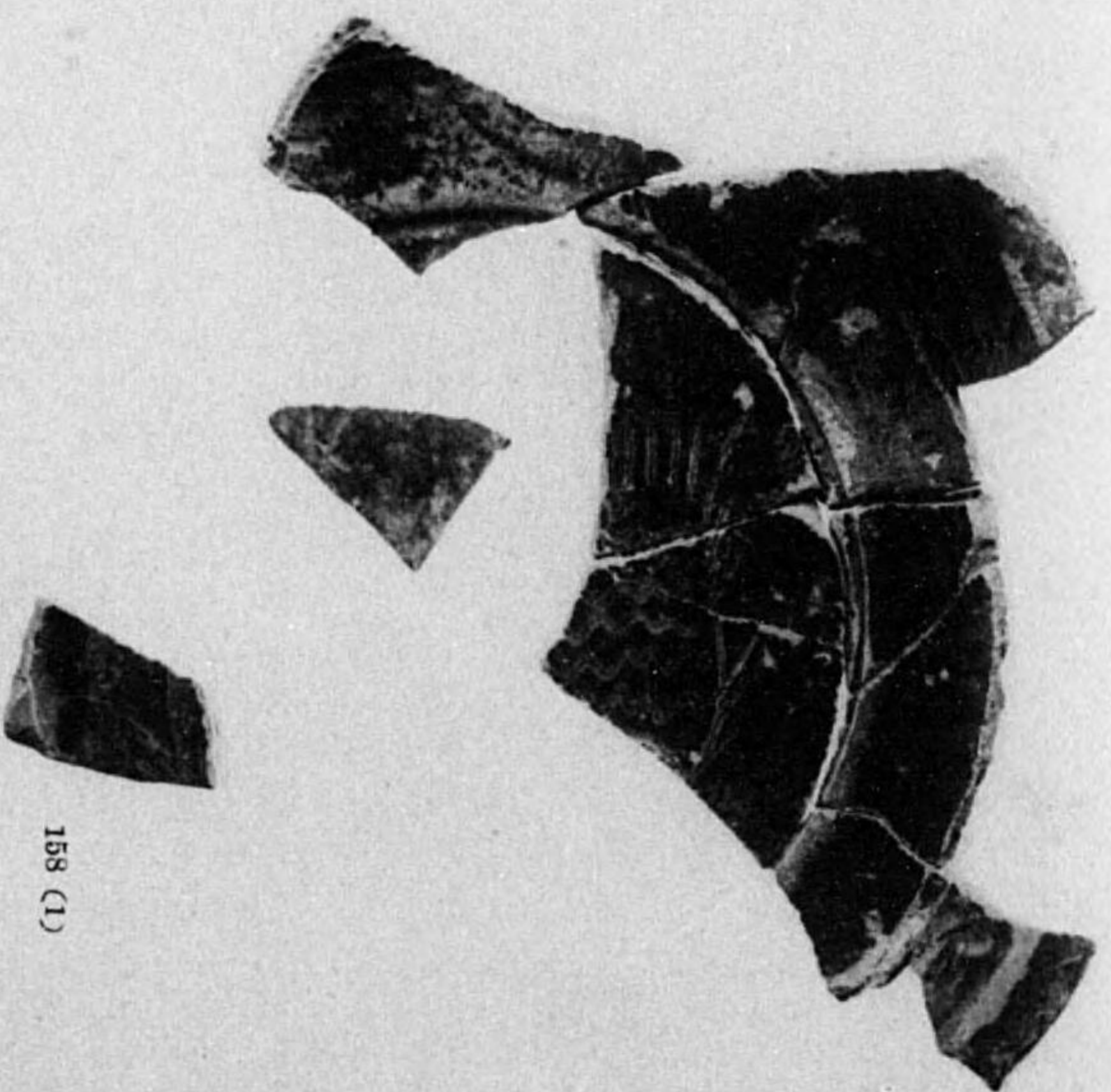
大同江面出土陶壺篋書文様 三種



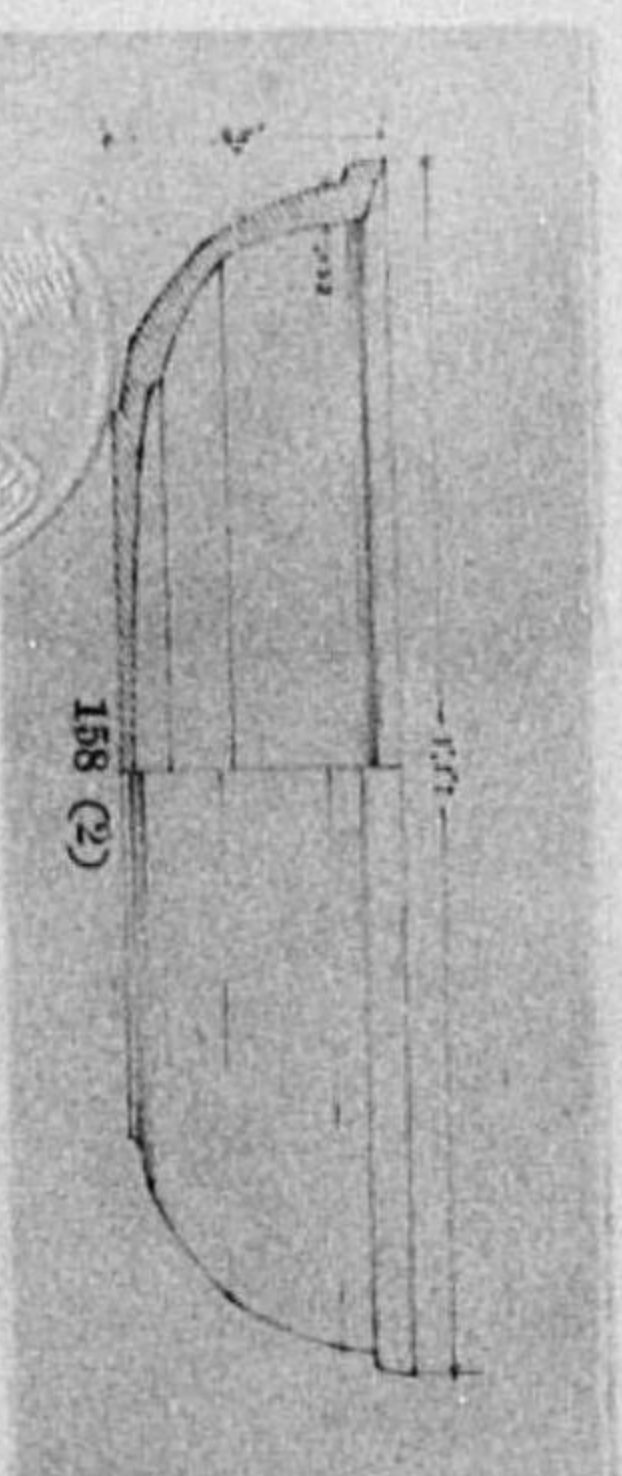
159

158
159

石巖里出土双魚陶盤
大同江面出土繪文陶甕



158 (1)



(1) 殘片 (2) 復原圖

(富田晋二氏藏)

種の波文とを重ねてゐる第一五五圖は下に横行直線文上に鷹揚なる波文を描いてゐる次に第一五六圖は横行直線文間に櫛齒を以て或は之と稍直角に或は斜めに山形に掻きつけて簡樸な櫛搔文様を作つたのである第一五七圖は大なる槩の中心より外に向ひ稍放射線狀に櫛搔直線文を層々施して一種の飾りとしたのである

次に篋書文様には稀に双魚文又は游魚文禽鳥文等がある漢時代には往々銅洗の内部に双魚文をあらはしたが第一五八圖の如く綠釉槩の内部に古雅な双魚文を陰刻したり又第一六〇圖の如く游魚文禽鳥文を作つたものもある

又陶器の表面に彩色を施したり文様を描いたりすることは漢代には普通に行はれたが是れが樂浪にも波及した而も是等色彩は多く剝落して僅かに當初の餘影を認むるに過ぎぬ大同江面第一號墳出土の陶鼎は其上半及び内部を朱塗となし下半を黒塗とし更に上半の朱塗の部に上下に二本づゝの水平線を引いてゐたことは既に前に説いた其他白土や朱や墨を塗りて裝飾することは多く行はれた本文第一五九圖は甕の表面に最も活氣ある雲氣文様が描かれてゐる元田増關一氏の所藏なりしが今富田晉二氏に歸した

四 陶製遺物

從來余等の發掘せし古墳内より多くの陶器を得たが是等は既に前に説いた其以外の者につき重要な者を左に説くこととする

(一) 厚手白質の陶器 には圖版第一二一七圖及び第一二一八圖の如き總督府博物館藏壺最も普通の形式にして前者には表面に文様を描きし形跡あれども剝落不明である圖版第一二一九圖古川輝次郎氏藏壺寸口徑五寸八分腹徑一尺三寸四分亦普通の手法より成れども完全に出土せし此種の大なる實例である圖版第一二二〇圖古川輝次郎氏藏壺尺口徑四寸七分腹徑一尺八分は口縁及び頸部に一種の刻形を有するのが珍らしい圖版第一二二一圖吉竹文野氏藏双耳壺寸口徑三寸六分七寸七分高及び圖版第一二二二圖田增關一氏藏双耳壺は共に肩部に小なる耳を有せる者にして甲は頸稍長く乙は短い圖版第一二二三圖富田晉二氏藏壺は頭部特に長く上に向いて開いてゐる圖版第一二二四圖の片口附陶盤は恐らくは埴埴なるべく其片口を有せるは珍らしい本文第一六〇圖平壤中學校藏壺寸口徑五寸腹徑一尺一寸二分は土質灰色を帯び腹邊に二條の刻線を繞らし其上方に二魚二禽及び何か不明の者を篋書にし頗る輕快の情趣を示してゐる

(二) 薄手灰質陶器 に屬する者は實例頗る多く大なる甕を除き其他の明器たる杯案壺甌勻盤樂竈釜等皆此種の手法によつてゐる又稀に陶印もある其中圖版第一二二五圖乃至第一二二七圖總督府博物館藏及び第一二二八圖關口半氏藏の壺は普通見る所第一二二九圖多田春臣氏藏壺寸口徑五寸四分腹徑六寸四分高四寸九分及び第一二三〇圖白神壽吉氏藏壺寸口徑約三寸深三寸六分五厘は共に胸邊に櫛搔を有し第一二三一圖諸岡榮治氏藏壺寸口徑三寸八分五厘は腹邊に櫛搔波文を作つてゐる第一二三二圖多田春臣氏藏釜高三寸八分は口腹共に大にして甕にかくるに便せんが爲め底邊特に小となつてゐる當初白土を塗りし形跡を存する第一二三三圖橋都芳樹氏藏双耳壺



160



161

160

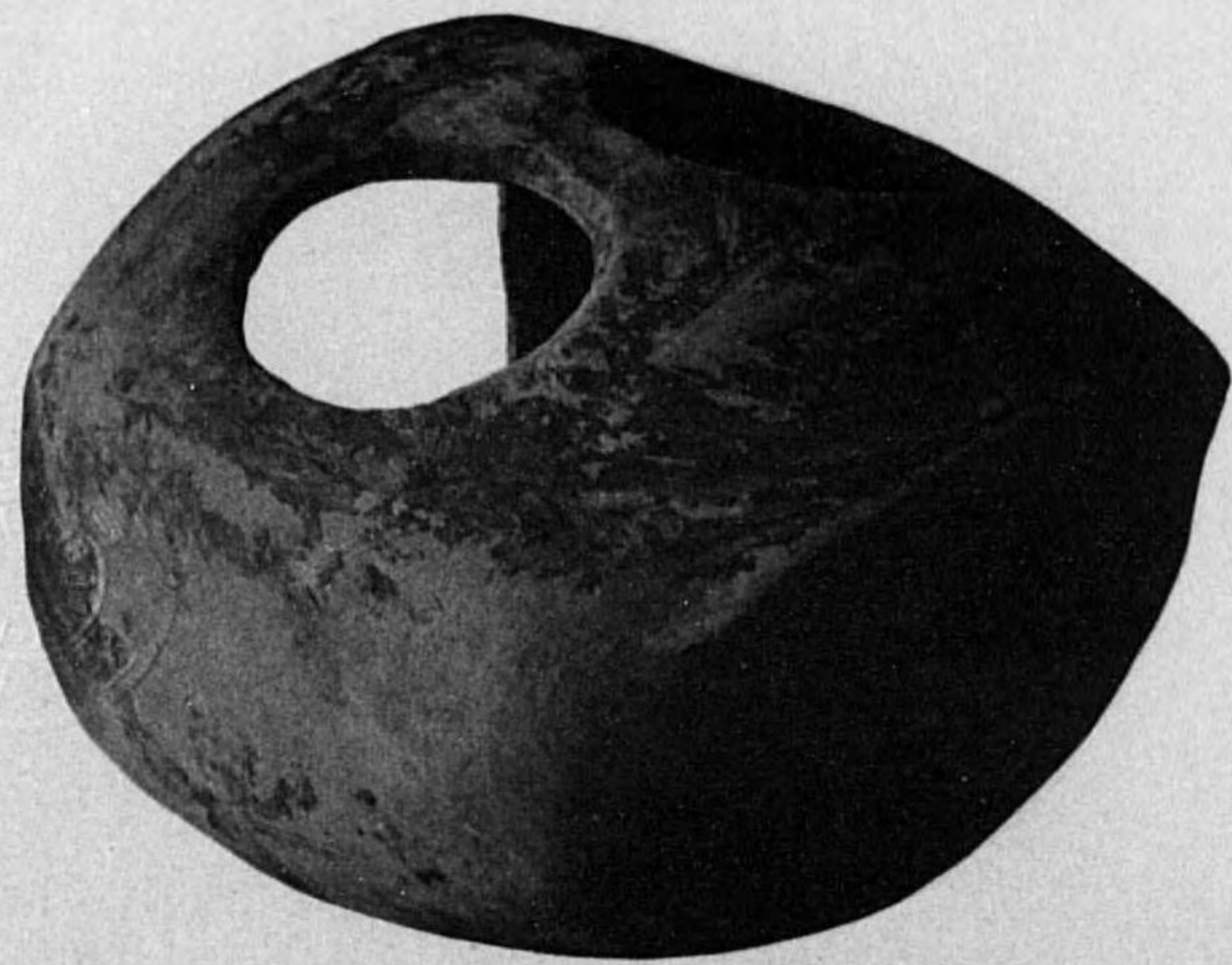
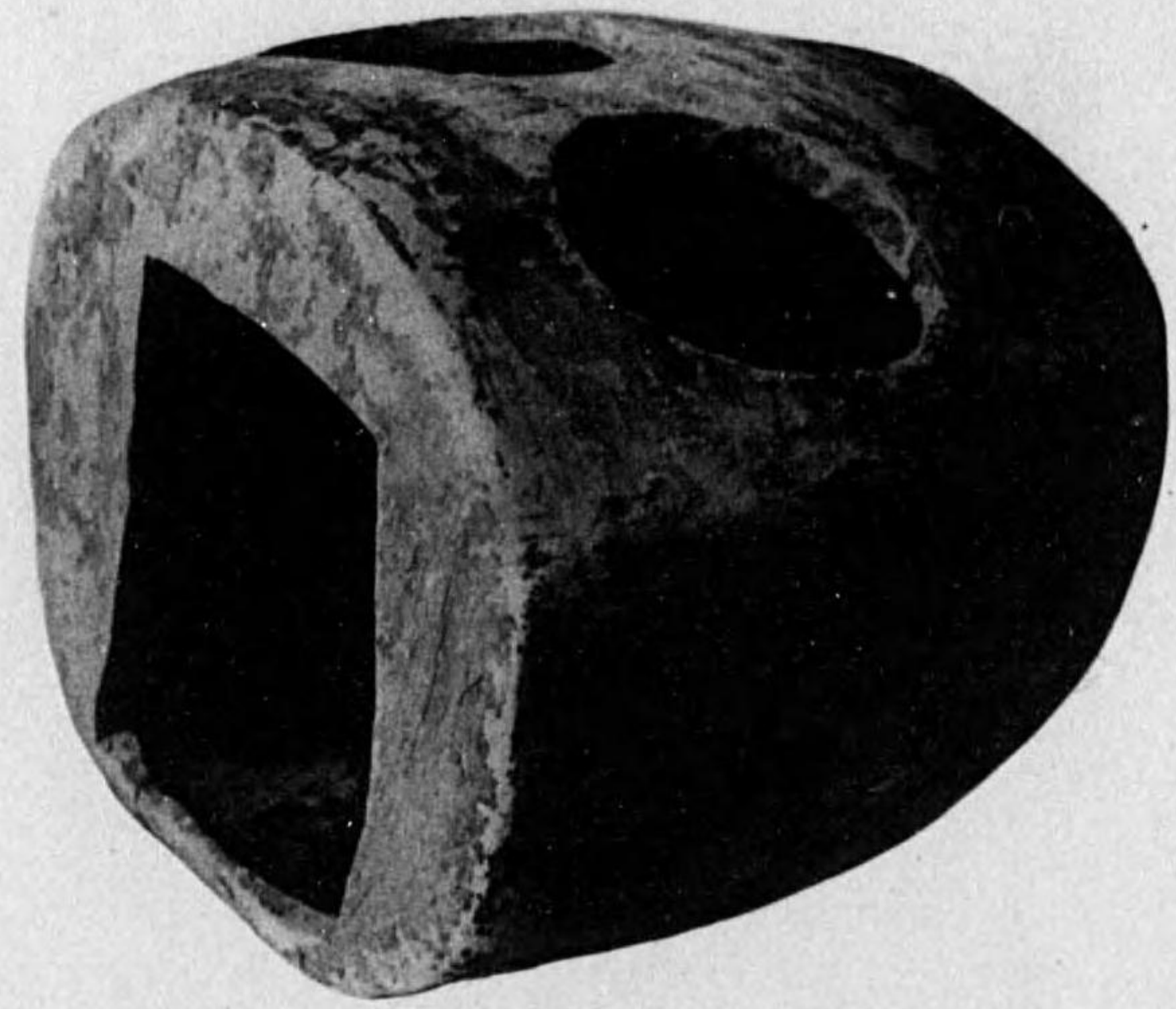
大同江面出土篋書畫文陶壺

(平壤中學校藏)

161

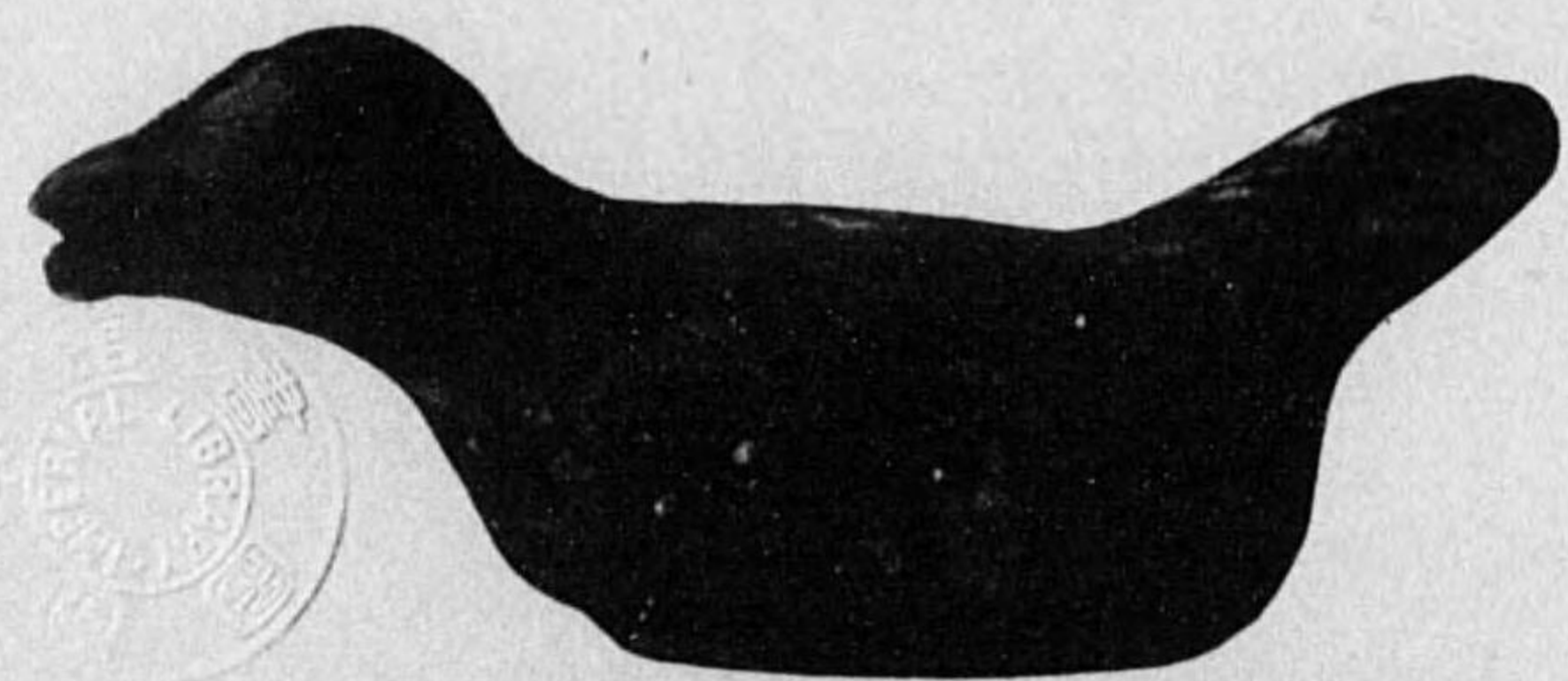
同 陶印 (蒯榆信印)

(北村忠次氏藏)





163



164

163 大同江面出土 綠釉壺 (總博藏)
164 同 陶禽 (北村忠次氏藏)

及び第一二三四圖多田春臣氏藏双耳壺口徑二寸六分五厘腹徑は共に肩部に耳を有してゐる特
に前者の頸より肩にかけての手法は幾層にも陽起線を繞らし手法頗る精巧である本文第一
六二圖平壤中學校藏陶甕横徑八寸一分縱徑六寸四分は前後垂直にして左右上下の四面は膨起し隅は
圓みを帯びてゐる前に方形の焚口廣三寸五分を設け後に圓形の煙出孔を穿ち上面に釜を載
せんが爲め大小の二圓孔を並べてゐる蓋此種の最も簡單なる一例である

本文第一六一圖北村忠次氏藏陶印は陶製なるが如く方五分五厘高さ二分三厘鼻鈕ありし
ならんも今缺失してゐる土質灰白色を帯び荆楡信印の四字を篆書にて作り刻畫頗る深い漢
代金印銀印あり又玉石印銅印は樂浪よりも發見されたが陶印は他に殆ど類例を聞かぬ

(三) 綠釉陶器 には手工の巧みな且形の面白き者が多い今其中重要なる者を擧ぐれば
(イ) 總督府博物館藏綠釉陶壺 (本文第一六三圖) 口徑約五寸 脚徑七寸六分 高九寸七分六厘
口徑稍大にして縁高く頸穿く腹大に底に至りて稍小に脚臺を有し胸帶腹帶を繞らし腹部
の左右に獸環形を浮彫にしてゐる胎質赤褐色にして綠釉を施せるが今表面に貝様光をあら
はしてゐる

圖版第一二三五圖の綠釉陶壺は上部を缺損せるが胎質帶黃灰色にして稍薄き西瓜皮色釉
を施し處々に櫛搔帶を作り亦左右に獸環をあらはし且高い脚臺を有つてゐる

(ロ) 中西嘉一氏藏綠釉博山爐 (圖版一二三七圖)

承盤の上に香爐を造り出だせし者承盤徑六寸三分全高七寸其蓋は博山狀を造り周圍に四

孔を穿ち爐身は胴大に口稍窄く底に向ひ著しく狭くなり胴部以上は數層に線形を繞らし三層に各七孔を穿ち蓋も身も内外共に綠釉を施してゐる此博山爐は銅製の者と異なり彼の精鍊に反し頗る渾撲の風を帯びてゐる

(八) 富田晉二氏藏綠釉九枝燈架 (圖版第一二三八圖) 高一尺三寸二分

元田増關一氏藏なりしが今富田晉二氏に歸した是れは九枝燈架と名づくべき者であらう西京雜記卷一に漢高祖成陽宮に入りて庫府を周行せし時幾多の金玉珍寶の中青玉五枝燈のありしことを載せ又趙飛燕皇后となりし時其女弟が祝賀の爲め贈りし者の中に七枝燈といふのがある此燈架亦此類の者であらう下に大なる座ありて其上に本太く末に向ひて其徑を減縮せる長幹を立て幹頭を稍廣く造り以て燈蓋を受くるに便す更に此幹の周圍に三枝を交互に三層に出だし枝端屈曲上に向ひて亦燈蓋の座を作つてゐる胎質赤褐色にして其上に綠釉を施し下部の座には周圍に三ヶ所の透しを作り以て燈架の重量を軽減してゐる此燈架形態高雅にして意匠凡ならずかゝる變化に富める大作を陶器にて造り出し綠釉を施せるが如き當時此種の技工の發展を想像するに足る者があらう

(三) 勅使河原健之助氏藏燈架 (圖版第一二三六圖)

亦燈架の下部で上部を失つた者であらう脚座は大にして上勾配急に幹の下部に接してゐる脚座の上面には三層に波文を篋書にてあらはし幹の下部には三層の剝形を作り總體に綠釉を施してゐる

(木) 總督府博物館藏黃綠釉把附容器 二種 (圖版第一二三九圖第一二四〇圖)

各口徑四寸五分 腹徑五寸三分 底徑三寸 高三寸七分

一種の水盤にして表面横に凹凸の層狀をあらはし腹部の下左右に把手を作り内外共に黃綠釉を施してゐるが今大半剝離してゐる此容器は既記の如く他の樂浪陶器と頗る形狀手法を異にせるを以て始めは多少年代につき疑問を懷きしかゝる種類の遺物は後の高勾麗時代には發見されしことなく又新羅統一時代まで下らず樂浪時代の者と認むるの外なく且樂浪には猶黃綠釉の器物を發見せざれども支那にては漢代に早く綠釉と同じく行はれし證據あれば樂浪時代の者と推定するも不當ではあるまい

(ハ) 關口半氏藏綠釉陶盃及總督府博物館藏綠釉陶杯 (圖版第一二四一圖—一二四三圖)

前者は徑三寸二分内徑二寸五分高さ七分の淺き皿形の器物にして胎質黃赤色にして頗る厚く内外共に綠釉を施せるも處々剝離してゐる後者は大正十三年四月濱田博士の石巖里古墳盜掘跡にて拾得せられし者にして名稱用途不明である或は馬上杯と稱する者の類か口徑一寸九分五厘高二寸二分深一寸五分五厘胎質白灰色にして稍軟に多少黒みを帯びたる綠釉を施してゐる博士は同時に綠釉の把手の如き者を獲られたが是れ亦用途名稱共に不明である

(ト) 白神壽吉氏藏綠釉井幹 (圖版第一二四四圖)

大正十三年五月石巖里より出土せる者白神壽吉氏の所藏である形體完からざるが爲何物

であるか不明であつたが其年十月關野は平壤に往きし時白神氏を訪ひ一見其井幹たることを知つた支那にては漢代明器の井幹は割合に多く發見せられてゐる現に東京帝國大學文學部にも文學部にも京都帝國大學文學部にも各一個づゝある又個人の所有にかゝれる者を余は幾個も見た其の中本文第一六五圖は東京帝國大學文學部所藏の者である又本文第一六六圖は白神氏が關野の意見により修補復原せられし者である



166 大同江面出土綠釉井欄復原 (白神壽吉氏藏)



165 支那出土陶製井幹 (東京帝大文學部藏)

單なる作り出しの口縁を有つてゐる此口縁の兩旁に轆轤架の柱を立て其上に横衡を架し此

横衡の上に轆轤を支持せんが爲の木框を作り木框の左右側の孔に渦車の軸を貫通したのを模してゐる此孔は一方殘存せる框に猶存してかゝる施設のありしを語つてゐる井幹高さ四寸一分口縁外徑五寸一分底邊外徑五寸一分胎質稍軟、黃褐色にして表面に帶灰綠色の釉を施してゐる此井幹の下には底板を作るを以て井幹としては如何かと異しまるれども現に東京帝國大學文學部藏の井幹には井架轆轤まで具備して底を有せる例があるから差支はない

(子) 總督府博物館藏綠釉井幹 (圖版第一二四五圖)

是れは既記の如く關野が大正十一年五月始めて總督府博物館の爲め平壤にて獲し綠釉陶器である當時其筒形にして底を有せるも口縁の一方に何物かの破壊せられし痕跡を殘せるを以て是れ必ず轆轤架の形跡なるべく恐らくは井幹の明器なるべしと想像した然るに大正十三年前者を見るに及び始めて想像の誤らざりしことを知つた此井幹模型は底邊最廣部徑五寸四分口邊外徑三寸二分内徑二寸五分五厘深六寸三分全高六寸八分あり底最も大、口邊に向ひ著しく其大きさを減縮し頸部に簡なる作り出しの刳形を繞らし胴部上下帶間に波文を篋書にしてゐる胎質黃褐色にして稍粗、外部は綠釉を施して口縁に及び内側に數個所流れこみし痕跡がある轆轤架は其一脚口縁に取付けたる所を殘せる外全部を失ひたれば當初如何なる形であつたか不明であるも或は前者の如き者ではなかつたかと思ふ

(リ) 中西嘉市氏藏綠釉陶甕 (圖版第一二四六圖)

底邊長七寸一分 廣六寸三分 高二寸六分

煙突頂まで高五寸 煙突上徑九分 上孔徑三分五厘
焚口廣二寸一分 高一寸五分

支那出土の者には瓦竈の頗る精詳なる者あれども樂浪出土の者としては是れは逸品である其形前廣く後狭く隅圓く底を有し上面に大なる圓孔を穿ち釜を載せてゐる前面には焚口ありて上に小なる庇形を斜めに出し後方に煙突を少しく外に斜めに出してゐる釜は上廣く下窄く底は小さい外面に西瓜皮様綠釉を施し釜亦同様なれども其底邊には施してない此瓦竈技工稍精當時の實際の竈の模形たるの點に於て興味を引く

(又) 諸岡榮治氏藏綠釉陶鷺 (圖版第一二四七圖) 及中西嘉市氏藏綠釉陶鷺 (圖版第一

二四八圖)

共に綠釉を施せる鷺形の明器にして甲は長さ四寸三分五厘高さ三寸二分乙は長さ四寸二分五厘高さ三寸三分共に簡樸の作なれども鷺鳥の特質をよく具へてゐる

(ル) 白神壽吉氏藏陶雞 (圖版第一二五一圖) 及中西嘉市氏藏陶雞 (圖版第一二五二圖)

甲は素焼にして牡雞をあらはし其質稍軟黃褐色を帯びてゐる長さ前後四寸三分高さ三寸外面に白土を塗り其上に朱を以て冠羽毛等を彩色してゐる頗る古樸の作である乙は綠釉の牝雞と雛の二羽をあらはし牝雞は長さ三寸四分五厘高さ二寸三分雛は長さ二寸七分高さ一寸三分五厘前者と同じく簡朴の風を示す共に綠釉は殆ど悉く剝落したれども猶多少の形跡を存してゐる北村忠次氏亦素焼陶禽を所藏せらる此雛と形相類し長さ四寸高さ一寸六分五

厘帶青灰色にして土銹を帯び往々朱色痕がある當初は彩色を施したものであらう(本文第一六四圖)

(ヲ) 中西嘉市氏藏綠釉陶狗 (圖版第一二四九圖)

頗る古樸の狗形にして耳は立ち口を少しく開き尾を捲いてゐる眼は唯篋にて突いて作り足は斷面長方形に角ばり唯其端を前に少く曲げたのみである

(ウ) 白神壽吉氏藏綠釉陶豚 (圖版第一二五〇圖)

是れは臥豚をあらはせる者長さ三寸六分二厘背の高さ最も高さ所にて一寸二分廣さ頸部一寸二分臀部一寸五分裏面に深約五分の空所を作つてゐる其質稍軟黃灰色を帯ぶ外面は帶灰綠釉を施してゐる鼻先尖り耳大にして垂れ前肢後肢の部膨れてゐる手法簡樸なれどもよく豚の特質を捉へてゐる

第四章 鏡

支那漢時代の古墳より從來多くの鏡が発見され是等は歐陽修の金石錄を初めとして多くの金石書に著録された樂浪古墳内より或は余等の調査により或は土民の盜掘によりて出土し余等の實見せしもの既に百數十面に達した是等は何れも支那本土に於て發見せられし者と同形式なれども現在支那最古の年號銘鏡即ち居攝元年(西紀六年)の者が出土せしのみなら

ず樂浪の滅亡が西晉の建興元年（西紀三一三年）に在れば此等の鏡は少くも皆其以前に屬し漢式鏡の年代を判定する上に於て有力なる資料となるべき者である其形式手法を見るに一部は前漢に屬すれども大部分は後漢魏晉時代に屬してゐる様である其種類は多種多様なれども大要左の十五種に分類することができる

- (一) 内行花文長宜子孫鏡及類系鏡
- (二) 八稜文鏡
- (三) 山字文鏡
- (四) 内行花文十二星鏡
- (五) 内行花文鋸齒緣鏡
- (六) 内行花文日月鏡
- (七) 四乳星文鏡
- (八) 内行花文緣八鳳鏡内行花文四鳳鏡及雲氣鏡
- (九) 四乳飛禽鏡
- (一〇) 四乳八禽鏡四乳四虬八禽鏡
- (一一) T L V 鏡
- (一二) 龍虎鏡
- (一三) 盤龍鏡

(一四) 四乳六乳七乳神獸鏡四乳唐草鏡

(一五) 半圓方格鏡

是等の鏡は殆ど悉く所謂白銅鏡なれども稀に鐵鏡を見ることがある余等明治四十二年始めて大同江面に於て發掘せし古墳内より鐵鏡一面を獲た朝鮮古蹟圖譜第一冊第四九圖又山田鈔治郎氏の蒐集にて今總督府博物館に藏せる者一面平壤中學校及び田增關一氏所藏の者各一面並びに山川七左衛門氏所藏中に内行花文鐵鏡一面がある

(一) 内行花文長宜子孫鏡 樂浪出土の鏡には此種に屬する者最も多く形式完備せるものもあれば簡易化した者もある其年代は前漢時代に溯るべく後漢時代より魏晉時代までも通じて行はれた様である其形式の完備せる者を舉ぐれば

- (イ) 橘都芳樹氏藏内行花文長宜子孫鏡 五面 (圖版第一二五三圖第一二五四圖第一二五六圖第一二五七圖)

- (ロ) 關口半氏藏内行花文長宜子孫鏡 三面 (圖版第一二五五圖本文第一六八圖第一七一圖)

- (ハ) 平安南道應藏内行花文長宜子孫鏡 (圖版第一二八五圖)

- (ニ) 中村眞三郎氏藏内行花文長宜子孫鏡 (本文第一六七圖)

- (ホ) 平壤覆審法院保管内行花文長宜子孫鏡 (本文第一七〇圖)

- (ヘ) 富田晉二氏藏内行花文長宜子孫鏡 (本文第一六九圖)

(ト) 東京帝國大學工學部藏內行花文長宜子孫鏡
(子) 東京帝國大學文學部藏內行花文長宜子孫鏡

(朝鮮古蹟圖譜第一冊第三四圖)
(朝鮮古蹟圖譜第一冊第六七圖)

此形式の鏡の完備せる者は周縁廣くして其内は外帶內行花文帶及び内區の三部より成り外帶は再び外より櫛齒文流水文及び櫛齒文の三重輪帶より成る流水文輪帶は最も廣く恰も流水の如く細き線條を重ねし間に八箇所に渦文を配してゐるが此渦文は後には簡易化されて小なる二重圈や單圈になつてしまふ次の內行花文帶は頭を内に向けたる弧形を八箇連接しそして此弧と内區の周圈との間に奇異なる文様を容れてゐるが其意のある所を知らぬ前記(イ)の五面(ロ)の圖版第一二五五圖本文第一六八圖及び(三)(ト)(子)の諸鏡は之れに屬し此種の最も古制を示せる者である右の中(ニ)は徑九寸二分樂浪出土鏡の最大なる者である又此奇異なる文様の代りに吉祥文字を容れた者もある即ち木及び(ロ)の本文第一七一圖には

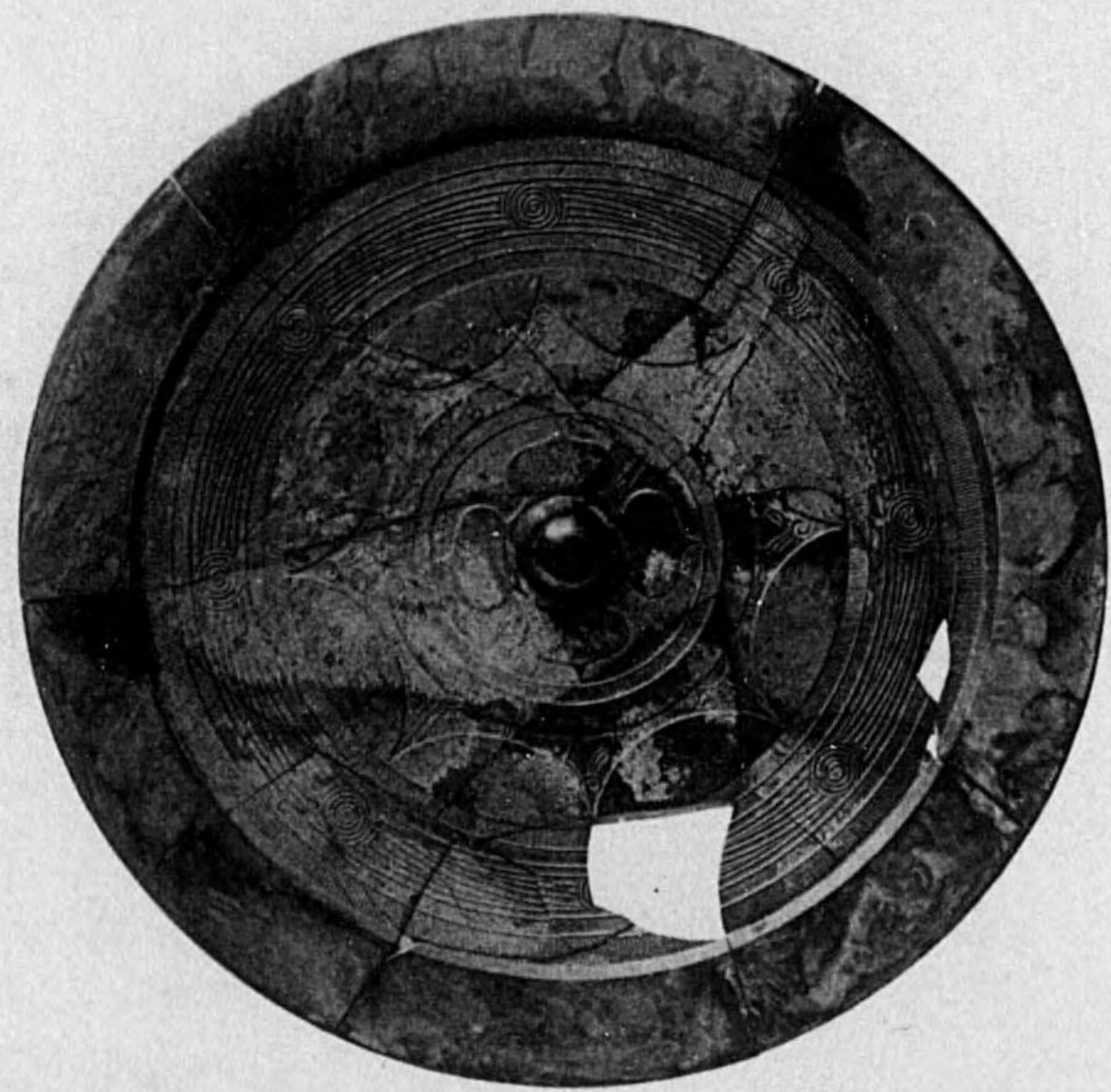
壽如金石佳且好兮

の八字を作つてゐるが(ハ)には

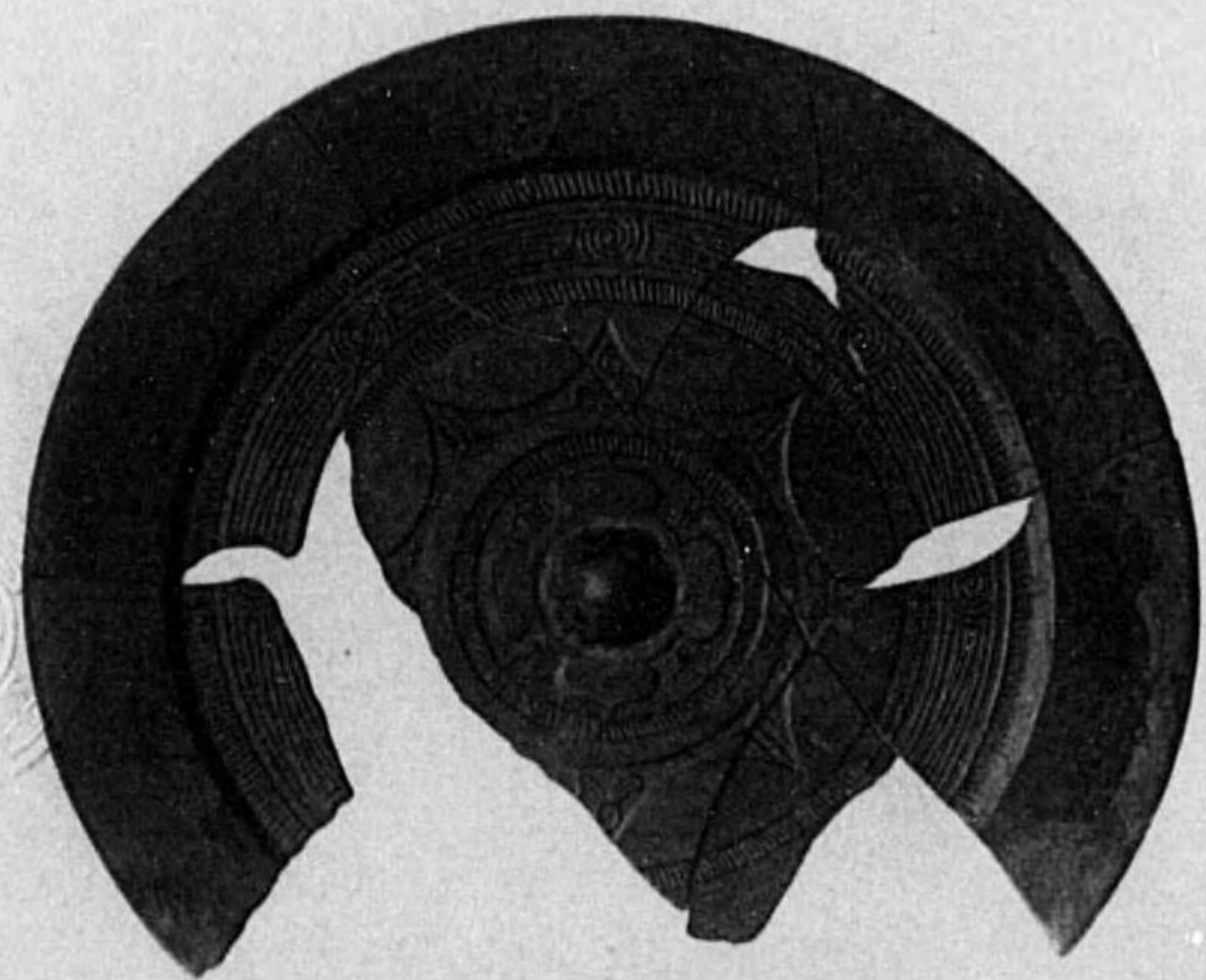
壽如金石且佳好兮

となつてゐる且佳の二字は誤つて轉置したのであらう又(ト)は此內行花文と内區周圈との間に於ける文様若くは文字を省略してゐる

次に内區は稍廣き周圈と中心に作れる四葉座素鈕外の内圈との間に狭き櫛齒輪帶が繞らされてゐるが此四葉座の手法銳利にして内圈との間に篆書にて長宜子孫の四字を分ち入



167

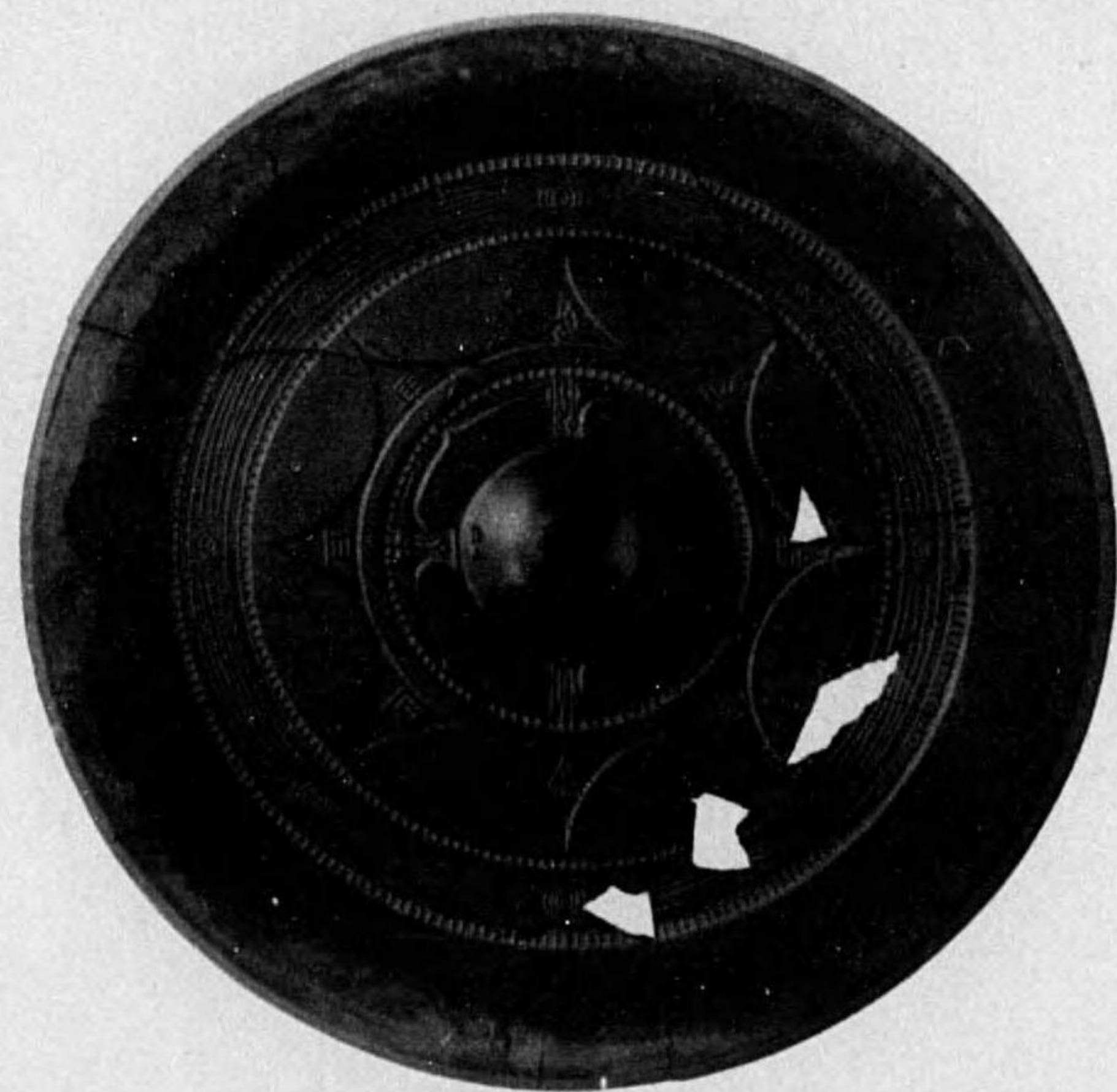


168

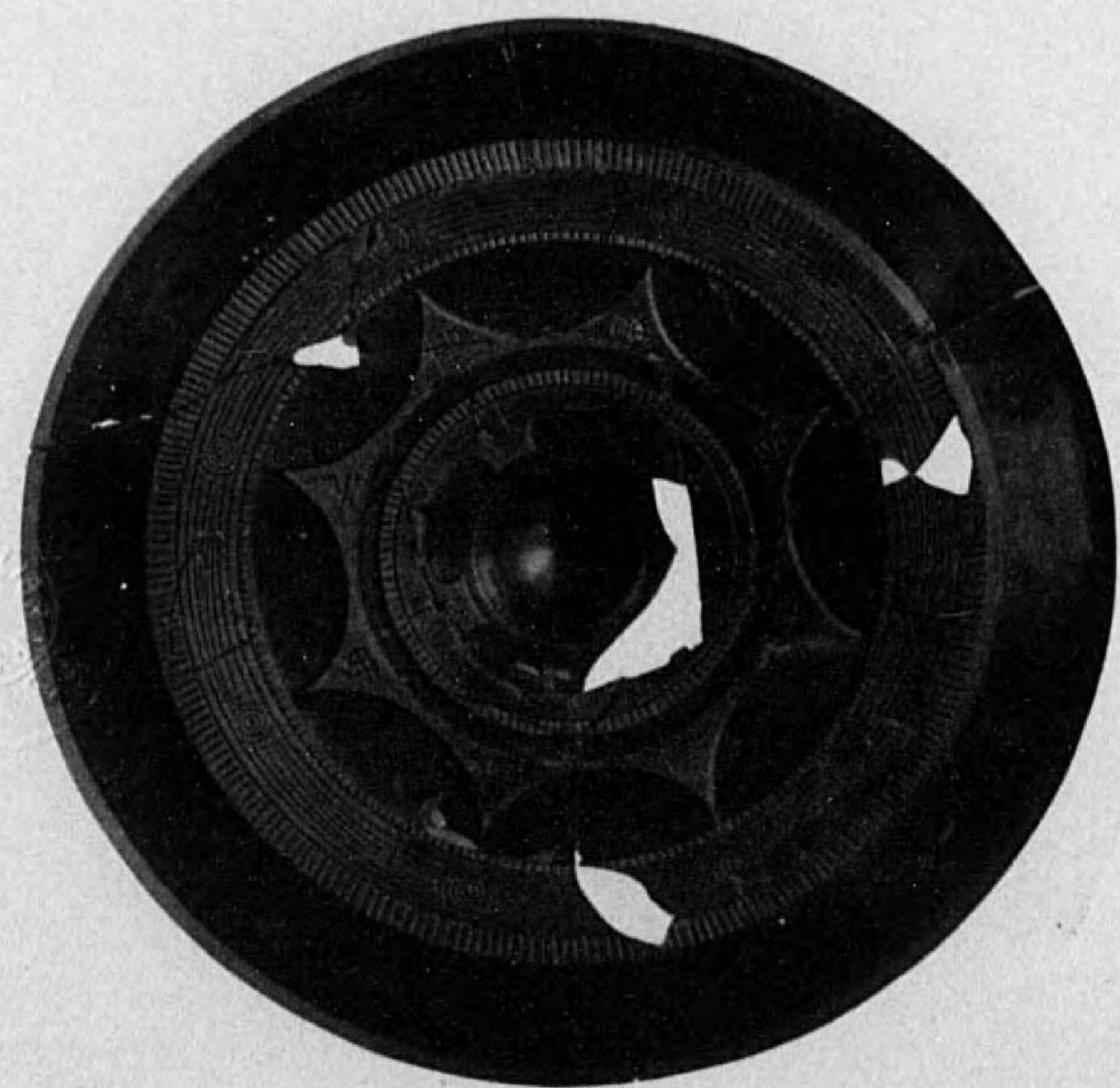
167
168

內行花文長宜子孫鏡
內行花文長宜子孫鏡

(中村眞三郎氏藏)
(關口半氏藏)



170



169

169 内行花文長宜子孫鏡 (平壤覆審法院藏)

170 内行花文長宜子孫鏡 (富田晋二氏藏)

れてゐる長宜子孫鏡の名は之れから出たのである

此形式の系統に屬する者にして其簡易化されし者を擧ぐれば

(リ) 白神壽吉氏藏内行花文鏡 徑三寸五分 (圖版第一二五九圖)

は内區の四葉座と長宜子孫の四字を略せし者

(又) 富田晉二氏藏内行花文鏡 徑三寸一分 (圖版第一二六〇圖)

(ル) 總督府博物館藏内行花文鏡 (圖版一二六一圖)

は内區の四葉座と長宜子孫の外更に各花瓣間にある奇異なる文様を略し爲めに圖様は頗る簡素の者となつた次に

(ヲ) 橋都芳樹氏藏内行花文長生宜子鏡 徑四寸五分 (圖版一二六二圖)

は周縁内の流水文及櫛齒帶を省略せし者にして其四葉座の各葉は銳利なる三葉様をなし長生宜子の四字を葉間に容れてゐる又

(ワ) 關口半氏藏内行花文長宜子孫鏡 徑四寸三分 (圖版第一二六三圖)

(カ) 同 氏藏内行花文宜君仕官鏡 徑三寸八分五厘 (圖版第一二六四圖)

は前者と同形式なれども甲は長宜子孫乙は宜君仕官の四字を各容れてゐる

(ヨ) 關口半氏藏内行花文君長宜官鏡 徑三寸八分五厘 (圖版第一二六五圖)

(タ) 富田晉二氏藏内行花文長宜子孫鏡 徑七寸二分 (圖版第一二六六圖)

(レ) 同 氏藏内行花文長宜子孫鏡 徑三寸七分五厘 (圖版第一二六七圖)

の三面は亦前者と同形式なれども四葉座が普通で後の二者は葉の先端が特に鋭く尖つてゐる

(リ) 中西嘉市氏藏内行花文長生宜子鏡 (圖版第一二六八圖)

は流水文帶を省略せること前記數者の如きも内區の四葉座は各葉三葉狀をなし「長生宜子」と小蔵手文とを容れ別に内行花文帶の花瓣間に「延壽萬年利父母兮」の八字を作り頗る精練の技工を示してゐる

(ツ) 橋都芳樹氏藏内行花文長宜子孫鏡 (圖版第一二六九圖)

(ネ) 同 氏藏内行花文長宜子孫鏡 (圖版第一二七〇圖)

は形式前者に似て内區四葉間に「長宜子孫」の四字を置き花瓣間に(ツ)は「壽如金石」の四字とW文とを交互に配置し(ネ)は「位至三公」の四字と小圈文とを交互に配置してゐる

(ナ) 橋都芳樹氏藏内行花文位至三公鏡 徑四寸九分五厘 (圖版第一二七一圖)

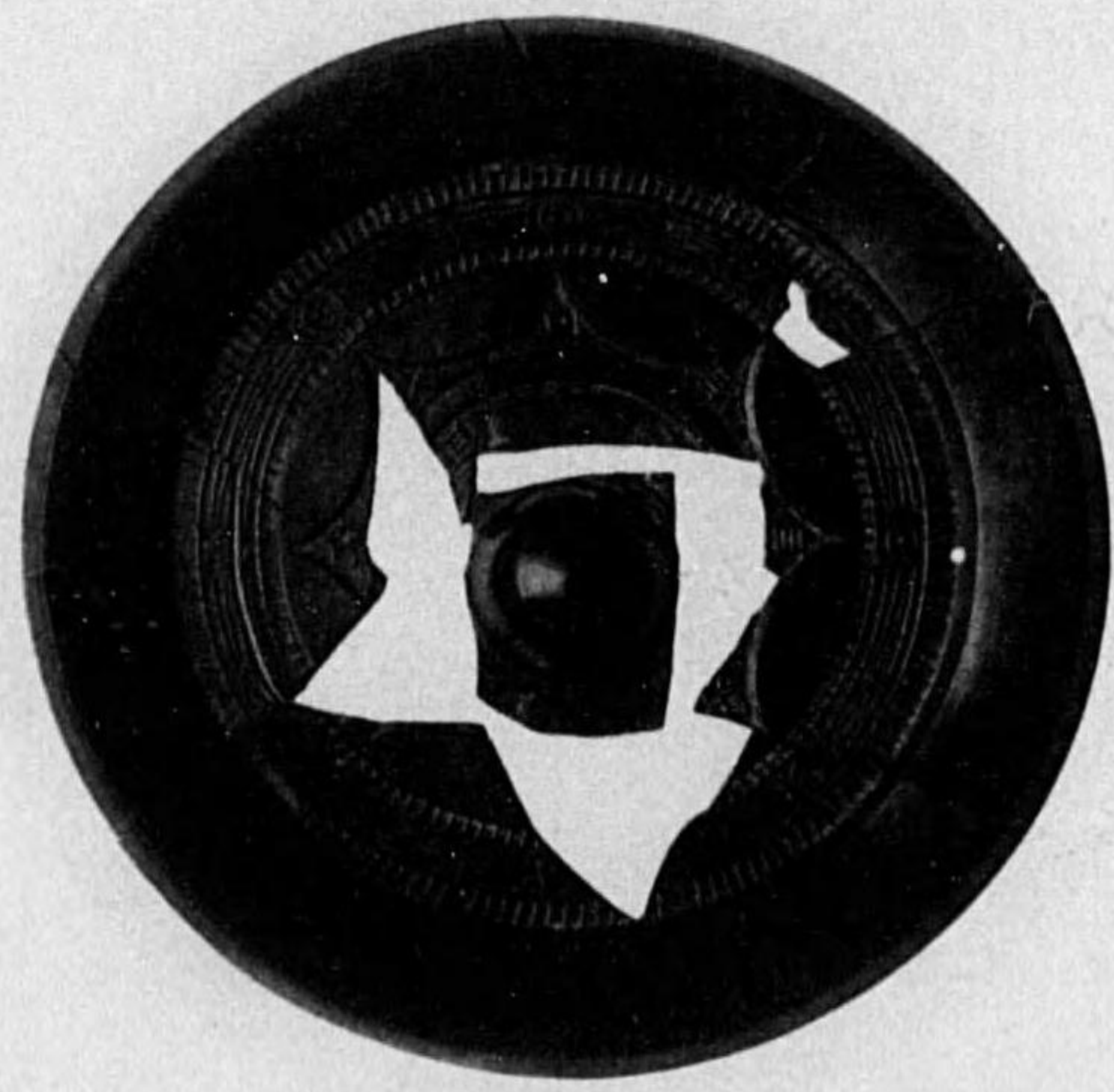
(ラ) 總督府博物館藏内行花文長宜子孫鏡 (圖版第一二七二圖)

(ム) 關口半氏藏内行花文長宜子孫鏡 (圖版第一二七三圖)

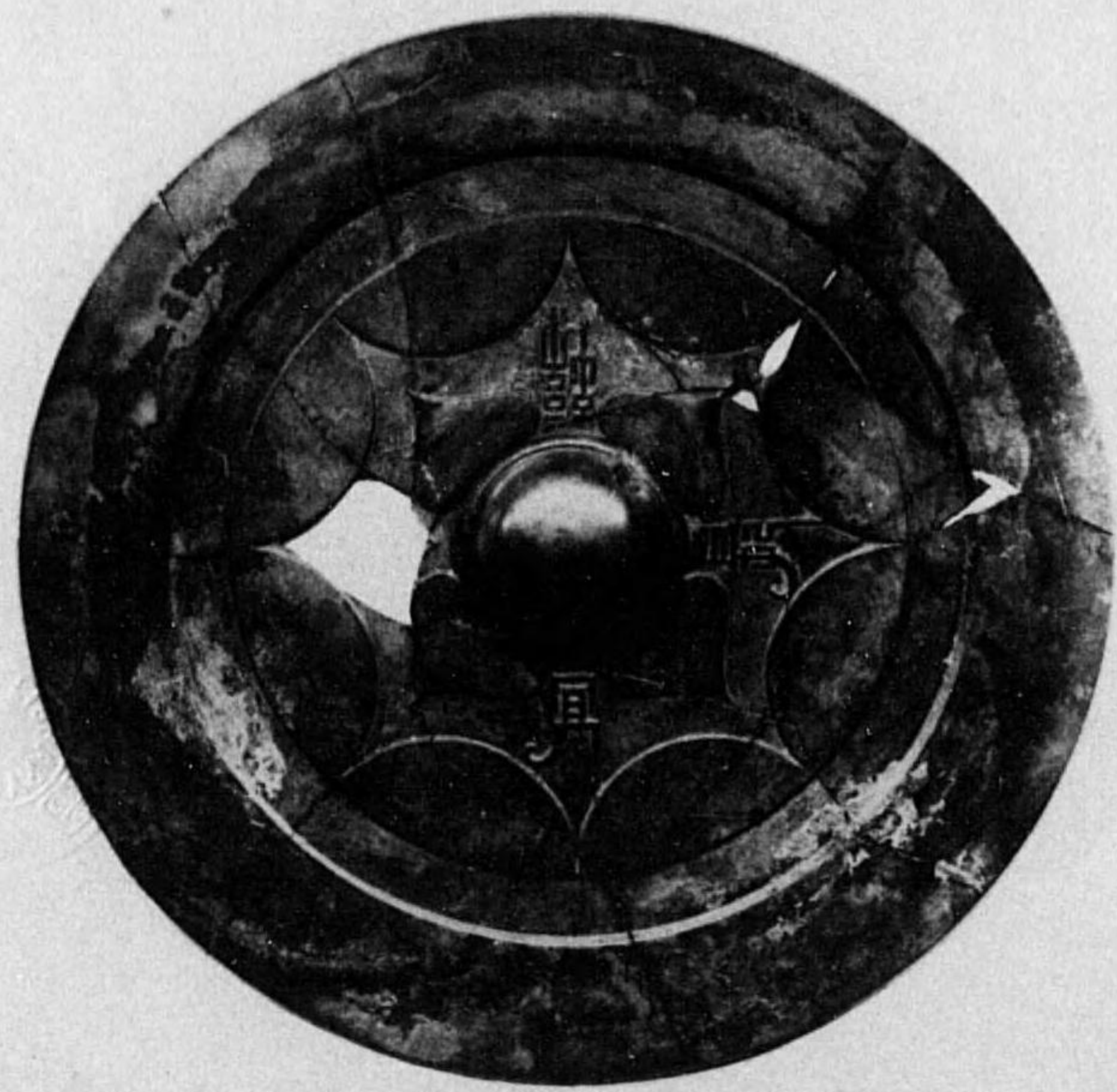
(ウ) 橋都芳樹氏藏内行花文長宜子孫鏡 (圖版第一二七四圖)

(キ) 同 氏藏内行花文長宜子孫鏡 徑七寸六分八厘 (本文第一七二圖)

是等の内行花文鏡は更に内區の周圍を省略せし者にして内區の四葉鈕座は直ちに内行花文帶の内部に作られ各葉間に「位至三公」「長宜子孫」等の銘字を容れてゐる四葉の手法は(ナ)最も雄勁に(ラ)(キ)之に亞き(ム)(ウ)と次第に纖弱となる特に(ウ)は年代に於て最も後れ魏晉時代に屬す



171



172

171 内行花文長宜子孫鏡 (關口半氏藏)
172 内行花文長宜子孫鏡 (橋都芳樹氏藏)

る者と思はる

(ノ) 中村眞三郎氏藏内行花文鏡 徑三寸

(本文第一七七圖)

(オ) 關口半氏藏内行花文鏡

徑三寸一分二厘

(圖版第一二七五圖)

は此種の最も簡單なる意匠より成れる者内區は素鈕圓座のみにて四葉なく其周圍に甲は二重圈乙は單圈を作り其外唯内行花文帶と周縁あるのみにて銘字も無い

(ク) 總督府博物館藏長宜子孫鏡

徑二寸八分

(圖版第一二七六圖)

是れ亦此種の最も簡易化して周縁内の流水帶も内行花文帶も省略され唯内區の四葉鈕座が残つたのである四葉の各葉は三葉風雄健の手法より成り各葉間に「長宜子孫」の四字を容れてゐる

(ニ) 八稜文鏡

此種の鏡は樂浪出土の者は唯白神壽吉氏藏の者一面あるのみ而も殘缺完からず又支那發見の者にもまだ見たことはない中央の鈕座を失ひたれども他の形式は知ることができ即ち周縁は普通の者と異なり稍廣くして斷面凹曲線をなし内區の周輪亦同手法より成り内外周輪間は平板にして内輪に近く陽線八稜文を作つてゐる其内外周輪の手法と鏡の表面が普通見るが如く反りを有せず平坦になつてゐるのは前漢初期の特徴であるから此鏡亦明かに少くも前漢時代に屬すべき者である

(三) 山字文鏡

此種の鏡も亦白神壽吉氏藏殘缺一面あるのみにて其全形を知ることが能はざれとも往々支那出土の者あり是に由りて其形式を知ることができ本文第一七三圖の山

字鏡は香取秀真氏藏支那將來の者で全然此樂浪出土の者と同形式である其周縁狭く高く内



173 支那出土山字鏡 (香取秀真氏藏)

に稍廣き輪帶を有し中央に方郭ありて其内に小なる鼻鈕を作り方郭の四方に傾斜せる大なる山字形を配置し方郭の四隅と山字形の中間に葉形を綴り是等文様の間地には繊細な流水様文を充たしてゐる此鏡亦其手法樂浪普通出土の者と頗る類を異にし鏡面平坦且其手法稍前者に似たる所がある亦前漢時代の初期に屬すべき者であらう

(四) 内行花文十二星鏡 余の見し所此種の鏡は左の二面である

(イ) 富田晋二氏藏内行花文十二星鏡 徑五寸六分五厘 (圖版第一二七九圖)

(口) 多田春臣氏藏内行花文十二星日在臺鏡 徑五寸七分五厘 (圖版第一二八〇圖)

此形式の鏡は(一)の内行花文長宜子孫鏡の一轉化せる者にして周縁は彼より狭く彼の流水帶が銘帶となり彼の内區の鈕外四葉座が十二星座となりて長宜子孫の銘字を失つたのである内行花文帶及び各花間の奇異なる文様並びに銘字帶内外及び内區界圏内の狭き斜行櫛齒文帶は彼と同様である銘帶の文字は奇異なる稜角を有し(イ)には



凍治鉛華清而明。以之爲鏡。宜文章。延年益壽。辟不羊。與天毋極。如日光。長樂未央。

(口)には

日有喜月有富。樂母有事宜酒食。居必安毋憂患。竿瑟信心忘富樂。已哉今固常保。

の刻銘がある共に技工精鍊亦前漢末に屬すべき者であらう

(五) 内行花文鋸齒縁鏡 此形式に屬する者は大正十四年出土左記一面あるのみ

(イ) 富田晉二氏藏内行花文鋸齒縁居攝鏡 徑四寸五分(本文第一七四圖)

此鏡は前者同様(二)の内行花文長宜子孫鏡の轉化せし者にして廣き周縁には複線鋸齒文と陽起鋸齒文とを二重に重ね彼の流水文帶は是には銘帶となり内區四葉座間の「長宜子孫」の四字の代りに一種の唐草文を容れたのである内行花文帶と内區周輪間の奇異なる文様並びに銘帶内外の櫛齒輪帶は彼の如くにして唯内區周輪内の櫛齒帶を略してゐる

銘帶には左の銘字が陽刻されてゐる

居攝元年自有真家。當大富。耀常有陳。里之治吏。爲貴人。夫妻相喜。日益親善。

居攝元年は西紀六年にして從來の銘鏡始建國二年より古きはなかりしに此鏡之に先たつこと四年實に現存年代銘を有する最古の銅鏡である銅質鉛黑色を帯び技工清健其年代の確實なる點に於て他の鏡の年代の斷定上標準となるべき貴重の標本である

(六) 内行花文日月鏡 余等の從來見し所の者次の四面である

(イ) 富田晉二氏藏内行花文日月鏡 徑三寸四分(本文第一七五圖)

(一)の内行花文長宜子孫鏡の一轉化した者である即ち周縁は廣く彼の流水文帯は銘帯となり内行花文帯は彼の如く内區の鈕座は彼れの四葉座に對し此れは圓座となり且彼の「長宜子孫」の銘字を略して一體に重厚の性質を帯びてゐる銘字は左の如く異體にて明かに讀むことができぬ

内而清而□而□而明而光而□而日而月

刻畫高く鋭く特殊の手法をあらはしてゐる其年代は前漢に屬すべき者であらう

(口) 中村眞三郎氏藏内行花文日月鏡 徑三寸一分八厘(本文第一七六圖)

前者と殆ど同形式なれども形小にして内部内行花文帯と圓座鈕間の周圈を略し花瓣間に奇異なる文様を入れてゐる銘帯には左の刻銘がある

日而月而□青而日而成而明而光而□

(ハ) 多田春臣氏藏内行花文日月鏡 徑三寸四分八厘(本文第一七八圖)

前者の更に變化して周縁は狭くなり銘帯の内外の斜行櫛齒帯は彼と同様なれども銘字の書體は彼の硬勁なるに反し奇矯雄拔の者となり内行花文帯も内區の界輪も中央の圓鈕座もすべて輕健の者となり彼と頗る表現の法を異にする而も亦前漢時代に屬すべき者であらう其刻銘は僅かに數字を辨ずべく他は讀むことができぬ

(ニ) 總督府博物館藏内行花文日月鏡 徑三寸一分五厘(圖版第一二八一圖)

前者と殆ど形式を同じくすれども銘帯稍廣く銘字も亦大内行花文帯は小となり内區の彼



175



176

175

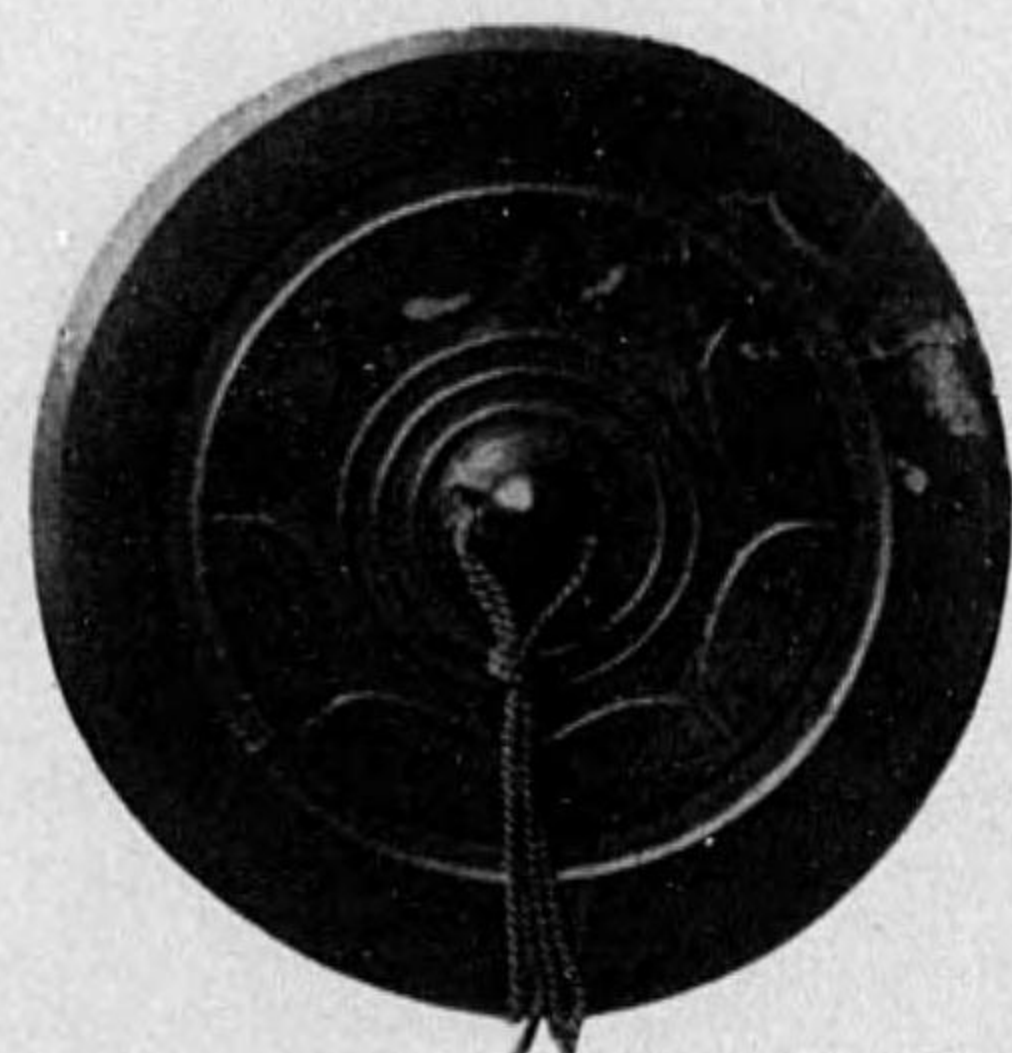
内行花文日月鏡

(富田晋二氏藏)

176

内行花文日月鏡

(中村眞三郎氏藏)



177



178

177 内行花文鏡 (中村眞三郎氏藏)
178 内行花文日月鏡 (多田春臣氏藏)

の圓鈕座と幅のある界輪とは是れにては圓鈕外に二重の陽線界輪を繞らせる者となり形式上彼れよりは一步年代に於て後れたる者となつたそれでも前漢末か後漢初を下らぬ者であらう

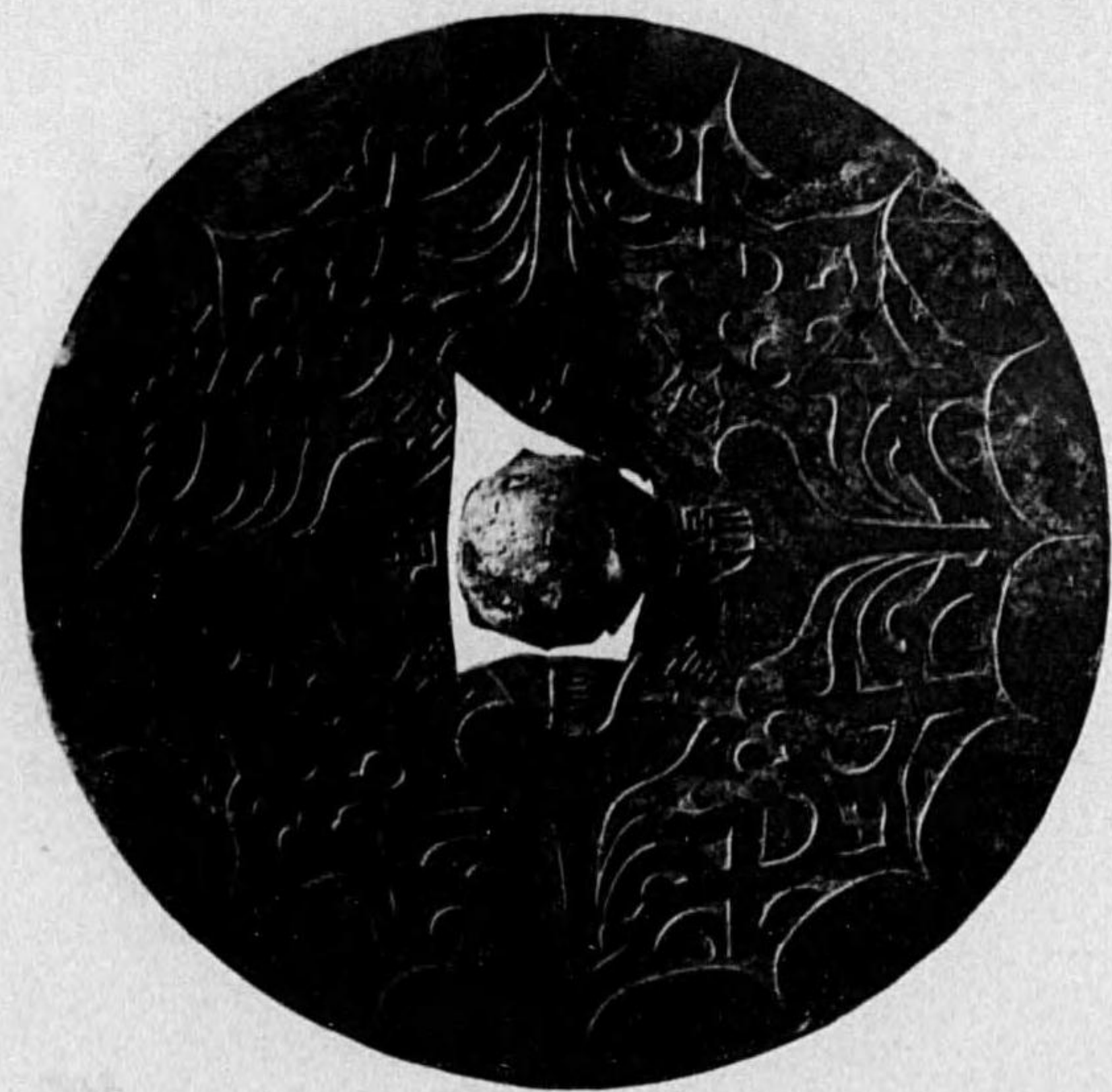
(七) 内行花文四乳星文鏡 此種に屬する者の出土せしは甚だ稀れにして故山田鈺治郎氏蒐集の左の一面あるのみである

(イ) 總督府博物館藏内行花文四乳星文鏡 徑三寸五分(圖版第一二八二圖)
此鏡は前説き來りし鏡と頗る手法を異にしてゐる即ち内行花文は直ちに周縁となりて十六孤を連ね花文は高く強く内に内外二重の界圈を施し界圈の上には斜行櫛齒文を陰刻し内外圈間には四個の乳と四個の花樣座を交互に配し其間地に最も雄勁なる手法より成れる星斗文を綴つてゐる更に内圈内の中心には花樣を高く挺出せしめ其周圍に奇異なる曲線文を見はしてゐる其手法より見れば前漢時代の中期を下らざる者であらう此種の鏡を博古圖には百乳鏡と稱してゐる

(八) 内行花文縁八鳳鏡 此形式の者は十六孤の内行花文縁を有すること前の如く中央に素鈕ありて其周圍に雄健なる曲線より成れる四葉形を作り此四葉形と周縁との間地に双鳳相對向せる者四を容れてゐるが此双鳳は巧みに模様化せられ曲線の互に糾結せる狀最も雄勁の精神をあらはし素鈕と四葉飾との間地に「位至三公」長宜子孫等の銘字を容れてゐる樂浪出土の者は

- (イ) 總督府博物館藏内行花文縁八鳳位至三公鏡 徑三寸八分 (圖版第一二八三圖)
- (ロ) 橋都芳樹氏藏内行花文縁八鳳長宜子孫鏡 徑四寸二分五厘 (圖版第一二八四圖)
- (ハ) 多田春臣氏藏内行花文縁八鳳長宜子孫鏡 徑四寸六分 (圖版第一二八五圖)
- (ニ) 白神壽吉氏藏内行花文縁八鳳長宜子孫鏡 (圖版第一二八六圖)
- (ホ) 富田晋二氏藏内行花文縁八鳳長宜子孫鏡 徑四寸八分五厘 (本文第一七九圖)

右の内(イ)は故山田鈔治郎氏の蒐集にて大正十二年以前に出土せし者破損全からざれども猶全體の約四分の三を有し頗る古樸の風を帯び位至三公の銘字を有し(ロ)(ハ)(ニ)は大正十三年(ホ)は大正十四年出土せし者其中(ロ)は前者と同じく素花文縁を有し特に奇異なる彫刻を有せる鈕が中心に作られてゐる又八鳳文は頗る雄健の風あれども鳳凰の形態は割合によく窺ふことが出来る鈕外四葉飾との間に「長宜子孫」の文字を容れてゐるが文字外に方郭を作れるは他に見ざる所である(ハ)は各内行花文に彫飾を施し素鈕にして「長宜子孫」の銘あり特に四葉飾と八鳳とを巧みに結織せる技工は蓋此種の鏡の翹楚である(ニ)は破損完からざれども又約全形の四分の三を存し前者より更に進みたる彫飾花文を有し「長宜子孫」の銘字中僅かに子孫の二字を知ることが出来る鳳凰の文様は前者より更に精巧となり多少雄勁の性質が乏しくなつた年代は前者より多少後れるであらう(ホ)は(ロ)に似て彼の圖様の一層形式化せし者にして鳳凰の形態は益模様化して多少退化の風を帯びてきた其四葉座内に「長宜子孫」の四字を作れる外四葉間に「君宜高官」の四字を配せるは珍らしい是等の鏡は其形式より前漢時代に置く



179



180

179 内行花文縁長宜子孫鏡 (富田晋二氏藏)
 180 内行花文八鳳士至三公鏡 (多田春臣氏藏)

を妥當とするも唯(ホ)は或は後漢初まで下るかも知れぬ

此内行花文縁八鳳鏡より一轉化せし者に内行花文八鳳鏡四鳳鏡及び飛雲鏡がある樂浪出土の鏡にして是等に屬する者は

- (イ) 多田春臣氏藏内行花文八鳳士至三公鏡 徑四寸五分二厘(本文第一八〇圖)
- (ロ) 橋都芳樹氏藏内行花文四鳳長宜子孫鏡 徑三寸九分八厘(圖版第一二八七圖)
- (ハ) 橋都芳樹氏藏内行花文四鳳君宜高官鏡 徑四寸五厘 (圖版第一二八八圖)
- (ニ) 橋都芳樹氏藏内行花文雲氣長宜子孫鏡 徑四寸八分 (本文第一八一圖)
- (ホ) 關口半氏藏内行花文雲氣鏡 徑三寸五分 (圖版第一二八九圖)

此種の鏡は内行花文縁八鳳鏡の變形せし者にして彼の如く十六孤より成れる内行花文は直ちに周縁をなさずして稍廣き周縁の内に作られてゐる(イ)は全く既記の内行花文縁八鳳鏡の圖様の外に稍廣き周縁を繞らされたのである大なる圓鈕の周圍に小珠文を繞らし稍鈍き輪郭より成れる四葉座との間地に士至三公の吉祥語を陽刻してゐる「士」は仕の省畫であることは云ふまでもない其形式上前漢末か後漢初に屬する者と思はる(ロ)と(ハ)とは多少手法を異にすれども其表現せる精神は互に一致してゐるから恐らくは同時代に造られた者であらう其形式は(イ)の更に一轉化せし者にして廣き周縁を有し其内に彼の十六孤の代りに是れは十二孤の内行花文帯を作り圓座を有せる素鈕と四葉座との間に(ロ)は長宜子孫(ハ)は君宜高官の四字を陽起してゐる又彼の八鳳文様は是にては大に變化して恰も雲氣文の如く見ゆる而も

(口)は一羽の鳳凰が恰も羽翼を擴げたるが如く見られる(ハ)は此鳳凰文が一層模様化せし者に
して雲氣文又は唐草文の如く見え其前身の鳳凰たりしことを知るに困難である是等二面の
鏡は手工洗鍊前漢末或は後漢初に屬する者であらう(三)は(ハ)の更に變化せし者にして廣き周
縁内に十二孤の内行花文を有し内に彼より一層模様化して雲氣文となり全く鳳凰の飾を沒
却するに至つた者を容れてゐる又中央素鈕圓座外の四葉飾も奇異なる輪郭より成り鈕座と
の間に「長宜子孫」の四字を刻す亦後漢時代の初期に屬する者か(ホ)は更に前者の簡單化せし者
にして周縁内に十二の内行花文を容れ圓座鈕外の四葉飾は廣く鏡面を占め各葉間に内行花
文内の界圈を貫ける小なる雲氣文を容れ頗る自由なる手法を弄してゐる鈕座と四葉飾との
間地には普通銘字の代りに唯小圈文を容れてゐる形式簡單なれども圖様としては巧みに整
ふてゐる

(九) 四乳飛禽鏡 是れ亦前漢時代に始まり後漢時代に繼續した者のやうである樂浪出土
の者は

- (イ) 關口半氏藏四乳飛禽鏡 徑三寸九分二厘 (圖版第一二九〇圖)
- (ロ) 富田晉二氏藏四乳飛禽鏡 徑二寸八分五厘 (圖版第一二九一圖)
- (ハ) 富田晉二氏藏四乳飛禽鏡 徑二寸九分六厘 (圖版第一二九二圖)
- (ニ) 橋部芳樹氏藏四乳飛禽鏡 徑二寸二分四厘 (本文第一八二圖)
- (ホ) 中村眞三郎氏藏四乳飛禽鏡 徑三寸〇七厘 (本文第一八三圖)



181



182

181
182

鏡氣雲文花行内
鏡鳳飛乳四
(橋部芳樹氏藏)



183



184

183	四乳飛鳳鏡	(中村眞三郎氏藏)
184	舞鳳鏡	(橋本芳樹氏藏)

(ハ) 橋部芳樹氏藏舞鳳鏡

徑三寸

(本文第一八四圖)

(イ)は断面三角状の周縁を有し其内に鋸齒文・楡齒文及び素文の三輪帶を繞らし中心に圓座鈕ありて其周圍の主區には四乳を配し其間に鷺口にして兩翼兩脚を張り長尾を延ばして其端彎曲せる瑞禽圖を一杯に容れてゐるのは珍らしき意匠である(ロ)亦形式之に類し三角縁の内に鋸齒・楡齒・素文の三輪帶を繞らし内に鈕座四乳及び飛禽を容れてゐるが(イ)に比し鳥首小にして其嘴鷺口にあらず鈕座大に四乳小、飛禽の手法稍纖巧となつてゐる(ハ)は圖様兩者の中間にあれども周縁は之れに異なり三角状をなさず頗る廣く且つ平らになつて内に楡齒文・素文の輪帶を繞らしてゐる(ニ)は形式前者に似て廣き周縁疎き楡齒文帶を有し素鈕と四乳との間に飛禽を容れてゐるが其頭及び尾は前數者に異なり明かに其鳳凰たることを示してゐる且尾は他の右に屈曲せるに反し是れはまともに扇形に開いてゐる(ホ)は三角縁及び鋸齒・楡齒文帶を繞らせる内に右向して尾を左に屈せる鳳形並びに間地を點綴せる雲氣を作れるは(ロ)に似て形小なれども技巧は頗る洗鍊してゐる(ヘ)は三角縁の内に稍粗大なる鋸齒文・楡齒文帶を繞らし素鈕を有してゐる圖様は前數者と異なり鳳凰の頸を下に延ばし兩足を上に擧げ尾を空中に翻して飛翔するの状を作れるは他に見ざる所此種の珍らしき實例である

(一〇) 四乳八禽鏡及び四乳四虬八禽鏡 此兩種の鏡は意匠同一義に出づるを以て同じ形式の中に入るゝことゝした樂浪出土の者は

(イ) 總督府博物館藏四乳八禽鏡

(圖版第一二九三圖)

(口) 平安南道立師範學校藏四乳四虬八禽鏡 (圖版第一二九四圖)

の二面にして其特色とする所は周縁著く廣く内に斜行櫛齒帶あり内區の周圍にも同様斜行櫛齒輪帶を繞らし内に圓座鈕を中心に作り圓座鈕の周りに内行花文日月鏡にも見るが如き三縦線四と孤線四とを交互に配してゐる内外櫛齒輪帶の間の主區は割合に狭くして三箇の乳を作り其間に文様を容るゝのである(イ)は各乳間に陽線双禽を(口)は虬形を配して其腹背に各一の陽線小禽を作つてゐる其周縁廣きに過ぎ爲めに主區は狹隘となり充分に文様を容ること能はざれども却て簡朴溫雅の風をあらはしてゐる蓋内行花文日月鏡の一轉して銘帶内行花文帶の代りに四乳八禽若くは四乳四虬八禽を容れたので其起因は彼より後るゝも亦既に前漢時代に始まつてゐる慶尙北道永川郡琴湖面に於て前漢時代と認むべき諸遺物と共に此形式の鏡が出土せることは有力の證據である

(一) T_LV_L鏡 此形式の鏡は割合に多く發見された其特色をする所は中央方郭外の主區にT_LV_L文様のあることで余等は特に之をT_LV_L鏡と稱するのである此名稱は固より適當にはあらざれども既に往々學者間に慣用され別に名案なき故姑く此名稱に従ふことゝした近年梅原末治氏は其著鑑鏡の研究等に於て方格規矩鏡の名を用ひられてゐる此形式の鏡には多く周縁に鋸齒文波文流雲文等を用ひT_LV_L間に四神瑞禽等を配し往々方郭帶に十二辰名を容れてゐる

然るに此T_LV_Lは往々簡略されて「L_LV_Lとなり」T_Lとなり「T_Lとなり」となり終に消滅し

て唯四乳を遺すのみとなる

此形式の鏡に年號銘を有するは羅振玉氏か拓本を有せる王莽の始建國二年の「T_L鏡である樂浪より富田氏所藏の居攝元年鏡の出土せるまでは年號銘を有せる最古の鏡として知られてゐた又別に年號銘なきも其銘文により明かに王莽時代の鏡と認むべき者に「T_LV_L鏡もあれば四出「T_L鏡もある(富岡謙藏氏著古鏡の研究)金索には既に「T_LV_L鏡に王莽時代と認めし者に新銀鏡新善銅鏡新肖氏鏡の三面を擧げてゐる蓋是等「T_LV_L式鏡始めて王莽時代に出現せしにあらざり内行花文長宜子孫鏡「四獸首鏡「八鳳鏡「精白鏡「方格四乳鏡等と共に既に前漢時代に起りたるべきことは關野が數年前考古學會に於て周鏡に就てを講演せし時説いたことがある王莽時代に「T_LV_L鏡の外其簡略された「T_L鏡や四出「T_L鏡などの有つたことは其前身たる「T_LV_L鏡の少くも前漢時代まで溯らねばならぬことを示してゐる故に是等「T_LV_L系鏡は既に前漢時代に起因を有せし者なれども其手法や技巧にそれゝ相違のあることは主として製作年代に新古あることを想はしめるから後漢時代より西晉初までも行はれてゐたのであらう今樂浪出土鏡の此形式の系統に屬する者を擧ぐれば

(甲) T_LV_L式鏡には左の八面を數へる

(イ) 富田晉二氏藏八乳「T_LV_L漢有善銅鏡 徑五寸一分 (圖版第一二九五圖)

(ロ) 關口半氏藏八乳「T_LV_L鏡 破損徑不明 (圖版第一二九六圖)

(ハ) 富田晉二氏藏八乳「T_LV_L尙方鏡 徑五寸四分 (圖版第一二九七圖)

- (三) 富田晋二氏藏八乳T L V 尙方鏡 徑七寸四分五厘(本文第一八五圖)
- (ホ) 富田晋二氏藏八乳T L V 尙方鏡 徑四寸五分五厘(本文第一八六圖)
- (ヘ) 中村眞三郎氏藏八乳T L V 鏡 徑四寸三分(本文第一八七圖)
- (ト) 平壤覆審法院保管八乳T L V 鏡 (本文第一八八圖)
- (チ) 白神壽吉氏藏八乳T L V 無銘鏡 (圖版第一二九八圖)

(イ)は七八片に破損せるも全部完存水銀色に多少綠銹を帯び周縁廣くして鋸齒、複線鋸齒及び鋸齒の三重輪より成り其内に楡齒帯及び銘帯がある中央に複線圓座鈕ありて其外を方郭を以て繞らし方郭と銘帯との中間なる主區に「T L V」の文様と八個の乳とを配し間地に四神及び四の靈獸靈禽の圖をあらはし銘帯には左の銘がある

漢有善銅出丹陽和己銀錫清且明左龍右虎主三旁樂未央。

技工精鍊此種「T L V」鏡の白眉である

(ロ)は梧野里の埴土取穴より出土せしものにして破損完からず僅かに全形の三分一を存するに過ぎざれども形式は明かに窺ふことができる其周縁は素文鋸齒、複線鋸齒及び鋸齒の四重輪より成る其内に楡齒帯銘帯のあること主區に「T L V」を配し八乳及四神四靈物を配すること亦前者に同じけれども中央には四葉鈕ありて方郭との間に更に十二辰方帯を設けてゐる此十二辰帯は十二支の名稱を各面三字づゝ配し其各字間に圓座乳を容れてゐる蓋此鏡は此種の頗る優秀なる標本なれども破損完からざるは惜むべきである銘字の讀み得る者は



185



186

185 T L V 尙方鏡 (富田晋二氏藏)
 186 T L V 尙方鏡

……上有仙人不知老。渴汲玉泉飢食棗。浮游天下敖四海。俳侖名山采芝草。年比金石

(八)は此種の完全せる標本にして周縁は二重鋸齒輪より成り其内に橢齒帶銘帶あること方郭との間の主區に「T」及「V」及び八乳四神四物を配し方郭内に十二辰方帶あること中央に四葉座鈕あることすべて前者と同様なれども手法は稍簡に銘帶には左の銘を容れてゐる

尙方作竟真大工。上有山人不知老。目汲玉泉兮。

山は仙の目は渴の省畫である銅質灰色に灰黒及綠色銹褐色銹の斑文を點じてゐる

(二)は其大きに於ても其圖様の精妍なることに於ても此「T」及「V」式鏡の最も優れたる標本である大正十四年出土せし者にして銅質鉛黒色にして綠銹斑を點し數片に破損せるも完形を見る事ができる其周縁は前記の者と別手法に出で廣狹の二重輪より成り廣き外輪に流麗なる所謂流雲文を繞らし狭き内輪に鋸齒文を作つてゐる周縁内には橢齒帶銘帶を置くこと普通の如く方郭外に「T」及「V」及び花座乳八個を配し其間に四神圖及び禽獸等の圖を容れてゐる又方郭内に十二乳を有せる十二辰方帶を作り中央に四葉座鈕を作れども各文字の左右に小唐草文を綴り又四葉座の形も普通よりは賑かになつてゐる銘帶には左の銘文がある

尙方佳竟真大巧。上有仙人不知老。渴汲玉泉飢食棗。浮游天下敖四海。俳侖名山采芝草。年比金石國之保兮。

(ホ)亦大正十四年の出土にして唯小部分を失ひしのみ銅質黝黒往々綠斑を點じてゐる前者と同じく流雲文及び鋸齒文の二重輪より成れる周縁を有し方郭内に雄健なる四葉座鈕を容

れ方郭外の主區の意匠普通の如くなれども技工頗る精妍銘帶に左の銘を有してゐる

尙方作竟真大好。上有仙人不[㊦]_㊧。圖[㊨]汲玉泉汎食棗。浮游天下敖三海。壽如金石之天保。樂未央。

(乙)は其周縁鋸齒文複線波文鋸齒文の三輪帶より成り内に斜行櫛齒帶銘帶が繞らされてゐる方郭内素鈕の四葉座は雄健の手法より成り主區には「T L V」及び八乳の間地に陽線禽獸文を配してゐる銅質蒼黒色を帯び往々綠斑をあらはし銘帶に左の銘字がある

□氏作竟真□□。上有山人不知老。羽汲玉泉兮。

(丁)は大正十四年三月大同江面柳寺里の一古墳より出土したのである破損せるも殆ど全形を存してゐる普通の二重鋸齒縁四葉座鈕十二辰方帶を有する「T L V」鏡なれども「V」が他の直角なるに反し鈍角をなし四神圖及び他の靈鳥靈獸圖が簡素となつてゐる銘字は次の如くである

□□作竟真大任。上有山人不知老。羽汲玉泉兮。

任は巧、羽は渴の省字である

(子)は此種の最も小にして且簡單なる者にして破損して一部を亡つてゐる周縁は陽線波文及び鋸齒文の二重輪より成り内に櫛齒帶あれども銘帶を缺いてゐる方郭外の主區には「T L V」と八乳との間に簡單なる小禽を容れ方郭内に圓座鈕ありて其四隅に小捲葉を作つてゐる

(乙)「T L V」式鏡に屬する者には左の五面がある

(イ) 關口半氏藏八乳「T L V」尙方鏡

徑約四寸八分。(圖版第一二九九圖)



187



188

187 T L V 鏡 (中村眞三郎氏藏)
188 - L V 鏡 (平壤覆審法院藏)

(口) 關口半氏藏八乳「一」V尙方鏡

(圖版第一三〇〇圖)

(ハ) 關口半氏藏八乳「一」V尙方鏡

(圖版第一三〇一圖)

(三) 中村眞三郎氏藏八乳「一」V尙方鏡

徑五寸四分二厘 (本文第一八九圖)

(ホ) 中村眞三郎氏藏八乳「一」V尙方鏡

(本文第一九〇圖)

(イ) は二重鋸齒縁及び楯齒帶銘帶方郭普通の如くなれども主區に「T」Vの「T」の代りに「一」を用ひてゐる八乳及四神其他の動物文を容るゝこと亦常の如く方郭内中央に圓座鈕を置き方郭との間に一種の文様方帯を作れるは珍らしき手法である文字は省畫甚しく纒かに左の如く判讀することができる

尙方作竟真大巧上有山人不老兮。

(ロ) は前記富田晉二氏藏八乳「T」V尙方鏡本文第一八五圖と同形式にして唯主區内の「T」の代りに「一」が用ひられしのみで圖様手工彼より少く簡樸となつてゐる即ち流雲文及び鋸齒文縁小素乳並びに輪郭稍複雑せる四葉座鈕を有し主區に四神及四動物を配してゐる銘文は左の如く一部判讀さるゝが他は不明である

尙方作竟真大巧上有山人不知老。□□□□壽□□□

(ハ) は(イ)の一層簡略されし者にして主區内「一」V及び八乳の間に鳥の變化して殆ど形をなさざる者を容れ銘文は普通の此種尙方鏡に見る所の如きも粗笨甚しく殆ど判讀すらできぬ
(ニ) は周縁及び主區の形式(イ)の如く四神及び四靈物を容れ方郭には八乳を配し乳間に

子丑寅卯辰巳午未

の八字を作つてゐるのは十二支を節略したので郭内中央には圓座素鈕を作れるのみ銘帯に

は 尙方作竟真大好。上有山人不。

の十二字を見はせるのみで字句完からず且字畫粗笨纒かに右の如く判讀することができた

銅質黒色多少緑銹を帯びてゐる

(木)は形式前者に似て彼の方郭内の八乳と十二支の文字がなく唯二重方郭内の四隅に小葉形を作れるのみである主区内「L」及び八乳間に四神瑞禽文を配してゐる銘帯文字亦粗漫なれど左の如く判讀することができる

尙方作竟真大好。上有山人□知老。且不□。

銅質は黒色にして破損の爲め鏡面の一小部分を失つてゐる

(丙)「L」式鏡に屬する樂浪鏡は余等の調査を経し者に左の三面がある

(イ) 富田晉二氏藏四乳「L」漢有善同鏡 徑四寸二分二厘 (圖版第一三〇二圖)

(ロ) 關口半氏藏四乳「L」鏡 徑三寸九分 (圖版第一三〇三圖)

(ハ) 稻葉善之助氏藏八乳「L」鏡 徑六寸五分 (本文第一九一圖)

(イ)は廣き盤雲縁を有し櫛齒帶銘帶常の如く主区内に「L」のみを入れて「V」を略し方郭の四隅に四乳を綴り其間に靈獸靈禽を容れ圓座鈕外、方郭の内隅に三ヶ月形をあらはしてゐる



189



190

189
190

— L V 尙方鏡
— L V 尙方鏡

(中村眞三郎氏藏)

銅質鉛黒色を帯び左の如き銘字を容れてゐる

漢有善同出丹陽和己銀錫青且明。

同は銅の青は清の省畫である

(口)は破損して鈕及び周縁の一部を失つてゐる其周縁には奇なる動物と雲文を陽刻し其内に斜行櫛齒帯及び銘帯あり方郭外の主區には前者の如く「丁」と四乳との間に靈獸靈禽を容れてゐる銘字は次の如く頗る簡疎の者となつた上有山人が「上山」の二字となり其下の句を全く缺いてゐる

□氏作竟真大巧上山

(ハ)は破損一部を失ひしも殆ど全形を見ることができ其周縁は廣狹の二輪帶より成り外の廣き輪帶には頗る文様化せる四神圖を繞らし内の狭き輪帶には鋸齒文をあらはし周縁内には唯櫛齒帯ありて銘帯を缺いてゐる内區には「丁」及び八乳を方郭の四方に配し其間に四神圖を大きく容れ往々供養の小人物を其旁に作れるは他に見ざる所此種の鏡の頗る進歩せる意匠である方郭内には大なる圓座鈕の四方に短き三縦線四隅に圓座乳を作り其間に小粟文を點じてゐる

(丁) 四出「丁」鏡に屬する樂浪出土の者は左の二面を數へる

(イ) 關口半氏藏四乳四出「丁」鏡 徑二寸六分二厘 (圖版第一三〇四圖)

(ロ) 多田春臣氏藏四出「丁」鏡 (圖版第一三〇五圖)

(イ)は周縁に稍粗き鋸齒を作れるのみにして内に斜行櫛齒文あり方郭外には四方に「丁」を出し四隅に乳を配し其間に八小禽を容れ方郭内には圓座鈕を作る技工頗る簡單である

(ロ)は前者の更に簡略され周縁の鋸齒文及び其内の櫛齒文稍粗にして方郭は割合に大なるため主區は甚狭く方郭の四面に「丁」を出し其左右に簡單なる雲氣様文を配するのみにて四隅の乳も省かれ中央圓座鈕の四隅には陽線を射出してゐる白神壽吉氏の蒐集鏡中亦是れと殆同形式の者がある

(戊) 四乳「鏡」 此種の者は前記の鏡の「丁」が簡略されて「一」となりし者にして余等知る所左の二面がある

(イ) 中村眞三郎氏藏四乳「鏡」 徑三寸四分二厘(本文第一九二圖)

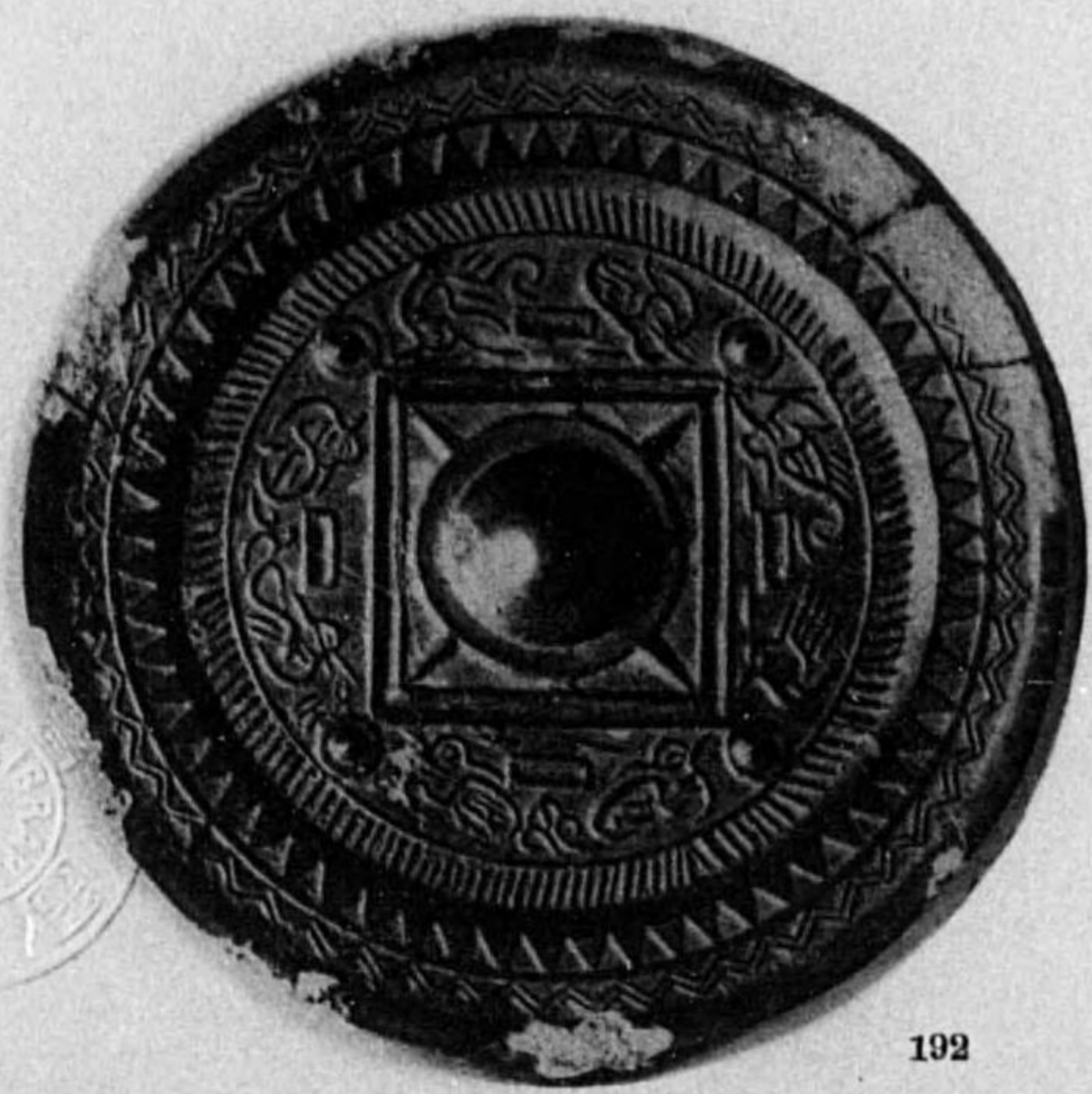
(ロ) 稻葉善之助氏藏四乳「鏡」 徑二寸六分 (本文第一九三圖)

(イ)は小なれども形制完好其周縁は複波文鋸齒文の二重輪帶より成り内に斜行櫛齒帶あること普通見る所の如く方郭外の主區は前記關口氏藏四出「丁」鏡(圖版第一三〇四圖)の「丁」が簡略されて「一」となりし者にして方郭の四隅に各一素乳を作り四面に八禽を配すること亦彼の如くなれども方郭内の手法は多田氏藏四出「丁」鏡の如く圓座素鈕の四隅より方郭の隅に向ひて陽線を射出してゐる銅質黒色にして多少綠銹を見はしてゐる

(ロ)は此種の鏡の最も簡略されし者にして三角縁内に疎き波文帯を作り内に亦疎き櫛齒帶を繞らし方郭を略して大なる素鈕の周圍に於ける主區には四面に大なる「一」四隅に圓座素乳



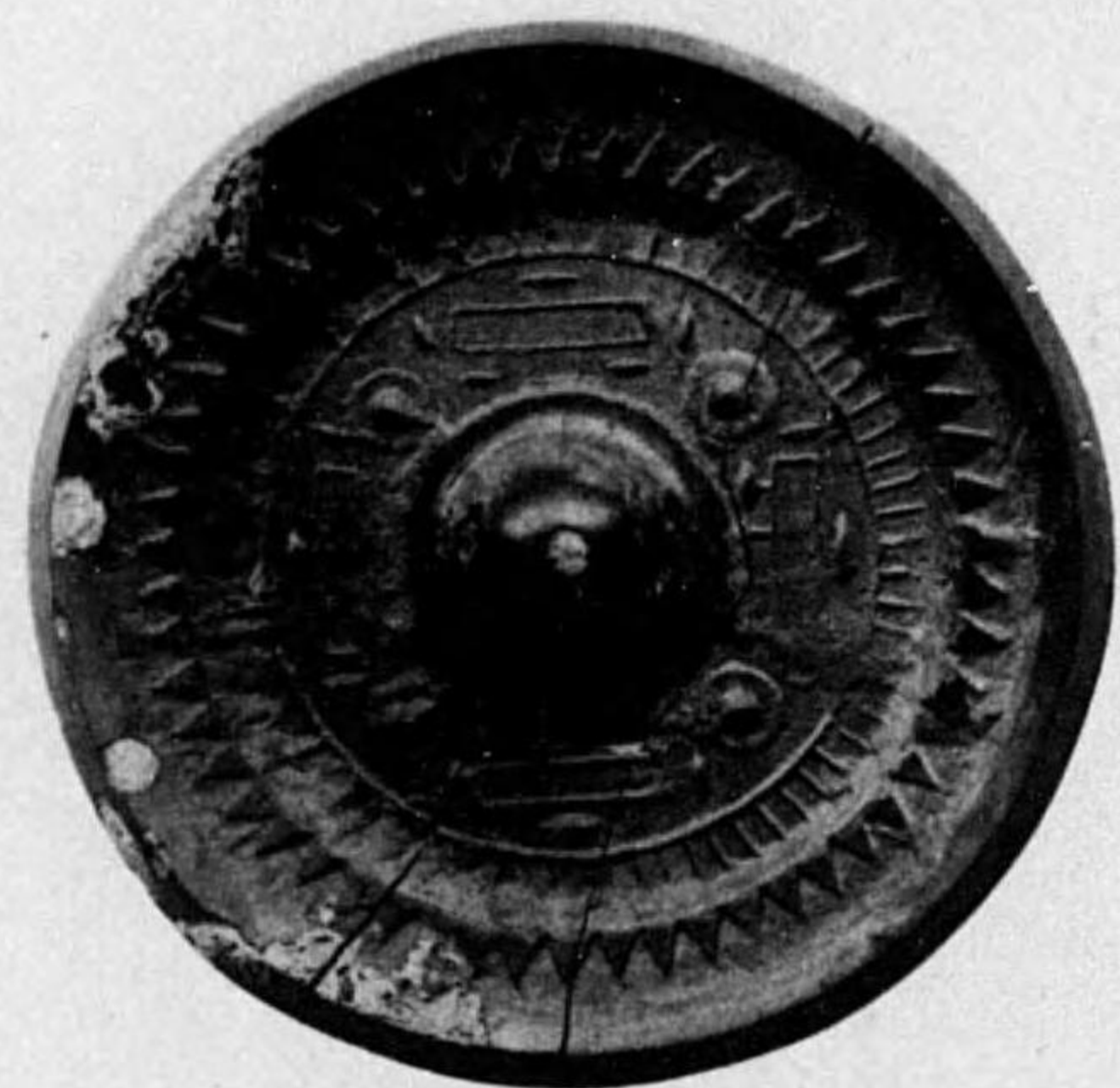
191



192

191 八乳「TL」鏡 (稻葉善之助氏藏)

192 四乳「一」鏡 (中村眞三郎氏藏)



193



194

193	四乳「一」鏡	(稻葉善之助氏藏)
194	龍虎宜子孫鏡	(關口半氏藏)

を配し「」の周圍に短き陽線五を點じてゐる技巧頗る粗漫簡拙蓋し西晉時代まで下るべき者であらう

(己) 四乳鏡 此種の者は「L」鏡の文様が省略の極「L」悉く失はれ又四神動物の圖様も略され圖版第一三〇五圖の四出「L」鏡の「L」の代りに四乳を配し其左右の雲氣様文が三縦線となつたのである周縁及び方郭内の手法は殆ど彼と變りはない實例としては左の鏡が一面發見されてゐる

總督府藏四乳鏡 徑二寸九分五厘(圖版第一三〇六圖)
手法簡單技巧亦疎拙蓋し西晉時代を上る者ではあるまい

(二) 龍虎鏡 此龍虎鏡は大なる素鈕を中心として左右に龍虎相對向睥睨するの狀を浮彫にし割合に廣き鋸齒文又は動物文を施せる周縁を有せる者にして其起原は王莽時代前後であらう樂浪出土の者は

(イ) 中西嘉市氏藏龍虎李氏鏡 (圖版第一三〇七圖)

(ロ) 諸岡榮治氏藏龍虎宜子鏡 徑三寸九分 (圖版第一三〇八圖)

(ハ) 關口半氏藏龍虎錢文鏡 徑五寸三分五厘(圖版第一三〇九圖)

(ニ) 關口半氏藏龍虎鏡 徑三寸五厘 (圖版第一三一〇圖)

(ホ) 關口半氏藏龍虎宜子孫鏡 徑四寸一分 (本文一九四圖)

(イ)は周縁廣くして外廣内狹の二重帶輪に分ち外帯に多くの鳥や獸や魚などの圖様を刻み

内帯に鋸齒文を繞らし周縁の内には一段低く櫛齒帯銘帯を作り中央に頗る大なる素鈕を置き其外の主區に龍虎對向睥睨するの相をあらはし鈕座の下龍虎の間に一小人物を作る銘帯の文字は、

李氏作之竟誠清明服之富貴壽命長。左龍右虎扶兩旁。朱鳥玄武引陰陽。單于來臣至漢□。子孫蕃息樂未央。

「單于來臣至漢□」の「漢」の下の字は「所」の如くに見ゆるも明かでない兎に角單于が漢に臣事し來朝したことをいふのであらう匈奴は秦漢以來長く北方に勢威を振ひ秦皇漢武と雖も之を臣服すること能はざりしに宣帝の甘露三年(西紀前五一年)呼韓邪單于始めて臣と稱して入朝し竟寧元年復入朝し王昭君を賜はつたことは史上顯著の事實である是後前漢末に至るまで常に誠意を以て漢に奉事せしが王莽の亂に叛き去り爾後叛服常なかつたされば此鏡に曰ふ所單于來臣漢□に至つたのは宣帝の時の事を指すのであらう從來北邊に猖獗を極め漢庭永く其制馭に苦みし匈奴が臣と稱して來朝し宣帝亦特に寵遇を隆にし天下の耳目を聳動せしことは文獻に明かに載する所此紀念すべき大事件を當時鏡背の銘に記せるは有り得べきことである是を除きては前後漢を通じて單于來臣を特筆すべき程の時は無かつた様である故に余等は此鏡は宣帝の朝單于の來臣が猶耳目に新たなる時に造られし者にして恐らくは宣帝元帝間の者であらうと思ふ果して然りとせば年號こそなければ略銘文により年代を推定すべき現存最古の前漢鏡の一として注意すべき者たるのみならず技工亦精鍊此種の漢鏡中出色の

者である

(口)は前者の一段變化せし者周縁は斷面三角形をなし内に二重鋸齒輪帯を作つてゐる其内に櫛齒帯あれども前者の銘帯を缺き大なる素鈕を中心として龍虎對睨し下に危坐の一人物を作つてゐる龍虎の手法彼と頗る似たる所あれども圖様は類型的となり龍虎の足は大に過ぎ人物亦簡朴稍精鍊の技を缺いてゐる而も猶雄渾の風を帯ひ龍の背後の間地に倒まに「宜子」の二字を容れてゐる銅質漆黒色にして破損せるも全形を見ることが出来る

(ハ)は周縁に稍細密なる鋸齒文複線波文鋸齒文の三輪帯を作り其内に櫛齒文帯及び銘帯を繞らすこと普通の如くなれども銘帯の斷面稍蒲鉾形に膨起してゐるのは珍らしい圓座素鈕外に二重に櫛齒文及び一種の文様を繞らし主區には上下に對向せる龍虎文を作り其間に各一錢文を容れてゐる錢面には方孔の四隅より對角線を出だし左右に「五十」の字上下に各一票文を作つてゐる銘は左の如くである

吾作明竟四夷服。多賀國家人民息。胡虜殄滅天下復。風雨時節五穀孰。得天力。孰は熟の省字である銅色蒼黒半は綠青銹を帯びてゐる

(ニ)は(口)の稍簡にして小なる者銅質漆黒を帯び周縁は彼の二重鋸齒が唯一重となり内部の龍虎は頗る洗鍊され鈕座下の小人物を缺いてゐる

(ホ)は梧野里の埴土取穴より出土せし者破損して主區の一部を失つてゐる亦龍虎鏡の頗る美なるものである周縁は(ハ)に似て稍廣く素鈕座外龍虎對向せる者頗る雄渾の風を帯びて鈕

- (又) 多田春臣氏藏六乳禽獸宜子孫鏡 徑約四寸九分 (圖版第一三二二圖)
 - (ル) 關口半氏藏四乳仙獸鏡 徑約三寸二分 (圖版第一三二三圖)
 - (ヲ) 富田晉二氏藏四乳仙鳳尚方鏡 徑四寸三分七厘 (圖版第一三二四圖)
 - (ワ) 多田春臣氏藏四乳禽獸鏡 徑三寸九分 (圖版第一三二五圖)
 - (カ) 關口半氏藏四乳禽獸鏡 徑三寸一分三厘 (圖版第一三二六圖)
 - (ヨ) 關口半氏藏四乳禽獸鏡 徑三寸三分三厘 (圖版第一三二七圖)
 - (タ) 多田春臣氏藏六乳仙獸翟氏鏡 徑五寸八分六厘 (圖版第一三二八圖)
 - (レ) 橋都芳樹氏藏七乳禽獸鏡 徑五寸五分 (圖版第一三二九圖)
 - (リ) 關口半氏藏六乳仙獸上方鏡 徑四寸五分 (圖版第一三三〇圖)
 - (ツ) 橋都芳樹氏藏七乳禽獸內行花文鏡 徑六寸二分 (本文第一九五圖)
 - (ネ) 富田晉二氏藏四乳雙龍雙虎鏡 徑四寸 (本文第一九六圖)
 - (ナ) 多田春臣氏藏六乳禽獸鏡 徑四寸一分七厘 (本文第一九七圖)
 - (ラ) 平壤中學校藏錢文緣鏡 (本文第一九八圖)
 - (ム) 關口半氏藏四乳唐草文鏡 徑三寸一分八厘 (圖版第一三三四圖)
- (イ) は三角邊二重鋸齒文及び複線波文の周縁を有し内に櫛齒帶及銘帶を繞らせること他の種類の者に同じく中央素鈕を繞れる主区内に四乳を配し其間に兩神像兩供養者及び兩獸を容れてゐる兩獸は一は獅子の如く一は虎のやうである銘帶に左の銘をあらはしてゐる

吾作明鏡。幽凍三商。統德序道。配象萬彊。曾年益壽。宜子。
 會は増の省畫である此鏡技工精妍形體完好此種の鏡の代表的の者である恐らくは後漢時代に屬する者であらう

(口)は石巖里出土の者にして銅質漆黒を帯び破損一部を失つてゐる形式手法銘字前者に伯仲してゐる同時代の者であらう周縁は前者の如く二重鋸齒文及び複線波文より成り其内に櫛齒帶及び銘帶があり素鈕の周圍即ち主區に四乳間兩獸兩神及び兩供養者を容るゝこと亦前者と同様である銘は次の如くである

吾作明鏡。幽凍□□□□。配象萬彊。曾年益壽。子孫蕃昌。

闕損せる所の文字は前者の銘より三商。統德序道。の六字であることが分かる

(ハ)は梧野里土取穴より出でし者數片に破損せるも全部完存してゐる形式頗る前二者に似書體亦同様であるが神人の手法が少しく異つてゐる周縁は素文帶の内に細密なる複波文及び鋸齒文の輪帶を繞らし櫛齒帶銘帶普通の如く素鈕外の主區には二重圓座及び四箇の圓錐狀乳を配し其間に牛肉彫の龍虎及平肉浮彫の兩神人對話せるの狀をなせる者二處を交互にあらはし龍虎は雄渾神人は溫雅の氣象を發揮してゐる此兩神人は次の(二)の銘文により東王公西王母にして各一供養者を伴つてゐるのであらう後漢時代か魏時代に屬すべき者であらう銘は左の如くである

土吾作鏡。幽凍三商。配象萬彊。統德序道。敬奉賢良。曾年益壽。富王人子。

最初の字は上の左文か不明である

(二)は三角邊内に雄勁なる雲氣文及鋸齒文を繞らして周縁を作り、楯齒帶銘帶之に次ぐこと常の如く中央素鈕外に小珠文帶を周らせるは珍らしい主區には大なる二重圓座内に乳を作れる者四處を配し其間に龍虎及び東王公西王母并びに供養者を交互に容れてゐる前三者に比すれば技工稍粗なれども銘文は圖様の神人が東王公西王母たることを示すことに於て特に注意すべきである銅質水銀色にして多少綠銹を帶ぶ銘は左の如くである

弓氏作竟多子孫。上有東王公西王母。長如山石兮。

最初の一字は讀むことができぬ

(ホ)は周縁(ハ)に似て鋸齒文稍疎に楯齒帶亦同様にして銘字を缺く主區には素鈕の周りに圓座四乳を配し其間に側向せる神人が藥を搗くの圖を浮彫にしてゐる手法前者に似て稍粗なれども圖様は他に類例の無き珍らしき者である

(ヘ)は周縁三角邊及び二重鋸齒輪帶より成り内に楯齒帶銘帶あること普通の如く素鈕の周圍主區内に四乳間龍鳳馬車及び舞踊人物を作る圖様は珍らしけれども技工は頗る古拙である銅質水銀色をなし多少綠銹を帶ぶ銘は次の如くである

王氏乍竟真大巧。上有山人。

其圖様手法の頗る退化式なるより見れば或は西晉時代に屬する者か

(ト)は周縁三角邊及び複波文鋸齒文の二重輪より成り次に楯齒帶及銘帶がある中央素鈕外

に珠文帶を繞らすこと(二)の如く主區には四乳間に四神圖をそれ／＼容れてゐるが圖様鮮明技巧亦割合に精、銅質漆黒にして頗る美しい銘は左の如くである

芳氏作竟真大工。上有山人大吉兮。

初めの一字は讀むことができぬ

(チ)は其周縁に鋸齒文と共に双捲蔽手文を配せるは珍らしく素鈕の周圍には三重圈座を繞らし主區には圓錐様乳四個を配し其間に四瑞獸を容れてゐる銅質漆黒色を帶び破損一部を失つてゐる銘帶に左の如き刻銘がある

吾作明竟。幽園。商。配像萬疆。統德序道。敬奉。子孫番昌。命長。

「凍三」の二字は破損の爲め失はれてゐる他の例によれば「敬奉」の下に「賢良」の二字が略され「命長」の上に「見師」の二字が略され銘文としては不完全の者であるが漢系鏡には此例が割合に多い(リ)は周縁に複波文と鋸齒文を繞らし素鈕の外の主區に四乳間四瑞獸を容るゝこと前者と同様で銅質鉛黒色を帶び破損一部を失つてゐる銘文に曰く

吾作明園。幽凍三商。配像萬疆。統德序道。敬奉賢。

「竟」の字は破損の爲め闕けてゐる是れにも「敬奉賢」の下に良の字が略されてゐる

(又)は銅質漆黒にして破損十の三を失つてゐる周縁には二重鋸齒輪を繞らし素鈕の周圍には斷面半圓形の凸帶によりて内區と主區とを界し内區には六小乳を配し其間に「宜」「子」「孫」の三字と唐草様文とを交互に容れてゐる主區には六乳間に瑞獸瑞禽を作つてゐるが様式手法

前者に似てゐる銘帯には左の銘がある

上方乍竟真大工青龍白□以下缺失

(ル)は破損内區の一部を失つてゐる周縁は稍粗き二重鋸齒文を繞らし内に斜行櫛齒帶ありて刻銘を有せず主區には四乳間兩獸一仙の外鳳凰の如き者を作りしが如くなれとも破損の爲め不明である技巧は稍粗大の風を帯びてゐる

(ヲ)は破損多少の闕失がある二重鋸齒周縁を有し主區四乳間に三鳳一仙の像を容れてゐる圖様は珍らしいが技工は稍粗略である銘帯に左の銘があるが文字粗漫纒かに判讀することができ

尙方作竟真大巧上以下不明

(ワ)は銅質蒼黒色を帯び周縁廣く上平らに疎なる複波文及び密なる鋸齒文を繞らし内には斜行櫛齒帶ありて銘帯を缺く素鈕の周圍に稍廣き素文圈を繞らし素鈕との間の狭き間地に交互三縦線と一縦線とを各四個所に入れ更に素文圈外に斜行櫛齒帶を繞らせるは圖版第一二九三圖の四乳八鳳鏡の餘制である主區には四乳間に蒼龍白虎朱雀と玄武の代りに一神人を容れてゐるが是等の圖像は細巧なる陽線を以て作られてゐる

(カ)は大體に於て前者と同形式にして周縁廣く複波文鋸齒文を繞らし内に斜行櫛齒帶あり銘帯を缺く中央素鈕の周圍に二輪帶を作り内帯は三縦線を以て十二區に分ち各區に俯仰の半月形を交互に容れてゐる更に内區には陽線より成れる一虎三禽を現し手法稍簡疎である

(ヨ)は前兩者の亞流にして周縁廣く波文及鋸齒文の二重輪より成り内に斜行櫛齒帶あり内區には車輪形の乳を四處配置せるは珍らしき手法にして乳間に前者の如く陽線の一虎三鳳を容れてゐる技工は前兩者よりは稍簡略となつてゐる

(タ)は此種六乳鏡の優品にして銅質漆黒鮮美技巧頗る洗鍊されてゐる周縁は三角邊及び細密なる二重鋸齒と複波文の輪帶より成り内に櫛齒帶銘帯あること普通の如く中央素鈕の周圍に斷面半圓の界圈を以て内區と主區とを分かち内區には六乳間に「宜」「子」「孫」の三字と唐草文を交互に入ること圖版第一三二二圖の六乳禽獸宜子孫鏡と同意匠である内區には六乳間に雄勁なる手法より成れる龍虎瑞獸及一神人を半肉彫にあらはしてゐる銘帯の刻字は次の如くである

翟氏作竟幽練三商統德序道配像萬疆曾年益壽富貴番昌功成事見師命長

「功成事」は三字句にして一字省略されてゐる

(レ)は周縁廣く平らにして流雲文及鋸齒文を繞らし内に斜行櫛齒帶ありて銘帯を缺く素鈕の周圍には主區との間に二重輪帶を作り内輪帶には九乳を配し外輪帶には唐草様文を作り狭き圈帶を以て主區と界してゐる主區には内行花文座を有せる乳七個を配し其間に陽線の瑞禽瑞獸を容れてゐる銅質水銀色に綠銹群青銹を帯び細絹が表面に錆び付いてゐる技巧精鍊此種の逸品である

(リ)は石巖里出土の者にして銅質水銀色に綠銹土銹を帯び周縁は三角邊及び二重鋸齒輪帶

より成り、櫛齒帶銘帶普通の如く素鈕外に紐様界圈を繞らし主區に六乳間一仙五瑞獸を作り銘帶に左の銘がある

上方乍竟真大好、青龍白虎在左右、曾年益壽宜子。

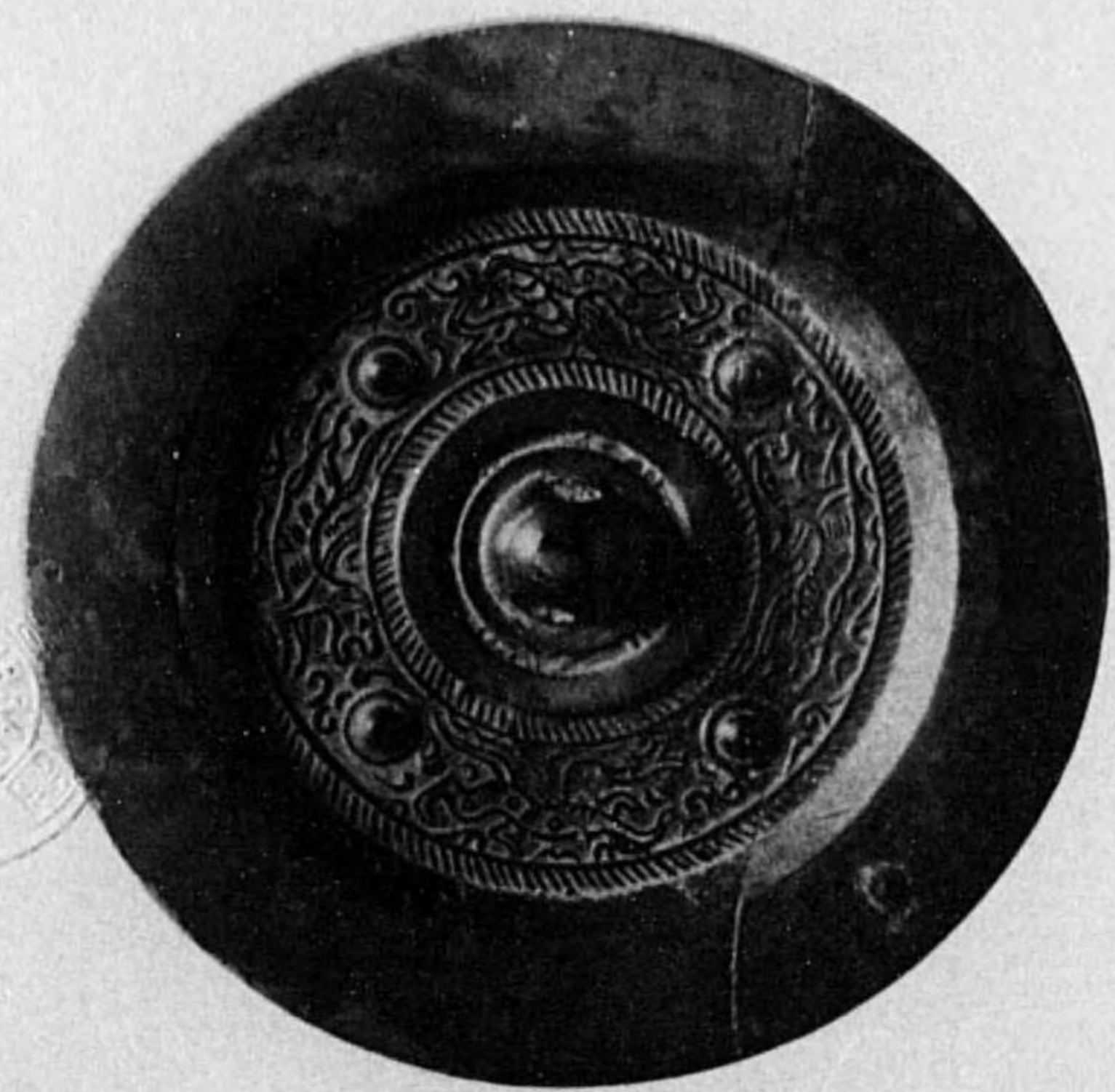
(ツ)は圖版第一三二九圖の七乳禽獸鏡(レ)と内行花文鏡の合成に係れる者にして其周縁は廣くして禽獸文と雲氣文より脱化せし一種の唐草様文と鋸齒文を繞らし内に斜行櫛齒帶ありて銘帶なく主區には内行花文座乳七個を配し其間に陽線の四神及び禽獸圖を容れてゐる其内部は内行花文帶を繞らし素文帶斜行櫛齒帶之に次ぎ中央素鈕との間に九乳帶を作り各乳間に簡なる唐草文をあらはしてゐる手法精妍此種の優品にして銅質蒼黒色に褐銹斑を點じ微に綠銹を吐いてゐる

(ネ)は圖版第一二九三圖の四乳八禽鏡と同形式にして唯彼の四乳間に容れたる八小禽の代りに陽線雙龍雙虎を以てしたのである即ち周縁は廣く平板にして他の鋸齒文や流雲文などを繞らせる者と異り主區の内外に斜行櫛齒帶を作り圓座素鈕の周圍に素文帶を周らし其間の狭き間地に三縦線と三ヶ月線を交互に配してゐる銅質水銀色にして黒色斑を現してゐる(ナ)は周縁廣く平らにして三重鋸齒輪を繞らし櫛齒帶ありて銘帶を有せず中央大なる素鈕を繞りて狭き珠文帶を作つてゐる主區には六乳間に四神及び二瑞獸を容れてゐるが技巧精妍にして銅質蒼黒色を帯び多少綠青銹を點出してゐる

(ラ)は此系統に屬すれども主區以内を失ひ唯周縁を存し僅かに内區の馬の形を見るのみな



195

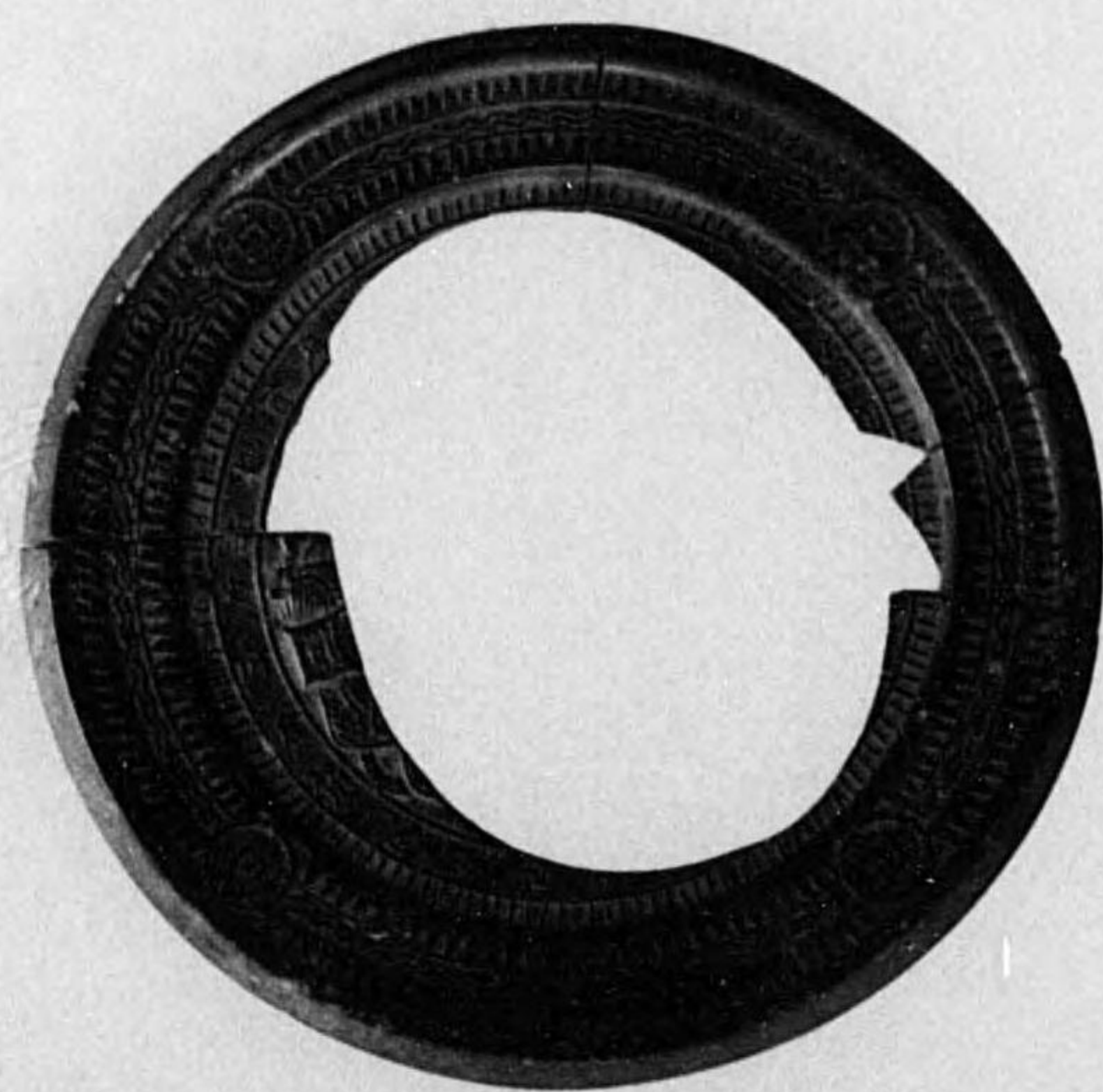


196

195 七乳禽獸内行花文鏡 (橋都芳樹氏藏)
196 四乳雙龍雙虎鏡 (富田晋二氏藏)



197



198

197	六乳禽獸鏡	(多田春臣氏藏)
198	錢文緣鏡	(平壤中學校藏)

れば内區の乳數畫象の實相を知ることができぬ而も周縁の二重鋸齒文及び複波文の輪帶間に錢形四を配せるは他に殆ど見ざる珍らしき意匠である銘帶は半ば破損せるも其遺れる文字左の如くである

□氏作竟□□有倉龍居左白虎……………宜具……………
倉は蒼の省畫である

(△)は此系統の鏡の圖像が略され代りに唐草文が用ひられたのである形小に手法甚簡易周縁は三角邊と疎なる鋸齒文より成り主區の内外に櫛齒帶を繞らし主區には四乳間に巖手様の簡單なる文様が容れられ中心に圓座素鈕が置かれてゐる

(一五) 半圓方格鏡 樂浪古墳中より半圓方格鏡の出土せる者五六面に過ぎざれども割合に優秀なる者がある半圓方格鏡と稱するは周縁と主區との間に方形と半圓形とを一段高く交互に配列せる輪帶を有せる者を特に名付けたのである此種の者は支那出土鏡に年代銘を有する者少なからず從來知られし者には

後漢 天興元年 永康元年 建安十四年 熹平二年 中平□年

吳 赤烏元年 建興二年 太平元年 永安元年

西晉 泰始九年

などがある是れによれば少くも後漢時代より西晉時代までは多く行はれたやうである樂浪出土の者には既記第三號墳の半圓方格四乳神人鏡が最も優れたる傑作である其他近年發見

せられし者には左の五面がある

(イ) 富田晉二氏藏半圓方格神獸鏡 徑五寸三分二厘 (圖版第一三三一圖)

(ロ) 平壤中學校藏半圓方格神獸鏡 (圖版第一三三二圖)

(ハ) 橋都芳樹氏藏半圓方格神獸鏡 徑四寸九分五厘 (本文第一九九圖)

(ニ) 多田春臣氏藏半圓方格四獸鏡 徑四寸五分 (本文第二〇〇圖)

(ホ) 關口半氏藏半圓方格粟文鏡 徑三寸五分五厘 (圖版第一三三三圖)

(イ)は周縁廣くして菱文帯及び神人禽獸文帯より成れること第三號埴出土鏡の如く其内の斜面に細銳なる鋸齒文を作り中央素鈕外の主區と周縁との間に半圓方格を配置せる圈帯がある素鈕の周圍には紐様圈を繞らし主區には五神人四瑞獸を陽刻し半圓方格帯には花文を刻せる十四の半圓形と文字をあらはせる十四の長方形とを交互に配置し間地には粟文を作つてゐる各長方形に各四字句を刻むこと左の如くである

吾明作竟 天王日月 幽涑三商 統序德道 配象萬京 天王日月 敬奉賢良 天王日月
曾年益壽 子孫番昌 天王日月 與天無亟 天王日月 見師命長

銅質黑色に往々鉛黑色の斑をあらはし技工精細手法勁銳此種小品の最も精巧なる者の一である

(ロ)は前者と形式相似てゐるが其周縁が菱文帯の代りに奇異なる雲氣帯となり其内に神人走獸走禽帯のあることは彼と同様である半圓方格帯には各十一の半圓と方格とを配し間地



199



200

199 半圓方格四乳神獸鏡 (橋都芳樹氏藏)
200 半圓方格四獸鏡 (多田春臣氏藏)

には粟文をあらはしてゐる半圓には文様はなく方格には各四字句を入れてゐるが明かに讀むことができぬ主區には神人瑞獸を陽刻し瑞獸の背に陷凹乳を作ること四處にして素鈕の周圍には紐様圈が繞つてゐる蓋此種の頗る小なる一例にして銅質水銀色に少く綠銹を帯びてゐる

(八)亦此種の頗る纖麗なる者銅質水銀色を呈し綠銹を帯びてゐる周縁は三角文帶及び神人走獸走禽帶より成り半圓方格帯には各十二の半圓と方格とを作り半圓には草花文方格には一字づゝあらはし左の如く讀まる

吾作明竟、幽涑三商、大吉宜子。

主區には三神三獸及び獸に歸せる神人三を浮彫にし六個の陷凹乳を獸體に作つてゐる素鈕の周圍は唯圓座があるのみである

(三)は前擧げし數者と多少手法を異にし技巧精鍊刻銘の書體亦頗る優雅で此種の傑作を以て目すべきものである周縁は菱文帶と銘字帶とより成り銘字帶には左の銘がある

吾作明竟、幽涑三商、配像萬彊、統序道、敬奉賢良、堅德夫開、富貴安樂、子孫番昌、士至公卿、見師命長。

三□□□萬□來□□□□
次に半圓方格帯には各十二の半圓と方格を作り半圓には刻文なく方格には各一字づゝ入

れてゐる刻文は左の如くである
吾作明竟、幽涑三商、配像萬彊。

次に圓座鈕を繞れる主區には四瑞獸を配し瑞獸間には左右均齊の唐草様雲氣文を作つてゐる

(ホ)は此半圓方格鏡の最も簡易化された者で周縁は唯廣き素文帶より成り其内に小珠文帶を繞らせるは他に見ざる所圓座素鈕の周圍は八稜線によつて内外區を分かち外區には素文の半圓方格各八個を配し内區には四乳を作り内外共に間地に粟文をあらはしてゐる技巧は精鍊を缺けども此種の鏡の最も簡朴なる實例として興味を惹く

(一六) 樂浪出土鏡概観

余等以上樂浪郡出土の鏡を其形式によりて分類し且之を略説した其他余等の親しく調査せし者にして登載するに至らなかつた者もあり又余等の聞見に漏れし者もある而も余等の採録は出土鏡の大部分を網羅したれば是等により大體樂浪鏡の性質を知ることが出来る余等朝鮮古蹟圖譜に載せし者本報告の圖版及び本文に採録せし者に就き其形式の種別によれる數量を調査し左表を作つた是れによれば其最も多きは内行花文長宜子孫系統の三十七面にして四乳六乳七乳神獸系統の二十四面T.L.V系統の二十二面之に次ぎ數量に於て遙かに他の形式鏡に勝つてゐる更に之れに次ぐは内行花文縁八鳳四鳳雲氣鏡の十面龍虎鏡の七面四乳飛禽鏡及び半圓方格鏡の各六面内行花文日月鏡の四面にして他は二面以下である以て樂浪郡時代に如何なる形式の鏡が多く行はれしやを知ることが出来る是等出土鏡の中年號銘あるは居攝鏡一面に過ぎざれども既記の如く殆ど全部の形式は前漢時代に溯ることを得

べく其中の或形式の者は前後漢より魏晉時代まで行はれ或者は殆ど前漢時代にて終り或者は寧ろ後漢時代より魏晉時代に多く行はれたやうである内行花文長宜子孫系統は最も早く前漢時代に見はれ最も多く樂浪末まで行はれたやうである又T.L.V系統及び四乳六乳七乳神獸系統内行花文縁八鳳四鳳雲氣鏡は稍後れて前漢時代に起り亦魏晉時代まで行はれたのである八稜文鏡山字文鏡内行花文十二星鏡四乳八禽系統四乳星文鏡は主として前漢時代に屬し其他は大體に於て前後漢特に後漢より魏晉に多く行はれたやうである今一々評論するの邊はない而も樂浪出土の鏡によりて支那古代鏡の形式の行はれし範圍を局限することが出来るから其史的研究に有力なる資料を供給する者である

樂浪出土鏡朝鮮古蹟圖譜及本報告採録種別表

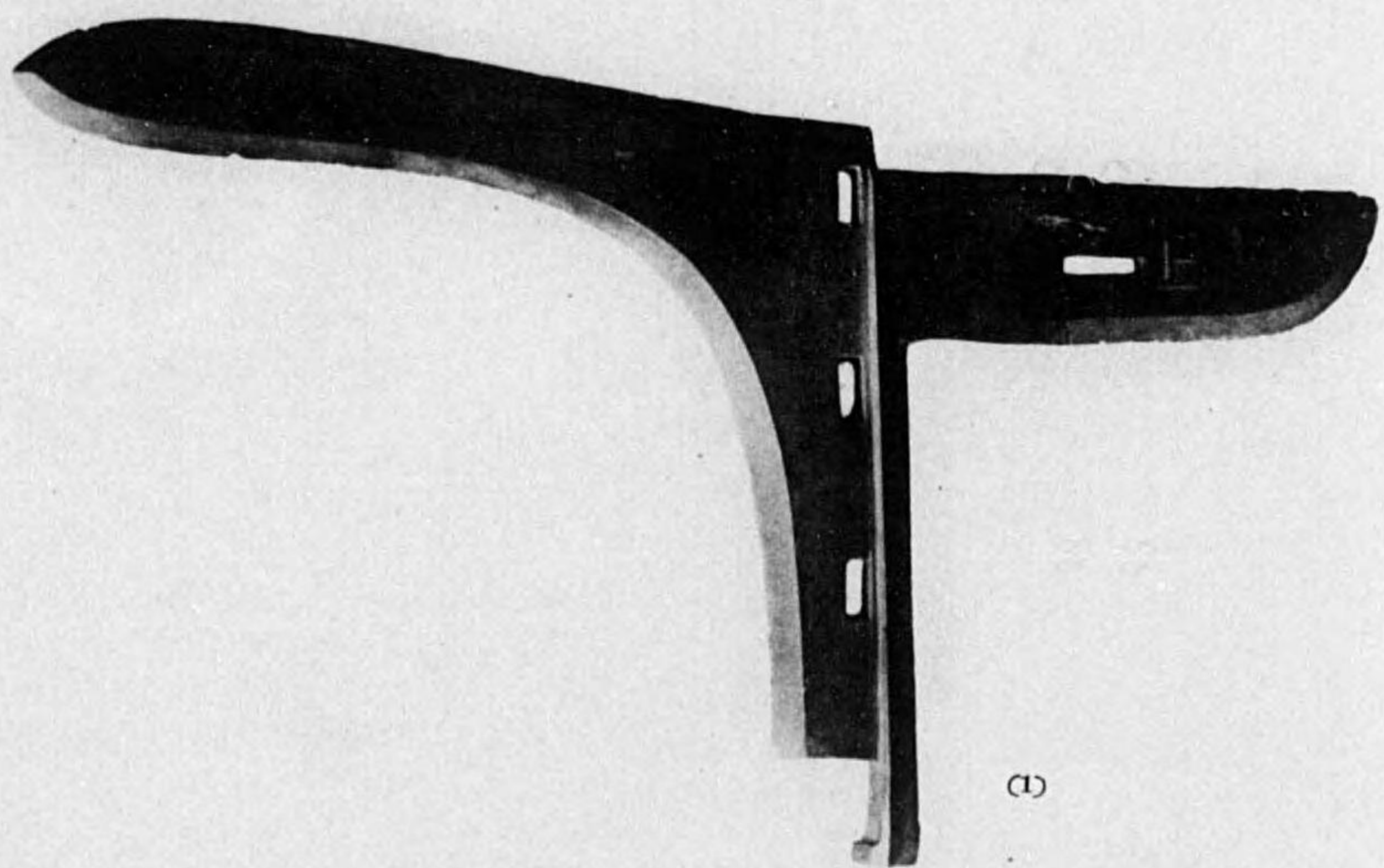
種 別	朝鮮古蹟圖譜	大正五年出土	自餘圖版	本文	合計
(一) 内行花文長宜子孫系統	二	四	二四	七	三七
(二) 八稜文鏡			一		一
(三) 山字文鏡			一		一
(四) 内行花文十二星鏡				一	一
(五) 内行花文鋸齒縁鏡					

(六) 内行花文日月鏡					
(七) 四乳星文鏡					
(八) 内行花文縁八鳳四鳳雲氣鏡					
(九) 四乳飛禽鏡					
(一〇) 四乳八禽系鏡					
(一一) T L V系鏡					
(一二) 龍虎鏡	一				
(一三) 盤龍鏡					
(一四) 四乳六乳七乳神獸系鏡		一			
(一五) 半圓方格鏡		一			
合計	三	八	八	三	一

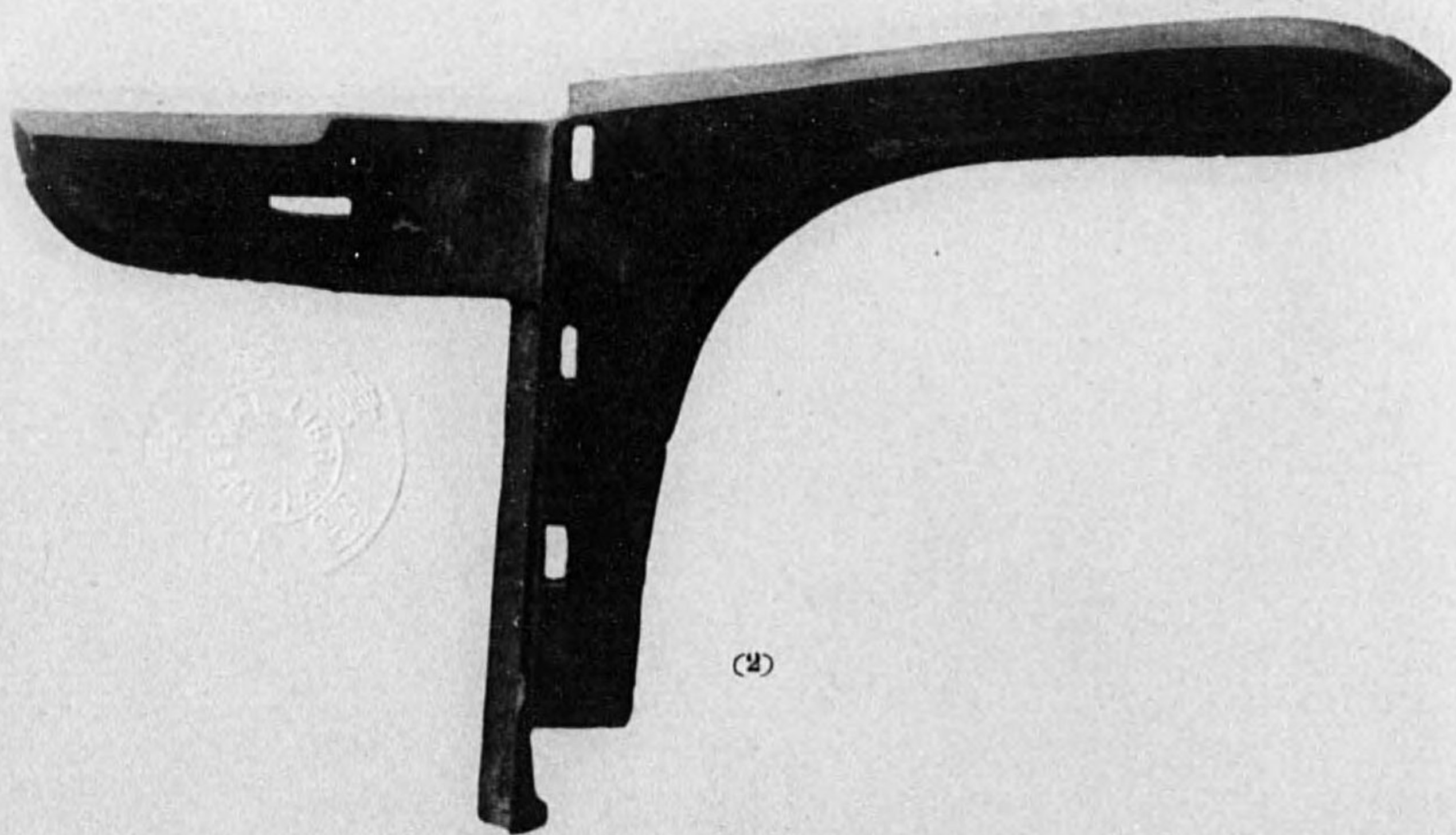
三四四

第五章 武器

明治四十二年乃至大正五年の余等發掘の古墳より出土せし武器竝に大正十二年以前に發見されし武器は何れも圖版に採録した大正十三年及十四年に於ける盜掘の結果出土せし武器は割合に多く且重要なる者も少くない是等の武器には戈あり戟あり矛あり刀劍あり斧あり

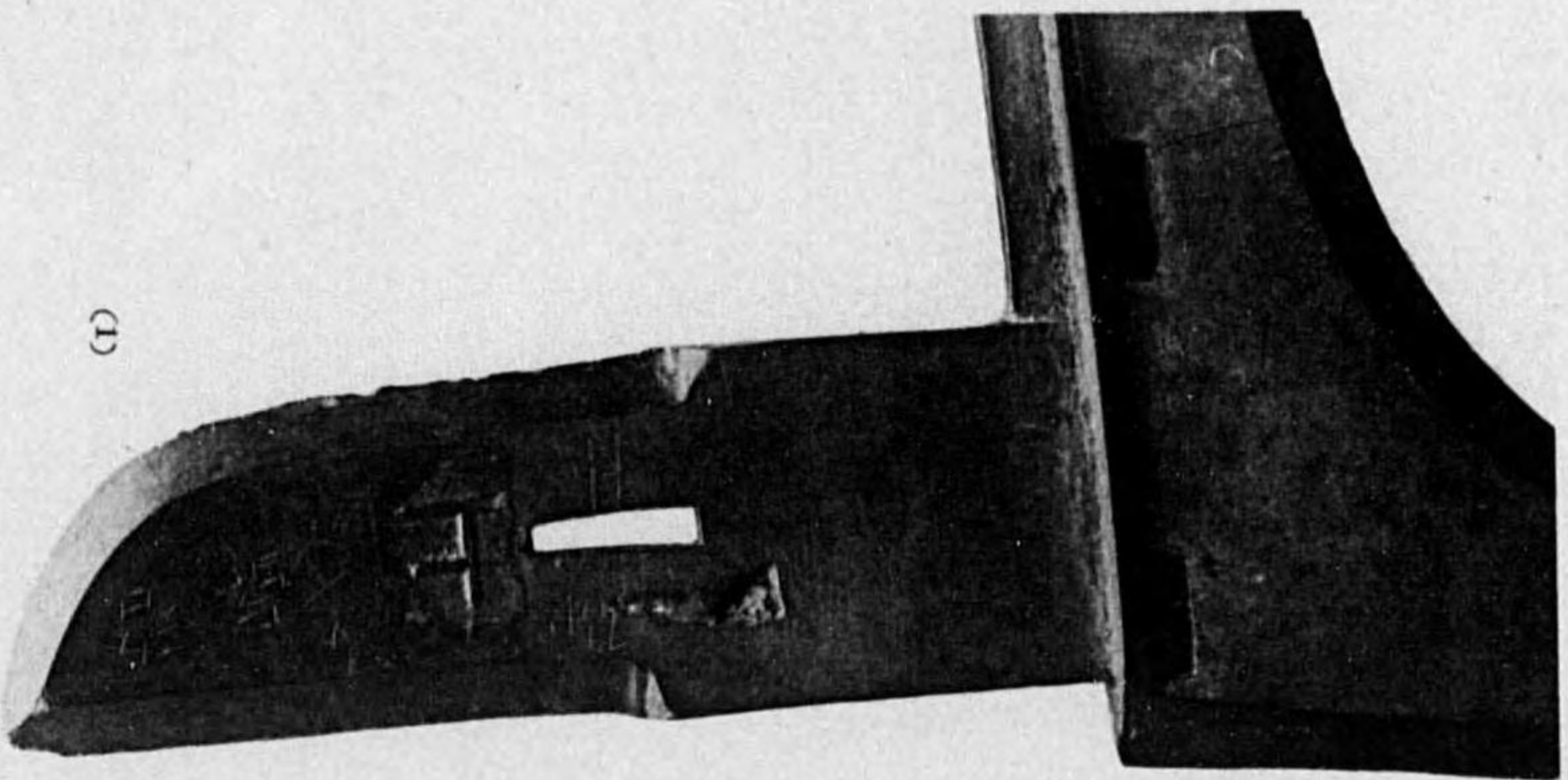


(1)



(2)

201 秦戈 (1)正面, (2)背面 (平壤高等普通學校藏) (秦始皇廿五年 B. C. 222)

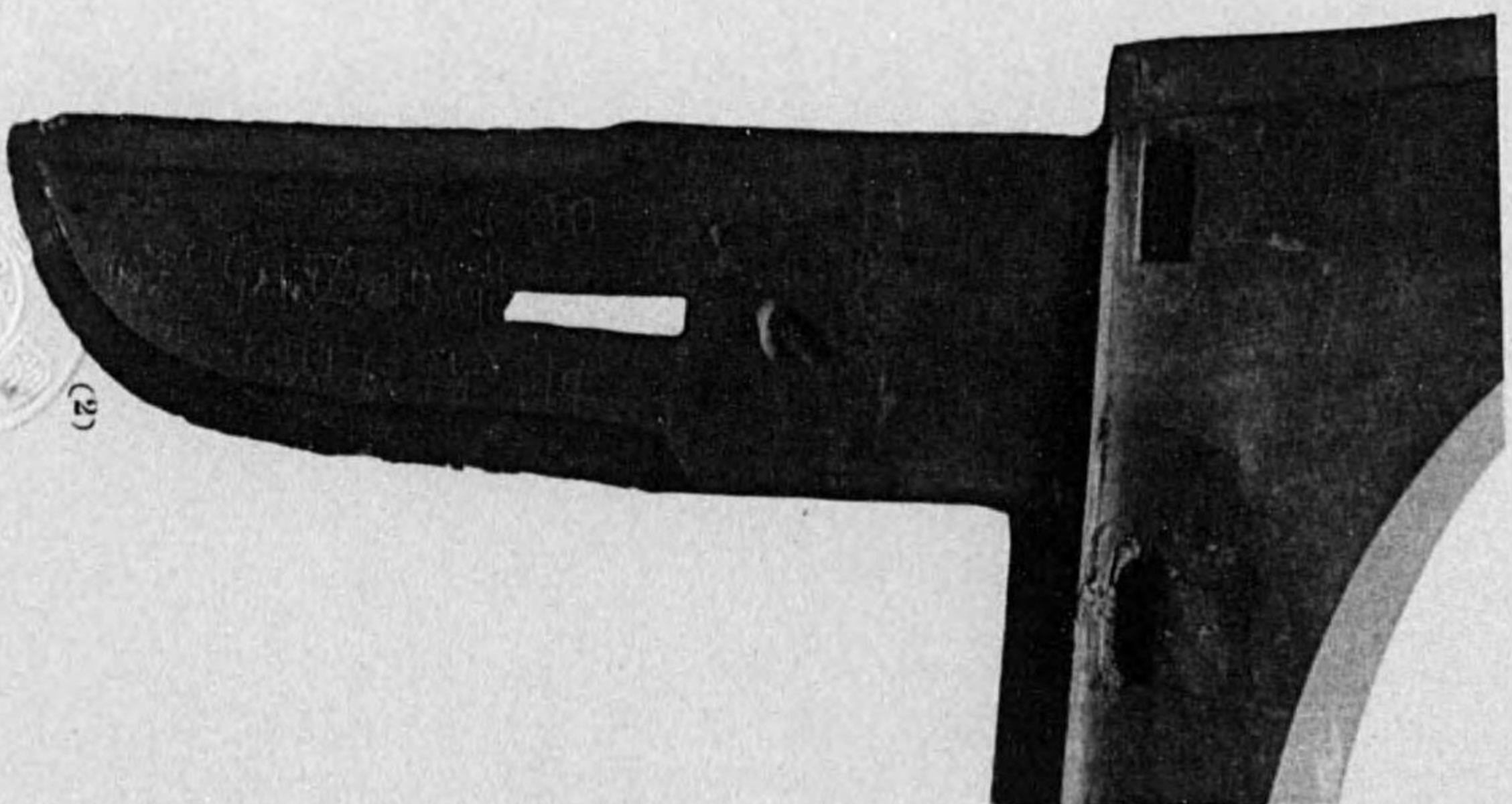


(1)

202

秦戈

(1) 正面刻銘, (2) 背面刻銘



(2)



り弩機あり銅鐵鏃あり多種多様なるも今其中特に注意すべき者を選び此章に説く事とした

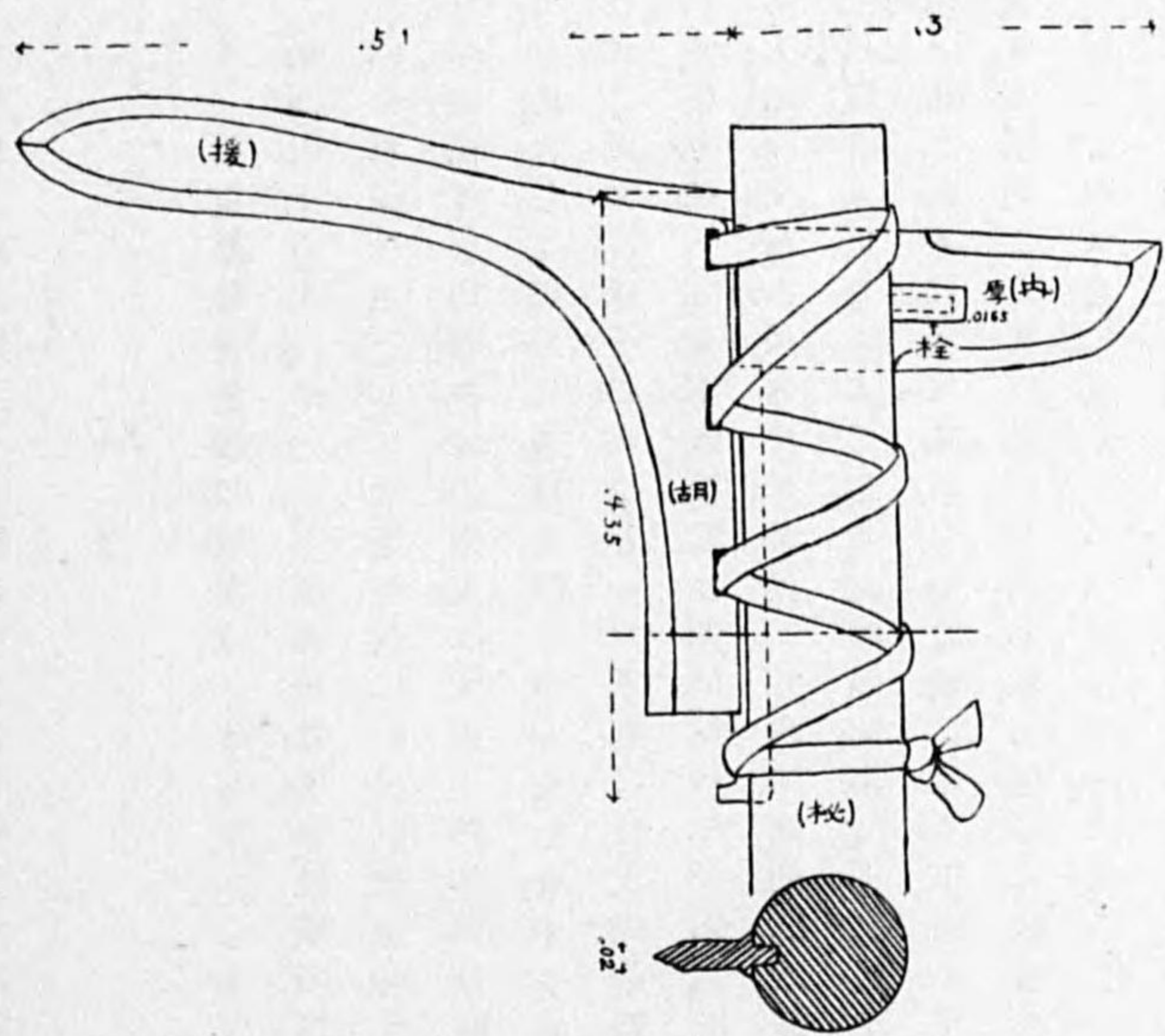
(一) 戈

(イ) 平壤高等普通學校藏秦戈 (本文第二〇一圖第二〇二圖第二〇三圖)

樂浪出土の戈は唯一つ平壤高等普通學校藏の秦戈あるのみにして他に出土したことを聞かぬ是れ戈は主として周秦時代に行はれ樂浪時代には殆ど使用せられなかつたためであらう平壤高等普通學校藏の秦戈は大正十四年同校藏銅矛及び平壤中學校藏の銅劍と共に出土せし者にして朝鮮に於ける最古の金文を有する貴重標本である

戈は説文には「平頭戟也」といひ「正義」には「戈鈎矛戟也。如戟而橫安。但頭不向上爲鈎也。直刃長八寸。橫刃長六寸。刃下接柄處長四寸。竝廣二寸。用以鈎害人也」と載せ其形制につきては「周禮冬官考工記に「戈秘六尺有寸。又戈廣二寸。内倍之。胡三之。援四之」と記し註に「内。謂胡以內接秘者也。胡其矛也。援直刃也」といふてゐる是等の記事によれば戈の刃は直上せず横に鈎の如く曲れる者を援と稱し其本に於て是れと稍直角に近く下向して秘即ち柄に接着せる者を胡と稱し援胡相接せる隅角より更に横に支出し以て柄頭に嵌着せらるゝ者を内といふのである其寸法は考工記によれば戈の廣さは二寸にして内は之に倍して四寸胡は三倍即ち六寸援は四倍即ち八寸である是れは正義謂ふ所とも一致してゐる要するに戈は我鷲口と鏃の折衷された者の様に其横刃即ち援を敵に打ち込みて掻き切るの用をなす者である

此秦戈は援。長さ五寸一分胡。長さ四寸三分五厘援。は兩刃にして其鋒尖り胡。は之れと連續して稍屈折し約百二度の鈍角をなし片



203 秦戈柄(秘)繫着想像圖

て稍屈折し約百二度の鈍角をなし片刃にして援の下方の刃に連なつてゐる他方は断面長方形の造り出しとなり胡。身との界線は隆起してゐる此界線に沿ひて長方形の孔を穿つこと三處そして胡の下端に切欠きを造つてゐる又内。は援の反對の方向に横に延びて其端刀鋒の如くなれども刃は上下についてゐる而も中央部に至りて終つて居る又内。の中央部には横に長方形の孔を穿つてゐるが此孔の内方刃の無き處は鑢目を遣せども他の部分分は援。胡。内。共に磨琢されて美しき光澤をもつてゐる關野は其形狀手法と後に説けるが如き戟と柄との連結の狀態より此戈を柄に取付ける方法を

知り試みに本文第二〇三圖の戈柄繫着圖を作つたのである即ち先づ断面圓なる柄の頭部に細長き孔を穿ち戈の内。を之に貫きて柄を胡。の側面に接着せしめそして豫め作られたる柄の縦溝に援。の作り出しを嵌着し而る後革紐又は苧紐にて戈の長方形孔を貫通して之を柄に緊縛するのである胡。の下端に切欠きのあるのは此紐の離脱を防がんが爲めの用意にして内。の半部に刃を作らざるは柄中に入るがため此部に鑢目を遣せるは磨琢の必要な故である又内。に横に長き孔を穿てるは栓を嵌挿して柄頭の抜け出づるを防いたのであらう又柄頭には戟に於けるが如く銅冠を施してあつたかも知れぬ

「追記」民國十二年(大正十二年)十月の支那農商部地質調査所發行地質彙報に J. G. Anderson 氏の "An Early Chinese Culture" に戈を木柄に接着せし圖が出てゐるが稍關野の考按に近い又文學博士高橋健自氏が大正十二年十二月末學位論文として京都帝國大學に提出せられし銅鉞銅劍の研究(大正十四年十一月發行)中にも大體關野と同様の意見を述べてゐる、此戈の内。の表面及び背面に刻銘がある表面には長方形の右に上の字を陽刻し其右に「洛都」戈上の四字を又長方形の上下に「郡庫」の二字を分ちて陰刻してゐる但し「戈上」の二字は明白に讀むことができぬ或は「武」であるかも知れぬ又内。の背面に左の刻銘がある

- 廿五年上郡守廟
- 造高奴工師窰?
- 丞申工
- 新社

此内の刃は銘を刻して後に造りし者にして爲めに「上郡守」の三字の右傍の一部削り去られてゐる而も明かに讀むことができる次の字は過半右より下へかけて失はれたれども「廟」の如く思はる二行目の上の第一字も後に作りし長方孔の爲めに失はれた「工師」の次は「竈」なるべく「丞申工」の次の字は讀むことができぬ最終の註は恐らくは誌の省畫であらう

此刻銘中上郡高奴洛都等の地名あるは最も注意に値する前漢書地理志に「上郡あり其統縣二十三の中に高奴も洛都もある上郡の註に秦置くとあり高奴も洛都も上郡の屬縣なれば是れ亦秦の時設置された者であらう史記項羽傳に「立董翳爲翟王王上郡都高奴」とありて索隱には高奴を今の鄜州となし括地志には延州州城即ち今の延安府治としてゐる光緒廿五年編陝西全省輿地圖には今の延安を以て秦の高奴となし鄜州を以て秦の雕陰としてゐる而も前漢書地理志に上郡の統縣の最初に膚施縣を載せてゐるから郡治は此膚施にあつたのである今膚施縣治は延安府治と同處であるから今の延安は上郡の故地であるとして地理志に膚施の外に別に高奴があるから高奴は延安以外に求めねばならぬ而も今の鄜州でもあるまい

此銘の上郡守廟□は上郡の守たる廟□といふ人を指すのであらう秦の制度では史記に載せたるが如く郡に「守衛監」を置きたれば此守は上郡の守を指すのである又秦の郡に丞ありしことも前漢書百官表に見えられたれば銘の丞は此上郡の丞を指し申は其丞の名であらう

即ち此戈は裏面の刻銘によれば上郡守の廟□が造り高奴の工師竈が製作に當り丞の申等が監督したのであらう又表面の刻銘によれば上郡庫に屬せし者が洛都縣に分置された者と

思はる洛都縣の位置は今不明であるが洛水が鄜州の傍を流れ終に黄河に注いでゐるから恐らくは其流域にあつた者であらう

右の如く刻銘に見はれし郡縣は始めて秦時に置かれし者なれば此戈の制作年代は其以前に溯ること能はざるべく且廿五年は漢代には無いから此刻銘の廿五年は秦の始皇帝の廿五年(西紀前二二二年)たるべきは一點疑を容るべき餘地は無い其上書體は秦の刻石や秦量秦權の刻字と同一の所謂秦篆にして秦量秦權の銘に廿六年皇帝盡并兼天下と書き起してある例より見るも此推定は一層の確實性を増してくる果して然らば從來支那に於て發見せられた諸戈の中秦戈と定むべき最も確實なる者である金索に秦廿四年の戈を載せたれども古篆を用ひたれば明確に秦戈と定むることは困難である羅振玉氏著夢艸堂吉金圖に廿三年云々の戈あり文字古篆體なるを以て同氏は之を古兵(先秦時代)の中に列し秦器の中に加へざりしを見ても思半ばに過ぐるであらう又故端方氏著陶齋吉金錄中秦寺工殘戈ありて二年寺工龔金角の七字を陰刻せるは單に二年とあるのみなれば必ずしも秦戈とは斷じ難い漢初建元以前の者であるかも知れぬ其他同書に秦戈數種を挙げたれども紀年銘が無い


始皇廿六年には海内を統一し天下の兵器を咸陽に聚め之を銷して重さ各千石ある鍾鏹金人十二を造つた此秦戈は其一年前に造られたのであるから戰國時代最終の紀念物たるのみならず幸にも其翌年の銷融を免かれ如何にしてか朝鮮に運び去られ二千餘年の星霜を経て始めて再び出現するに至つたのは奇と謂はねばならぬ

此秦戈は銅質鉛黒色を呈し極めて細微なる緑銹あるのみ手工甚だ精巧鋒刃の鋭利なるは猶實戦に用ゐることが出来る程である余等從來多くの支那出土の戈を見たれども此戈の如く精利なる者を知らぬ以て戦國末此種兵器の發達を想像することが出来る

(二) 銅 矛

(イ) 平壤高等普通學校藏銅矛 (本文第二〇四圖)

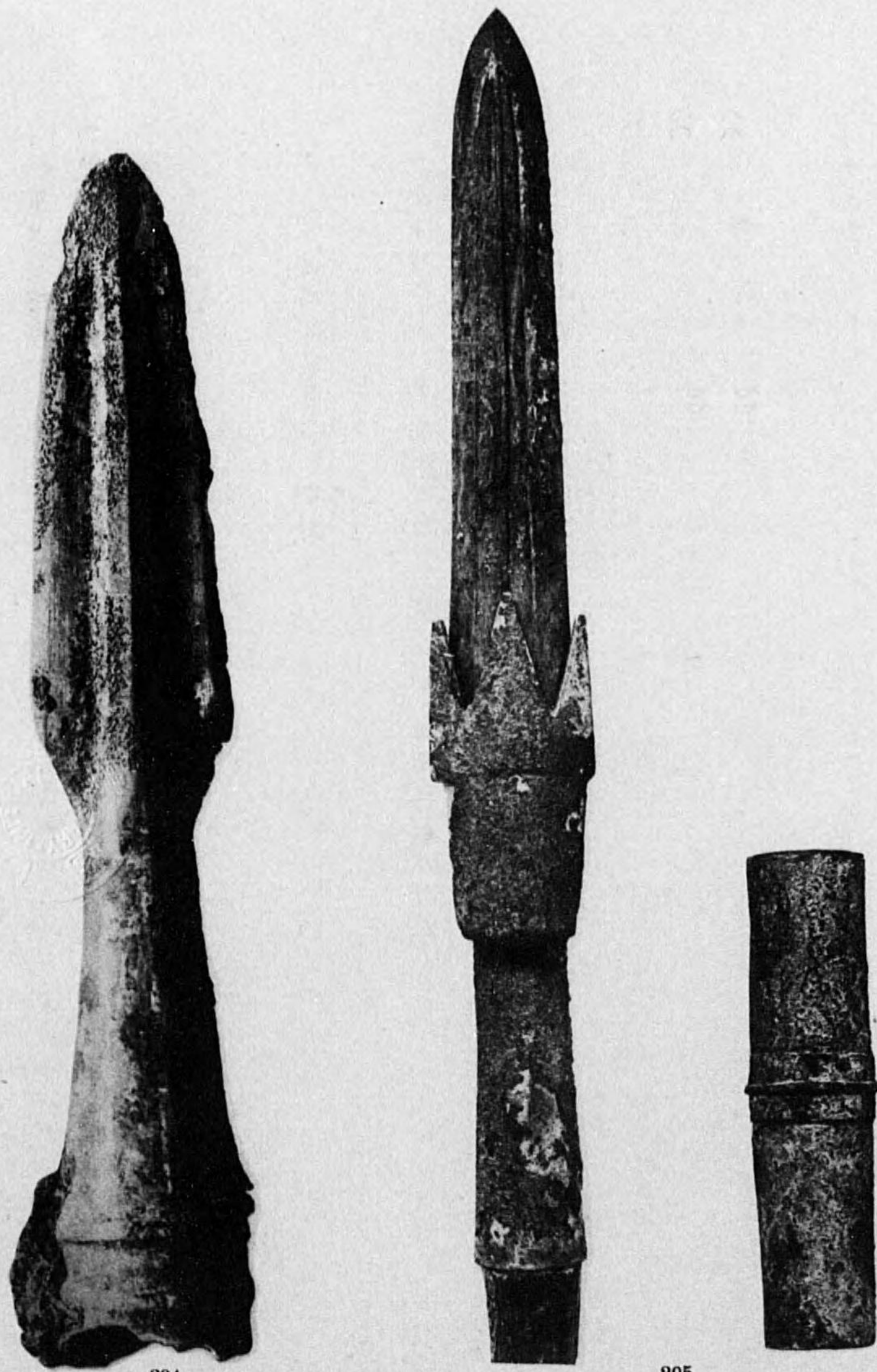
長五寸六分 下徑八分五厘

前記秦戈と共に出土せし者と稱す上半は断面  の如く中央に縦てに凸出筋ありて其左右の刃は縁邊斜めに鋭利となり矛身本廣くして端に向ひ鋭尖してゐる下半部は袋穂となり下に向ひて開き其端二條の節狀を爲してゐる銅質綠色を帯び光澤あり往々緑銹群青銹を吹き出してゐる下端に近く目貫孔あり今鐵銹を吹き出してゐるから當初は鐵製の目貫を以て柄に取着けた者と思はる此矛果して秦戈と同時代まで溯ることを得るや否や不明なれども少くも前漢時代の初期を下る者ではなからう

(ロ) 橋都芳樹氏藏銅矛 (本文第二〇五圖・第二〇六圖)

長一尺一寸二分八厘

矛身本に於て幅一寸端に向ひて鋭尖し其断面本文第二〇六圖(1)に示すが如く大體に於て凸銳狀をなし縦てに一種の線形を有してゐる其柄に接する處袋穂をなし下に向ひて開き其

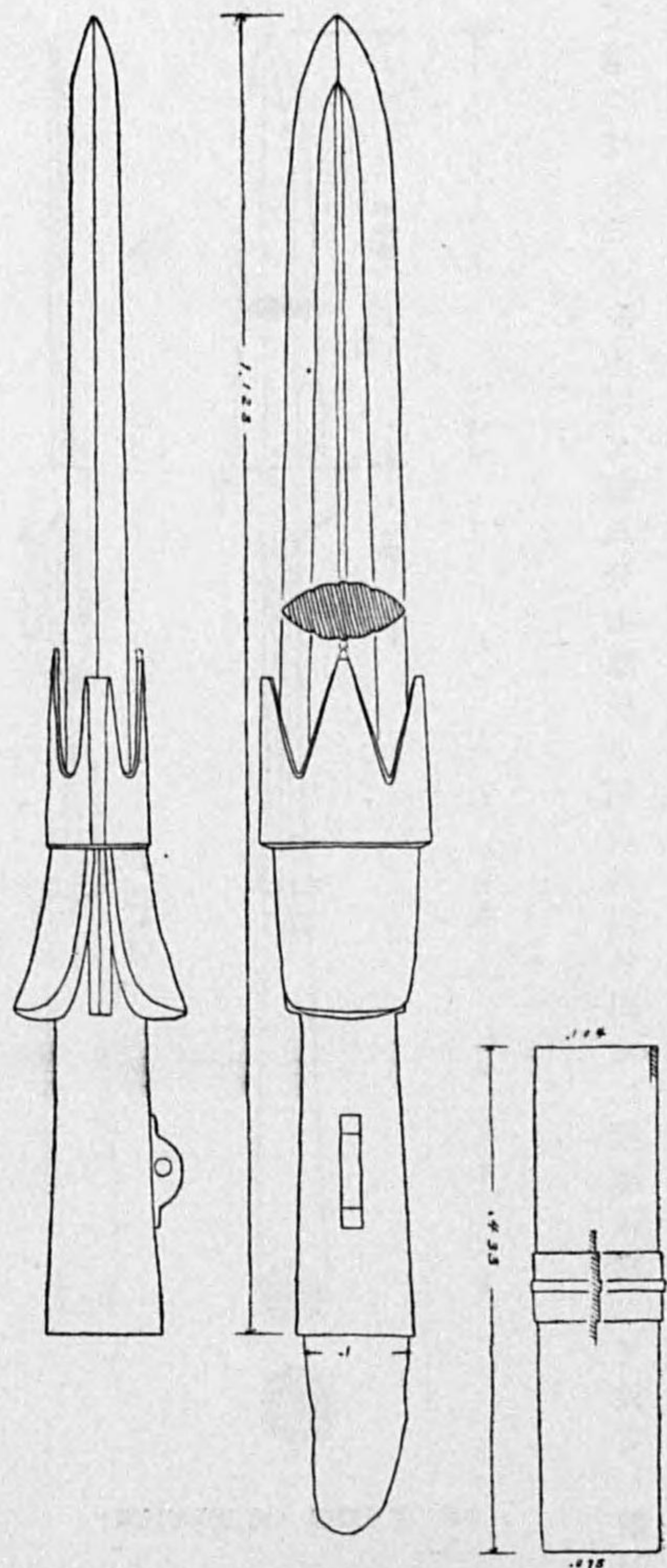


204

205

204 銅 矛 (平壤高等普通學校藏)
205 銅 矛 及 鐵 (橋都芳樹氏藏)

中央部に旒の如き者を繋がんが爲め小孔を有せる作り出しが着いてゐる本文第二〇六圖(2)の矛旒殘缺(中西嘉市氏藏)は明かに之を示してゐる特に興味を感ずるは木製の鞘の下端を飾



206 (1) 銅矛略圖 (橋都芳樹氏藏)

れる金具の猶遺存することである木部既に腐朽し去りて飾金具の上半は三片の鋸齒状をな
し下半は上窄く下開きて少しく表裏に反り鞘を抜き差しするに
便してゐる全體綠銹に多少群青銹を混じ手法頗る精美である柄
は木製に漆を塗りし者にして腐朽したれども袋穗に嵌挿せし處



206(2) 矛旒見取圖
(中西嘉市氏藏)



207

銅 矛 (多田春臣氏藏)

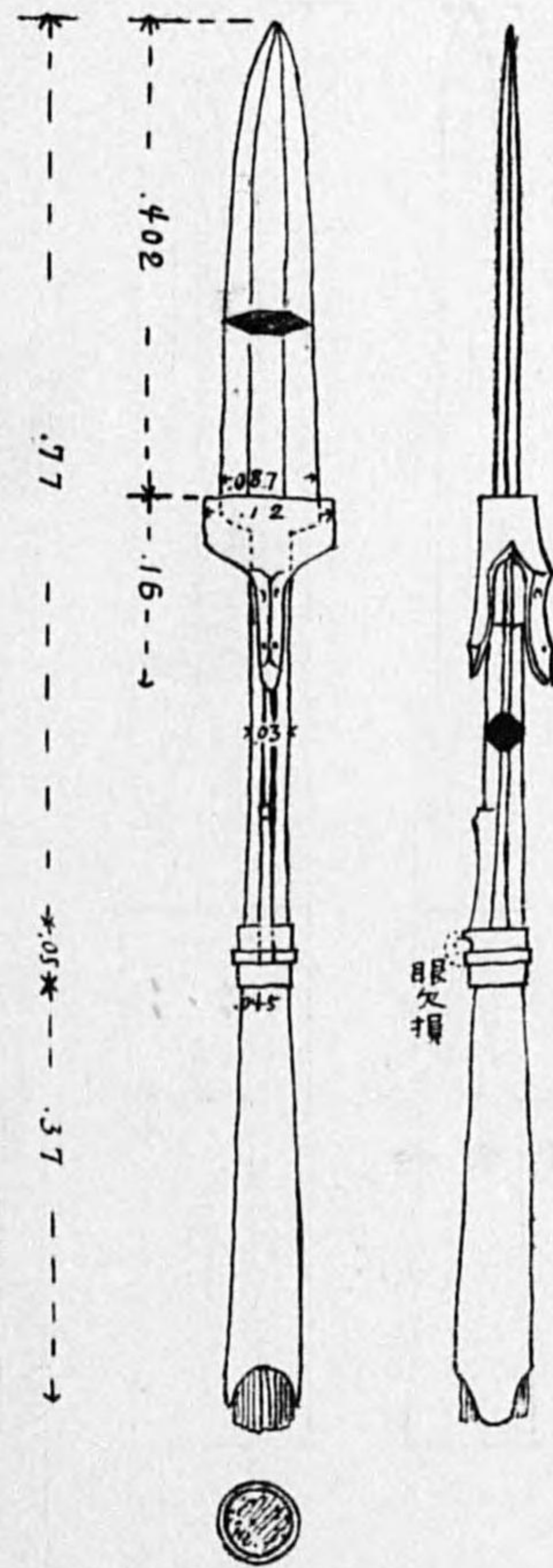


猶一部を存し別に長さ四寸二分五厘徑一端一寸四厘他端九寸八分の銅鏃が伴出してゐる

(八) 多田春臣氏藏銅矛 (本文第二〇七圖第二〇八圖)

全長一尺一寸九分

銅矛は上中下の三部に分つべく上部は矛身にして鞘の木部朽腐して下端の金具のみ鏽着



208 銅矛略圖 (多田春臣氏藏)

いて遺つてゐる矛身本にて幅八分七厘長さ鞘金具以外四寸二厘端に向ひて鋭尖し断面は本文第二〇八圖の如く脊平らに兩旁に斜面に刃を作つてゐる鞘金具は下端龍頭に象り手法頗る簡勁である中部は稍細く徑僅かに三分に過ぎず下部との間節状をなし一方に旋を繋ぐべき眼孔を造り出してゐるが今缺損してゐる下部は断面圓く下に向つて開き中空にして柄を

嵌挿する様になつてゐる此銅矛管に技工の精巧なるのみならず前者の如く鞘金具を有つてゐるのは特に注意を惹く

(三) 銅戟及び鐵戟

樂浪出土の戟は皆鐵製にして其銅製なるは今東京美術學校藏の者一あるのみ從來の支那金石書一も戟を載録せし者あるを知らぬ旬齋吉金圖錄に一種夢鄴艸堂吉金圖に四種の戟を載せたれども皆是れ戈と稱すべき者にして戟ではない戟は早く周時代に起りしも周秦時代及び漢初には銅戈主として用ひられ戟は稍後れて行はれし故銅製の者少く主として鐵製となり假令當初刻銘を有つてゐたとしても腐蝕の爲め讀むことも出来なければ完全の形として採集することも出来ぬ故金石家や骨董者の注意に上らず随つて全く載録に漏れた者と思はる後漢時代の畫象石の圖様に兵器として盛んに矛や戟を用ふる者あれども戈を用ふる者全くない是れによりて周漢時代に於ける兵器の變遷の一斑を見ることが出来る

(イ) 東京美術學校藏銅戟 (本文第二〇九圖)

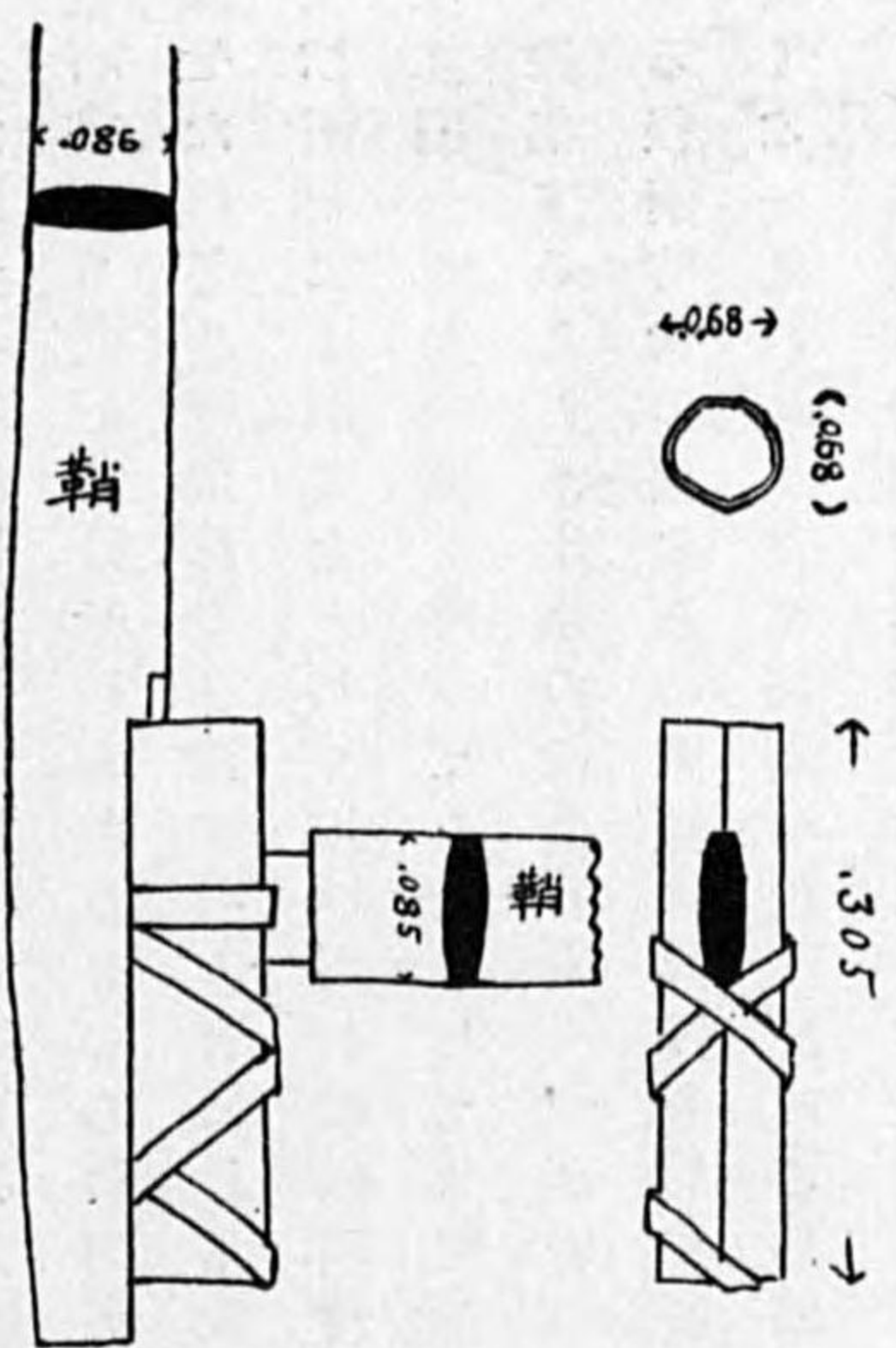
長一尺三寸三分 幅九分 枝長三寸六分七厘

全體綠鏽を帯び刃緣缺損せる所多く形完からざれども猶大體を知ることが出来る戟身上部兩刃下部片刃にして枝身の兩刃なるは普通の如く柄に緊縛せんが爲め紐を貫通する小圓孔が數個穿たれてゐる從來樂浪出土の者皆鐵製なるに此戟獨り銅製なるは珍らしい

(口) 東京美術學校藏鐵戟 (本文第二一〇圖第二一一圖)

長九寸五分四厘(下部折損)

鐵戟の上部の援は猶鞘の大部分を存すれども其下部の胡は缺損し鞘も亦殘壞形を失つて
ゐる其横枝内の端は折れたれども鞘の一部を存し且柄の頭部の金物が内に嵌挿されたまゝ



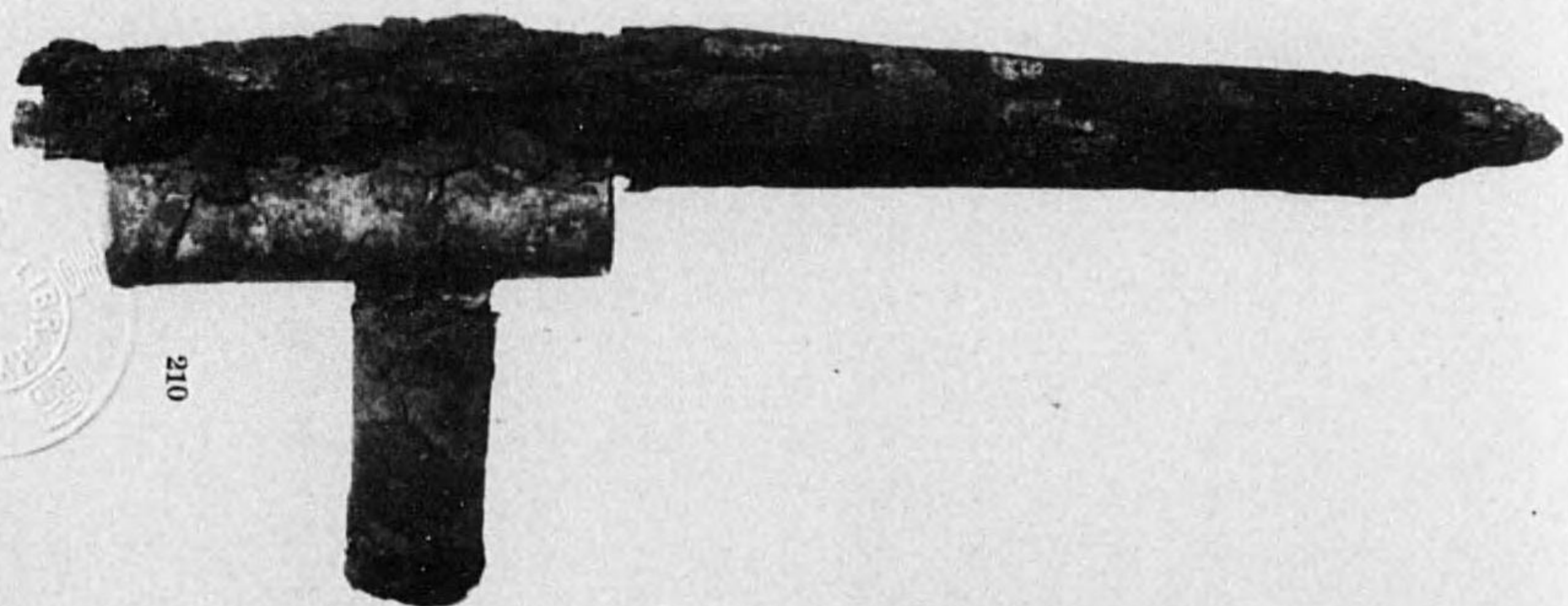
211 鐵戟柄頭及鞘一部略圖 (東京美術學校藏)

を貫通せる革紐を以て此柄頭と戟身とを緊結するのである又鞘は木製黒漆塗にして其上部
は上より援に嵌め込み下部は其まゝ胡の脊部を除き双を有せる兩面を覆ふのである又内は
別に鞘を横から嵌めるのである鞘は断面圖の如くにして外面は布を着せ黒漆を塗り内面に
も亦布を着せた形跡がある

遣り其金物の周圍に戟身に緊結せんが
ため卷かれたる革紐の一部及び其痕跡
が明かに遺つてゐる是れにより吾人は
始めて戟の形制を明かに知ることがで
きた即ち先づ柄頭の金物に長方形の孔
を穿ち此孔を戟の横枝即ち内に貫通し
て柄頭の内側部を戟の胡の脊に接合せ
しめ胡の脊に近く穿たれたる二個の長
方孔と内に縦てに穿たれたる長方孔と



209



210

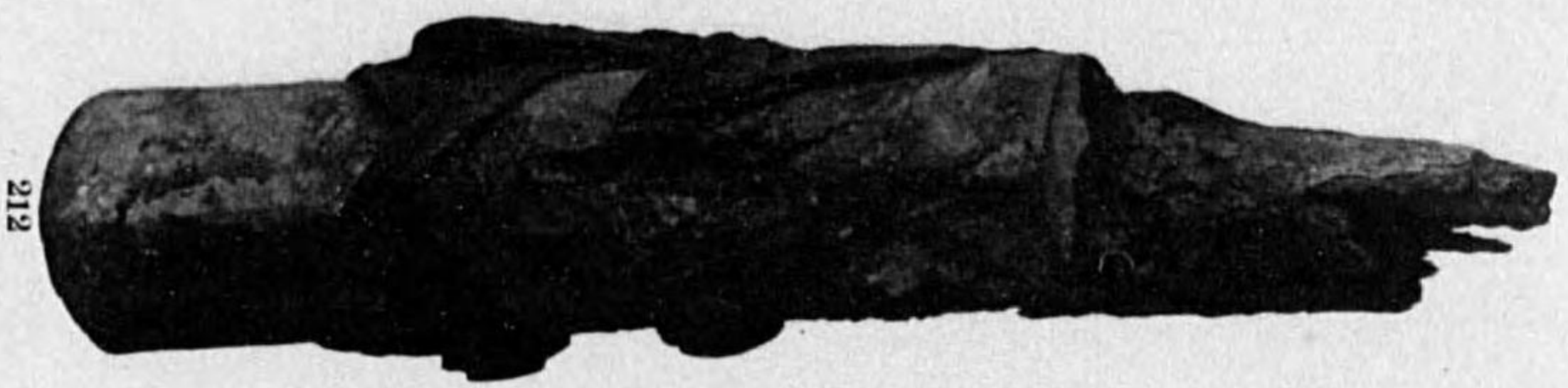
209

銅 戟

(東京美術學校藏)

210

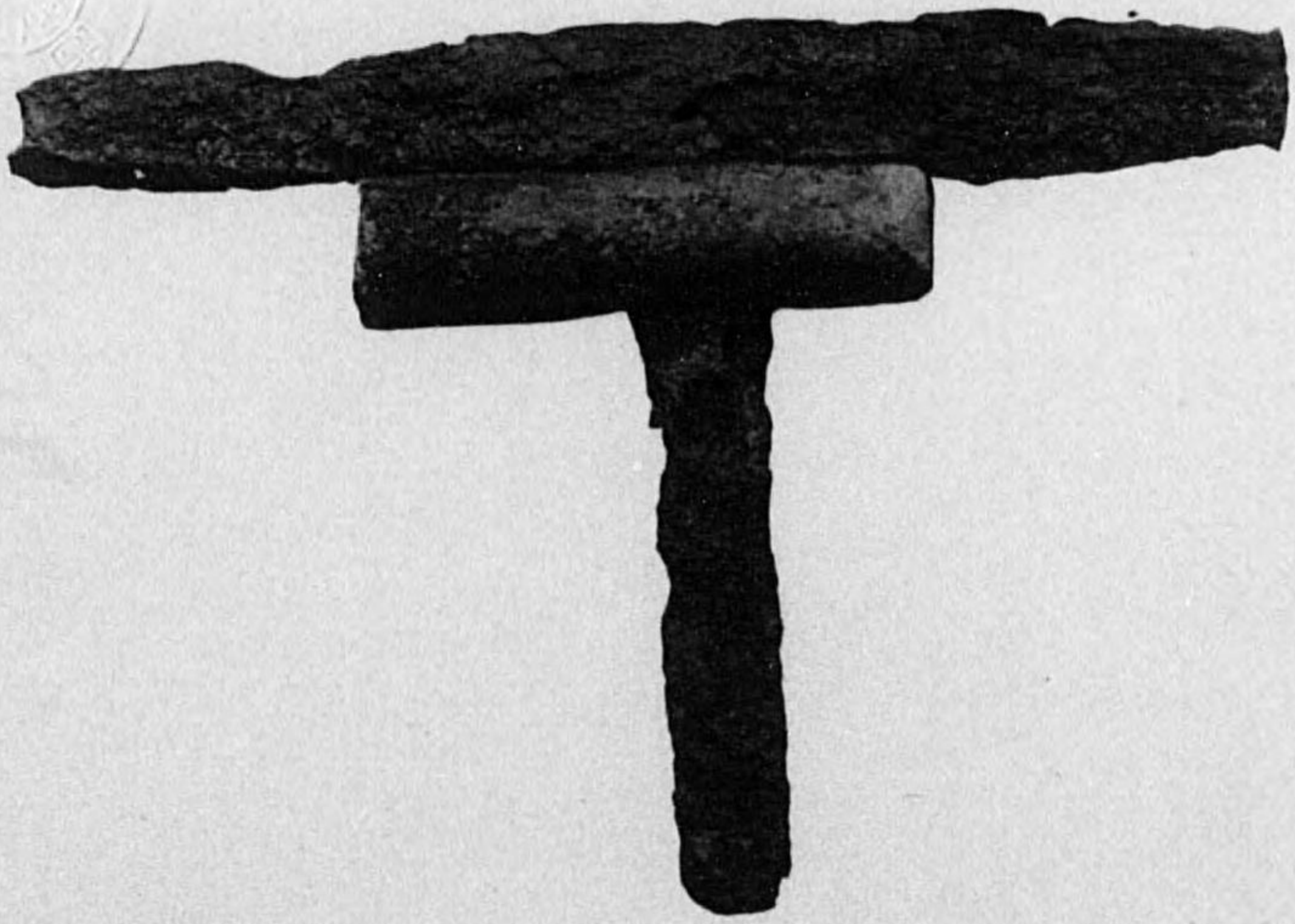
鐵 戟



212



214

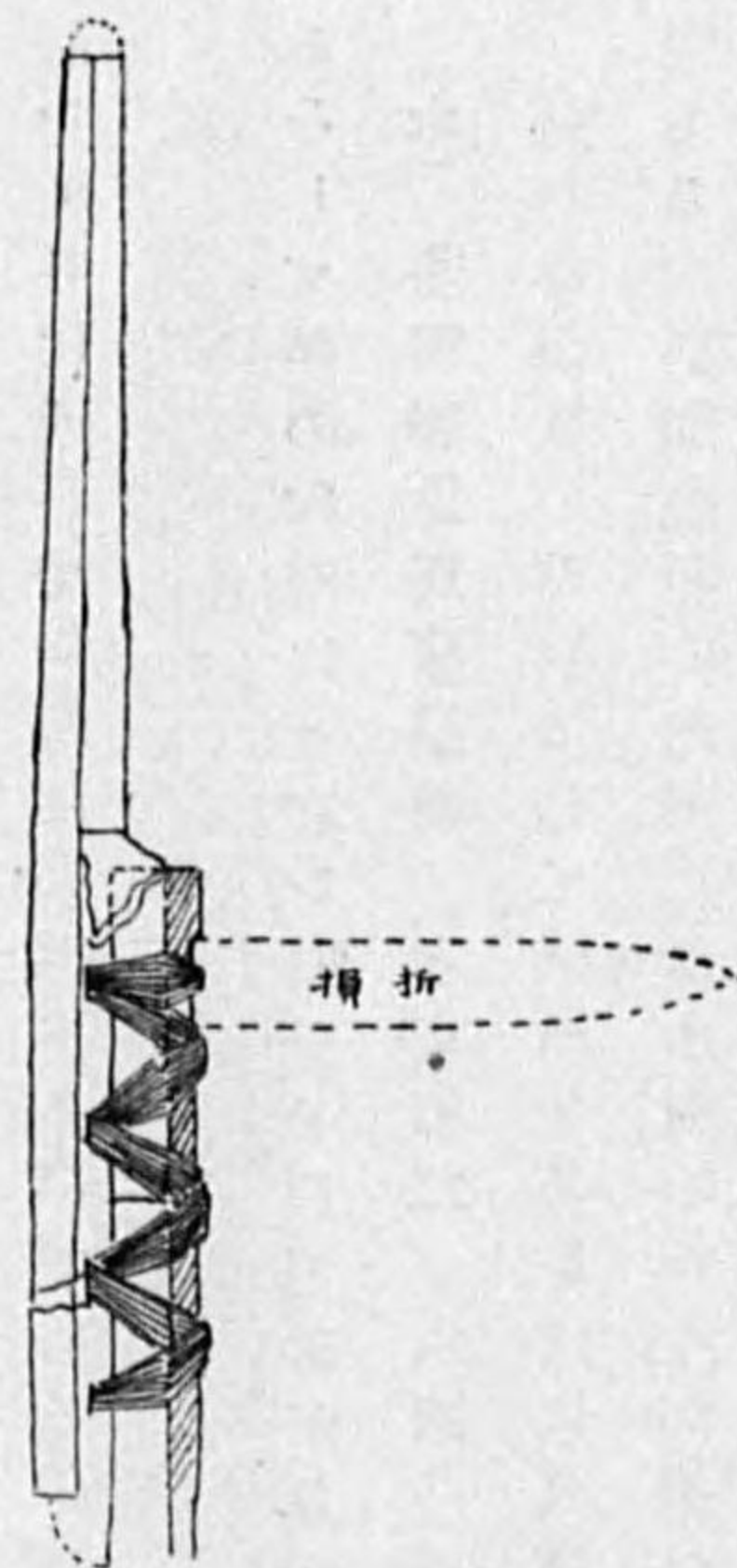


216

212,214,216

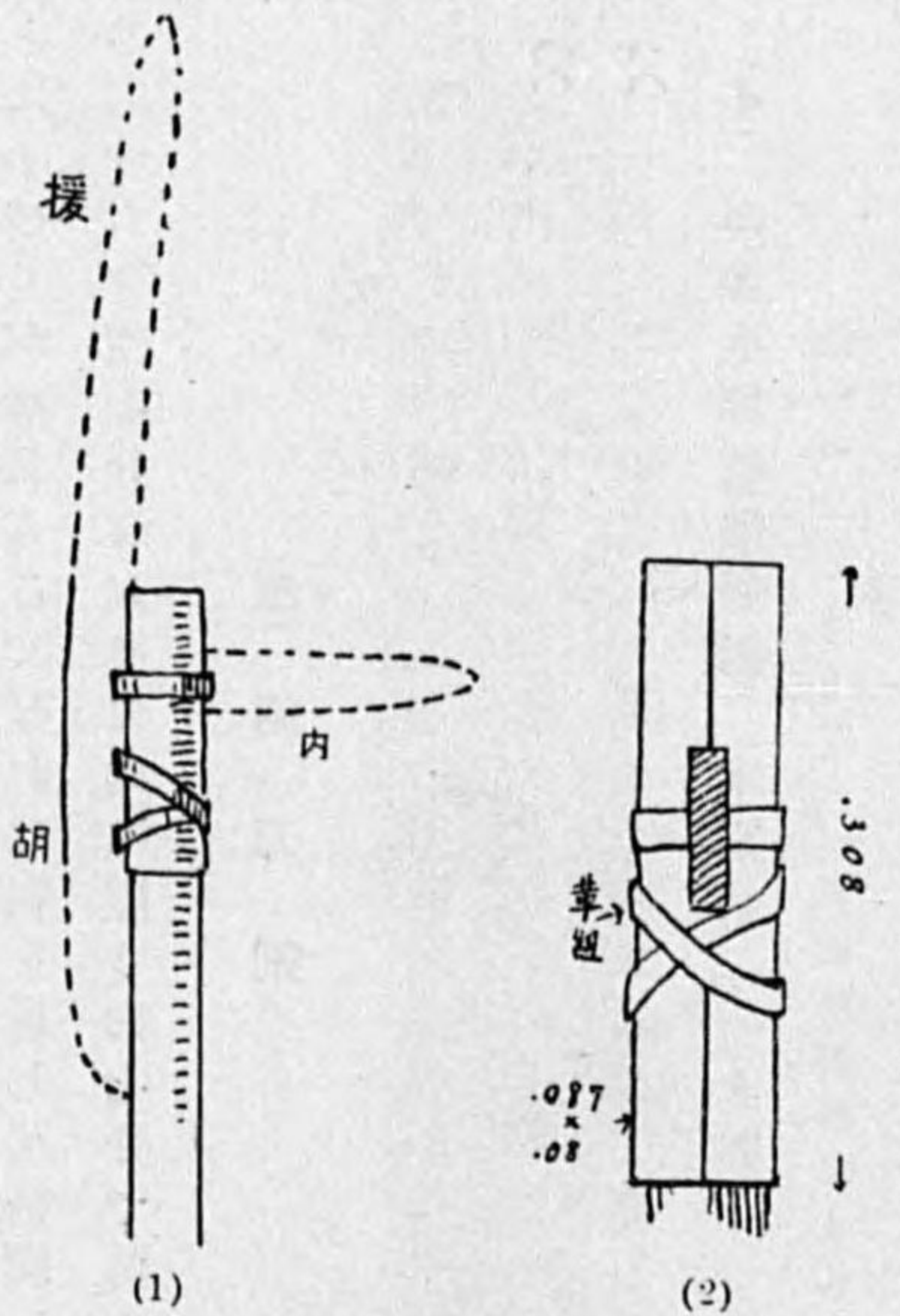
鐵戟斷片 三種

(212富田晋二氏藏 214中西嘉市氏藏 216多田春臣氏藏)



215 鐵戟斷片柄繫着略圖
(中西嘉市氏藏)

鐵戟の援。及び胡。の一部と柄頭金物とを存し内。は折れてゐた而も此柄頭と戟身とを苧絲を以て纏結せるの状明かに見られる即ち胡に四處内に一處の堅孔を穿ち第二一五圖の如く苧



213 鐵戟斷片柄繫着略圖(富田晉二氏藏)
(1)全形 (2)柄頭

鐵戟の斷片にして柄頭金具と其附着せる戟身の一部を存せるのみにして内。も亦金具の處より折れてゐる而も革紐を以て戟と柄頭とを連結せるの状明かに窺はれるのは最も興味を惹く此金具の内部に猶柄の一部なる割竹が残つてゐた

(三) 中西嘉市氏藏鐵戟 (本文第二一四圖第二一五圖)

殘缺 長八寸六分

(八) 富田晉二氏藏鐵戟 (本文第二一二圖第二一三圖)
柄頭金具 長三寸八厘 徑八分七厘×八分

絲を此孔に通じて柄頭に緊縛するのである。鞘は東京美術學校藏鐵戟(口)の條下に記せるが如く、援の全部と胡の脊部以外を包み木製にして表面には苧絲を密に巻きて後黒漆を施してゐる。そして鞘の内面にも布を貼付せし形跡が見はれてゐる。

(木) 多田春臣氏藏鐵戟 (本文第二一六圖)

是れ亦鐵戟の殘缺にして柄頭金具を内に貫通せし狀と援及び内の兩双胡の片双なるが見らるゝ。柄頭金物の内部には木材の朽片が遺つてゐた。此柄頭の左右に當れる處直双と横双とに小圓孔が猶見らるゝ。是れは紐を通して柄頭を戟身に緊結せしめんがためである。柄頭長さ二寸六分、徑七分、直双横双共に廣さ約七分である。

(四) 銅 刀 劍

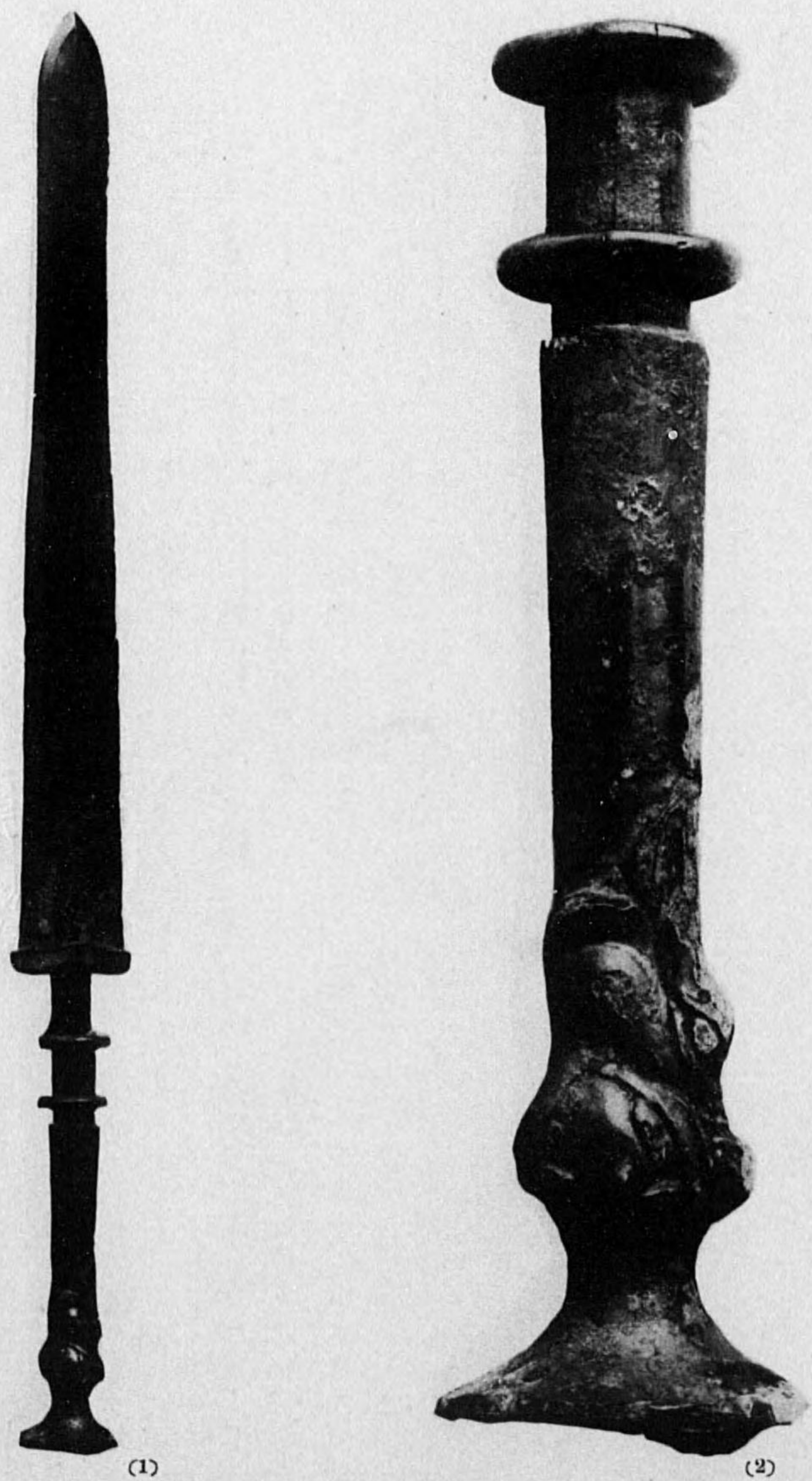
樂浪時代の古墳より銅製の刀劍が盜掘の結果發見せられた。余等調査の古墳よりは唯鐵製の者が出土したに過ぎぬ。思ふに銅製の刀劍は主として前漢時代に屬し、鐵製の者は王莽前後より一般に行はれたのであらう。今此には主として銅劍銅刀を説くこととする。

(イ) 平壤中學校藏銅劍 (本文第二一七圖)

長約一尺七寸七分 柄金銅部長三寸八分

劍身長一尺一寸八分 幅本一寸四分

此銅劍は既記平壤高等普通學校藏秦戈と同時に出土せし者といはれてゐる。銅質銅色、彼此



(1)

(2)

殆ど同様なれば此説は確かなるべく且技工より見るも彼此互に一致する所あれば彼と同じく秦時に作られた者であらう劍身鉛黒色にして往々白銅質の斑暈を呈し且微に綠青銹群青銹が見はれてゐる劍身断面第二一九圖の(3)の如く脊及び鐔を有し其鐔は頗る銳利彼の秦戈と同様である本廣く鋒端尖り中間少しく瘦せたるは屢ば研磨を經た爲めであらう劍身の下端は首に接し莖は稍細くして二所に節状を作り其下端は金銅把にて包まれてゐる金銅把の下端は龍首珠を啣むの状を爲し珠の先端一たびくびれて復廣く開き四葉の花形をなし花心に復珠を作る技巧精美にして頗る雄渾の氣象をあらはしてゐる從來著録せられし銅劍に此の如き優物あることを知らぬ以て秦時工藝の發達を卜することができ

(口) 大同江面出土銅劍 四種

(圖版第八四一圖) 關口半氏藏

(圖版第八四二圖) 總督府博物館藏

(圖版第八四三圖) 白神壽吉氏藏

(圖版第八四四圖) 關口半氏藏

是等は何れも大同江面古墳より出土せし者にして總督府所藏の者は故山田鈺治郎氏の蒐集である白神氏藏の者全形を見るべき外他は皆上部を失つてゐる而も形式は殆ど同様にして劍身稍廣く中央脊部に縦てに凸起筋ありて短き莖に連なつてゐる劍身稍薄く縁邊に斜面に刃(鐔)を作つてゐる唯縦筋の断面總督府博物館の者上面に稜角を有すれども他は圓みを帯び

てゐる何れも刃邊多少缺損し綠銹を呈してゐる

(八) 東京美術學校藏銅環刀 (本文第二一八圖)

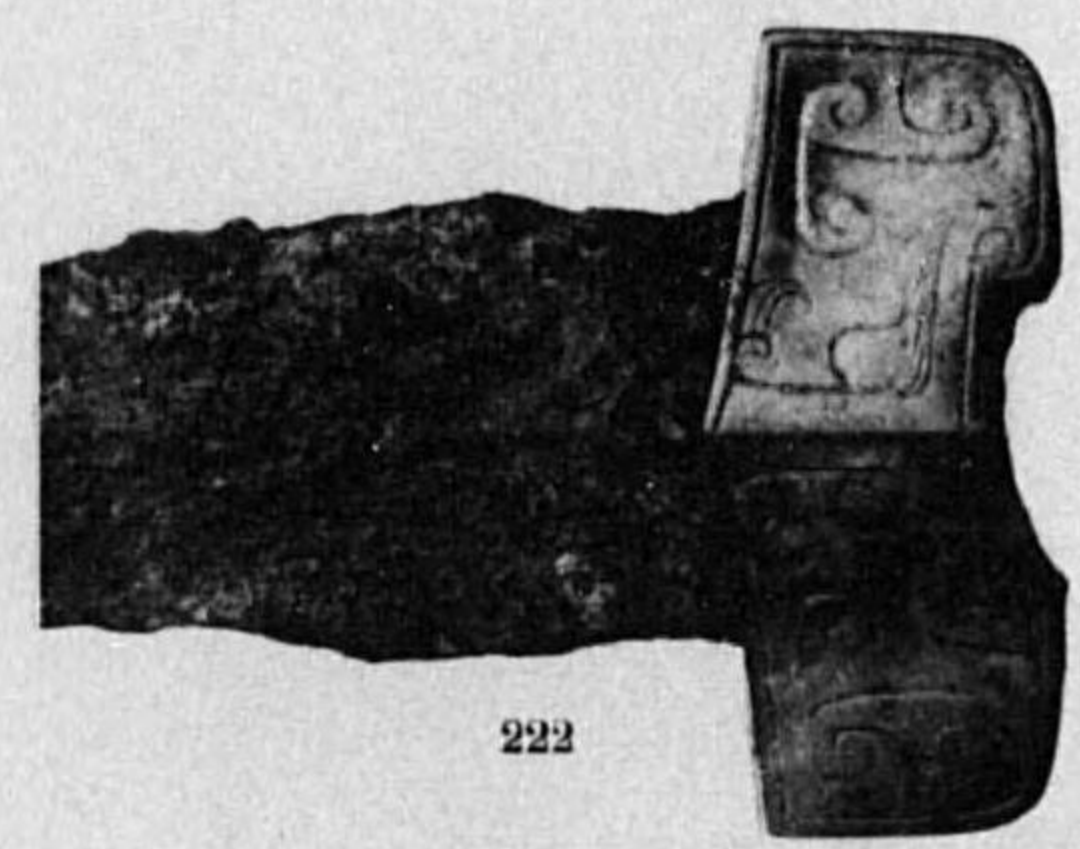
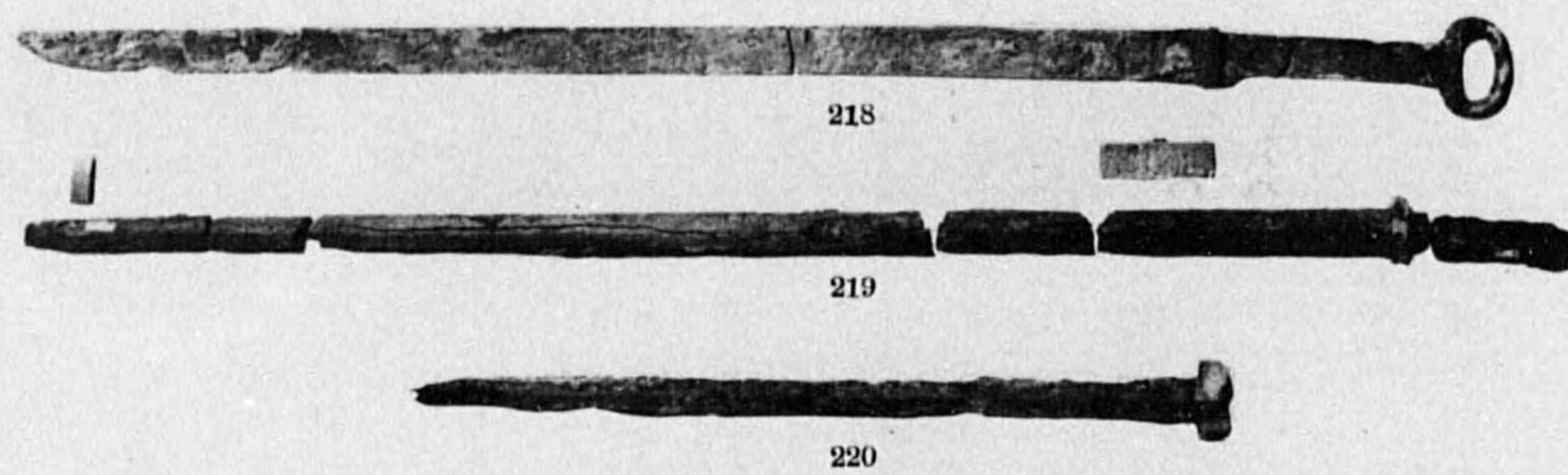
全長三尺八分 刀身長二尺四寸七分五厘 幅一寸四厘
柄長環を通して六寸五分幅八分八厘 環長徑二寸一分

把端に橢圓狀の環を有し把の上下合缺をなして接着せる處目貫孔の邊にて折損し其木部は既に腐朽して失はれてゐる刀身の下端把に接せる處には細き銅の鯉口が遺つてゐる刀身全體に群青銹に綠青銹を點じ銅色極めて美にして往々金色を綠銹の間に見る特に鋒は著しく金色を呈してゐる恐らくは當初全部鍍金を施したのであらう刀身には往々革の如き者の錆を見るのは鞘の内面に恐らくは革を貼つたのであらう但し鯉口に近く二寸許の處には兩面に布の痕跡がある是れは此部に布を張つたものであらう又刀身に多く鮫革の如き斑點を見るのは恐らくは鮫皮を以て鞘を包んだのであらう

(三) 諸岡榮治氏藏銅環刀 (本文第二二四圖第二二五圖第二三〇圖)

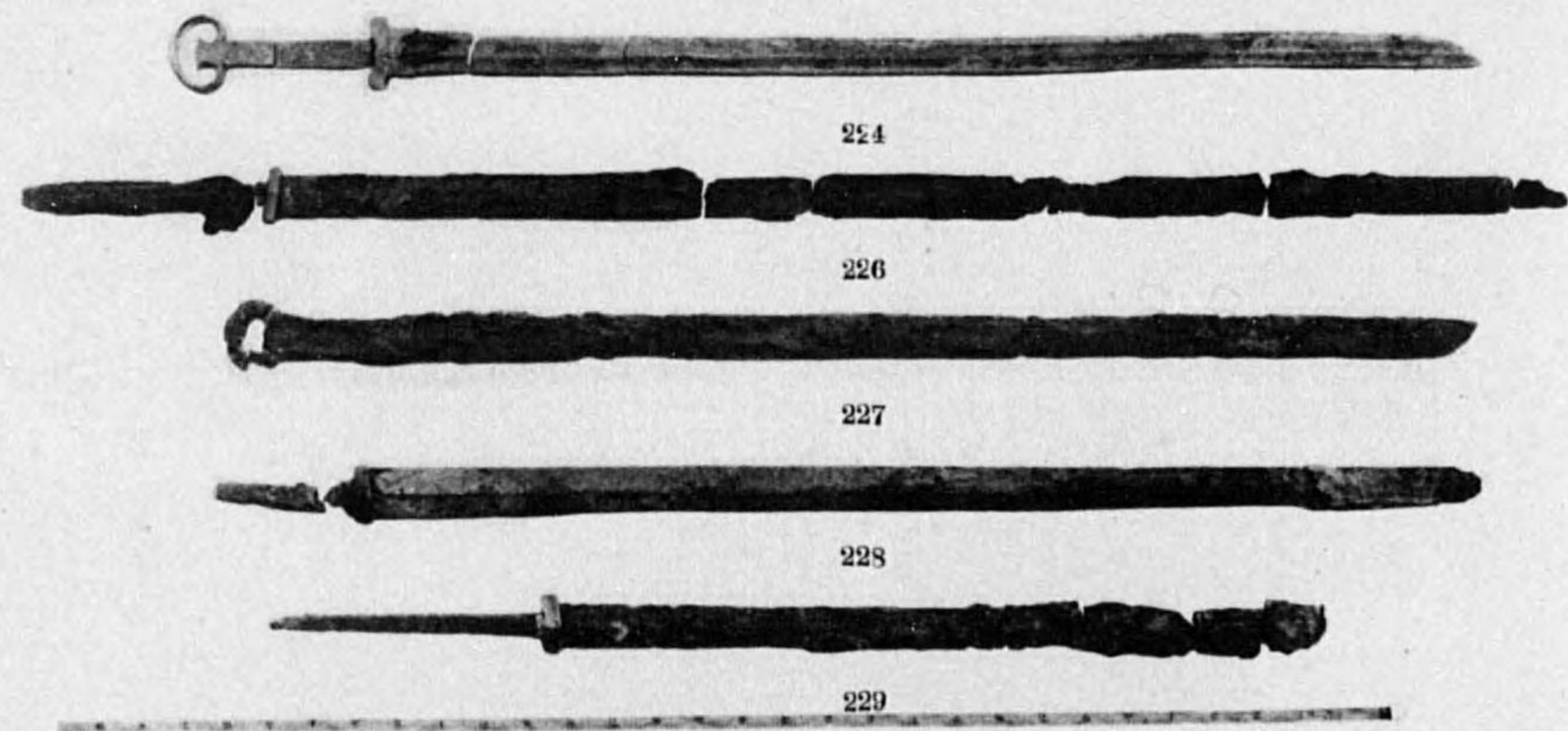
全長三尺六分三厘 刀身幅九分六厘

大正十三年大同江面石巖里の麥島地中より偶然發掘した者といはれてゐる環頭橢圓形にして兩端巖手の如く内に巻き鍍金を施してゐる把は木部既に朽腐し去り唯銅瑿に接する所一寸許殘存せるのみ此把は中間に於て上下合缺きとなして接着し其處に目釘孔を有してゐる鞘の上端鯉口は金銅より成り多少缺損してゐる刀脊平らにして身には縦に剝形を有し刃



218 銅環刀 } (東京美術學校藏)
219 鐵劍 }
220 鐵劍 }

221 瑠璃 } (東京美術學校藏)
222 瑠璃 }
223 瑠璃 } (橋都芳樹氏藏)



224	銅環刀	} (諸岡榮治氏藏)	230	銅環刀(224)一部
226, 228, 229	鐵劍三種		231	鐵環刀(227)一部
227	鐵環刀		232	鐵劍(229)一部
			233	鐵環刀 (平塚中學校藏)

は兩旁より斜めに作られてゐる環頭及び琫に細絹の形跡あれば當初刀を絹の袋に藏めたのであらう又劍身にも往々細絹附着せるを以て見れば鞘の内面に絹を貼つたのであらう兎に



225 銅 鐵 刀 實 測 圖 (諸國茶台氏藏)

角把及鞘の木部を失ひたれども刀身比較的よく保存せられ當時銅刀の形制を見ることができ

(五) 鐵 刀 劍

鐵刀劍は實際何時頃から起つたか不明であるが前漢書王褒傳に王褒が宣帝に奏せし言に及至巧冶鑄干將之樸。清水焯其鋒。越砥斂其罅。水斷蛟龍。陸刺犀革。

と載せてゐる焯とは刀刃を焼て急に水中に入れて焼きを入れることでは是れは無論鐵の刀劍をいふたのである罅は鏝にして刃縁をいふのである是れにより宣帝の頃西紀前七三年―四九年には明かに刀劍を鍛えることを知つてゐたのである而も黃海道黃州郡黑橋面より宣帝の時に鑄造されし穿上横畫五銖錢と共に銅劍が発見せられてゐるから朝鮮古蹟圖譜第一冊第

二二圖)宣帝以後にも猶銅劍が行はれてゐたことが分かる

樂浪古墳より既記の如く土民の盜掘の爲め多少銅刀劍が見はれしも余等の調査せし者は勿論他の學者の調査せし者より出土せるは常に鐵の刀劍にして銅製の者の發見されたことは一度もない思ふに樂浪郡時代前漢の初期に於て猶銅製の兵器暫く行はれしも鐵製の者次第に發達して前漢末には既に之に代りて専ら使用さるゝこととなつたのであらう第九號墳出土の者最も代表的であるが其他にも往々當初の形制を徵すべきものがある今其中殊に注意すべき者を説くこととする

(イ) 東京美術學校藏鐵劍 二口 (甲) (本文第二一九圖)

(乙) (本文第二二〇圖)

(甲)は把及び鞘の殆ど全部を存す通じて長さ約三尺一寸今把頭に棗形金具を有せるは出土後馬の革帶の棗金物を膠着したものの様である把には組紐を卷いた形跡が遺り鞘の外表面は普通の黒漆塗なれども内面に布を貼つた形跡がある把の下端には漆黒に多少綠銹を呈せる銅琫が着いてゐる其廣さ一寸四分三厘ある又鞘の端を飾りし銅瑠コリも同時に出土した

(乙)は今把を失ひ鞘亦破損甚しく外面漆塗にして内面に布を貼りしこと前者の如く断面凸鏡狀をなし把端の玉琫が猶遺つてゐる琫の表裏には獸面を薄肉彫としてゐる其廣さ一寸六分六厘ある此兩鐵劍と共に一玉瑣が出土したが何れに屬した者か明かでない亦表面に双捲蕨手文の浮彫をあらはしてゐる玉質風化して今灰白斑を呈してゐる

今此玉琫を説きし序を以て橋都芳樹氏藏玉瑠を此に擧ぐる(本文第二二五圖)此瑠は帶綠黃灰色の玉にて造り断面凸鏡玉狀をなし上窄く下に向ひて開き上面に圓穴を有してゐる上面長徑一寸四分七厘短徑六分下面長徑一寸六分八厘短徑七分三厘高さ一寸二厘にして穴徑及び深さ共に三分八厘である瑠は昔時瑠とも瑠とも稱せられた即ち我「コジリ」である

(ロ) 諸岡榮治氏藏鐵劍 三種

(甲) (本文第二二六圖) 長現存 三尺五寸七分五厘 鞘幅一寸一分

(乙) (本文第二二八圖) 長現存 二尺八寸九分 鞘幅一寸二分五厘

(丙) (本文第二二九圖) 長現存 二尺四寸一分 莖長六寸三分鞘幅一寸一分

(甲)は柄の木部多少遺存し銅琫を有してゐる鞘は六片に折損せるも猶形制を見ることが出来る表面に朱漆を塗つてゐる

(乙)は劍室の殆全部よく保存せられ唯其末端を失ひしのみ表面は前者と同様朱漆塗である把は腐朽し去りたれども猶銅琫を存し莖は琫に近く折れてゐる

(丙)は劍室半以上折損且把の木部を失ひたれども銅琫と莖とは完全に遺つてゐる莖は断面長方形にして苧絲を卷きたる形跡がある琫に接して鍍金の連珠様の金具の一部猶遺れること大同江面第九號墳外出土劍(圖版第三〇五圖第三〇六圖)の如くである

(ハ) 諸岡榮治氏藏鐵製環刀 (本文第二二七圖)

長現存二尺九寸五厘 鞘幅一寸

殆ど全部完存してゐる把は薄き木材にて莖を包み其上に組紐を卷いた形跡があり又鮫皮の如きもの纒かに把の口元に見ゆるは大同江面九號墳棺外出土劍(圖版三一四圖)に似てゐる鋒は明かに遺れども鞘は此部を失つてゐる

朝鮮總督府博物館藏鐵環刀把殘缺(圖版第八六〇圖)は此種の刀把端の斷片である

(三) 平壤中學校藏鐵製環刀 (本文第二三三圖)

此鐵製環刀全形よく保存せられたれども木部は既に朽腐し唯一部を遣せるのみ鞘には布を着せ朱漆を塗り把にも漆塗の形跡を存し把と鯉口との間に少しく金色を見るのは當初金具を装したのであらう

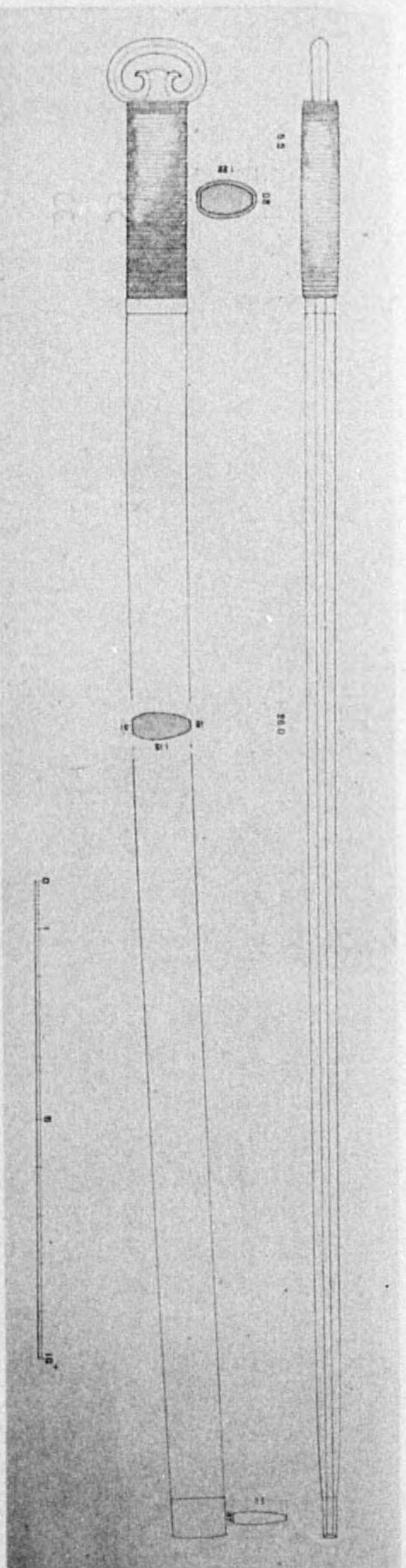
(木) 平壤警察署保管鐵製環刀及鐵製劍

(甲) 環刀 (本文第二三四圖第二三五圖)

長三尺一寸五分 柄長五寸五分 鞘長二尺六寸

(乙) 劍 (本文第二三六圖)

(甲)環刀 大正十三年八月十一日大同江面梧野里土取穴より(乙)の鐵劍及び「L」V八乳四神鏡並びに鐵製轡等と共に出土せし者にして從來發見せられし此種刀劍の中最も完全に保存された者である吾人は是れにより遺憾なく當初の形制を知ることができり刀形稍内反りをなし環頭は橢圓形にして兩端内に捲き巖手様の飾りとなり把は斷面本文第二三六圖に見るが如く長卵形の兩端を截去せしが如き形にして其周圍には二條の組紐を合せて一筋とな



234



235



236



234 環刀實測圖

235 環刀

236 鐵劍

(平壤警察署保管)

して隙間なく巻き付けてある鞘の口邊は今少しく高くなつてゐる恐らくは薄き金物にて巻いてあつたのであらう鞘は断面把に比すれば稍平扁となり黒漆を塗つてゐる鞘の下端には銅製砵を装してゐる

(乙)鐵 劍 把は折れて木部を失ひ唯銅琫を存するのみ鞘は數個に折れ下方を失つてゐる

(六) 鐵 矛

大同江面第九號墳及び海雲面葛城里甲墳より鐵矛の出土せしことは前に説いた大同江面の他の古墳よりも往々鐵矛が発見せられた今其中大正十二年以前山田鈺治郎氏の蒐集にかゝり總督府博物館の所藏に歸せる者を左に擧ぐる

(イ) 總督府博物館藏莖附鐵矛 (圖版第八五四圖)
矛身長く本廣く端に向ひて稍大さを減じ先端穩かに尖り正背面は蛤刃となつてゐる下端に莖を有せるも折損して其長さを知らざりしが其形式は第九號墳出土の者と同様である

(ロ) 總督府博物館藏袋穗鐵矛 三種 (圖版第八五五圖第八五八圖第八五九圖)
何れも矛身短く其本に柄を挿入すべき空室を有つてゐる其形式は葛城里甲墳出土の者に類してゐる腐蝕甚しきため槍身の断面は明かに分からぬ

(七) 鐵 刀 子

樂浪古墳より往々鐵刀子を發見すれども何れも腐蝕甚敷其全形を知るべき者は稀である故山田針治郎氏の蒐集にして今總督府博物館に屬する者二種は保存最も佳である

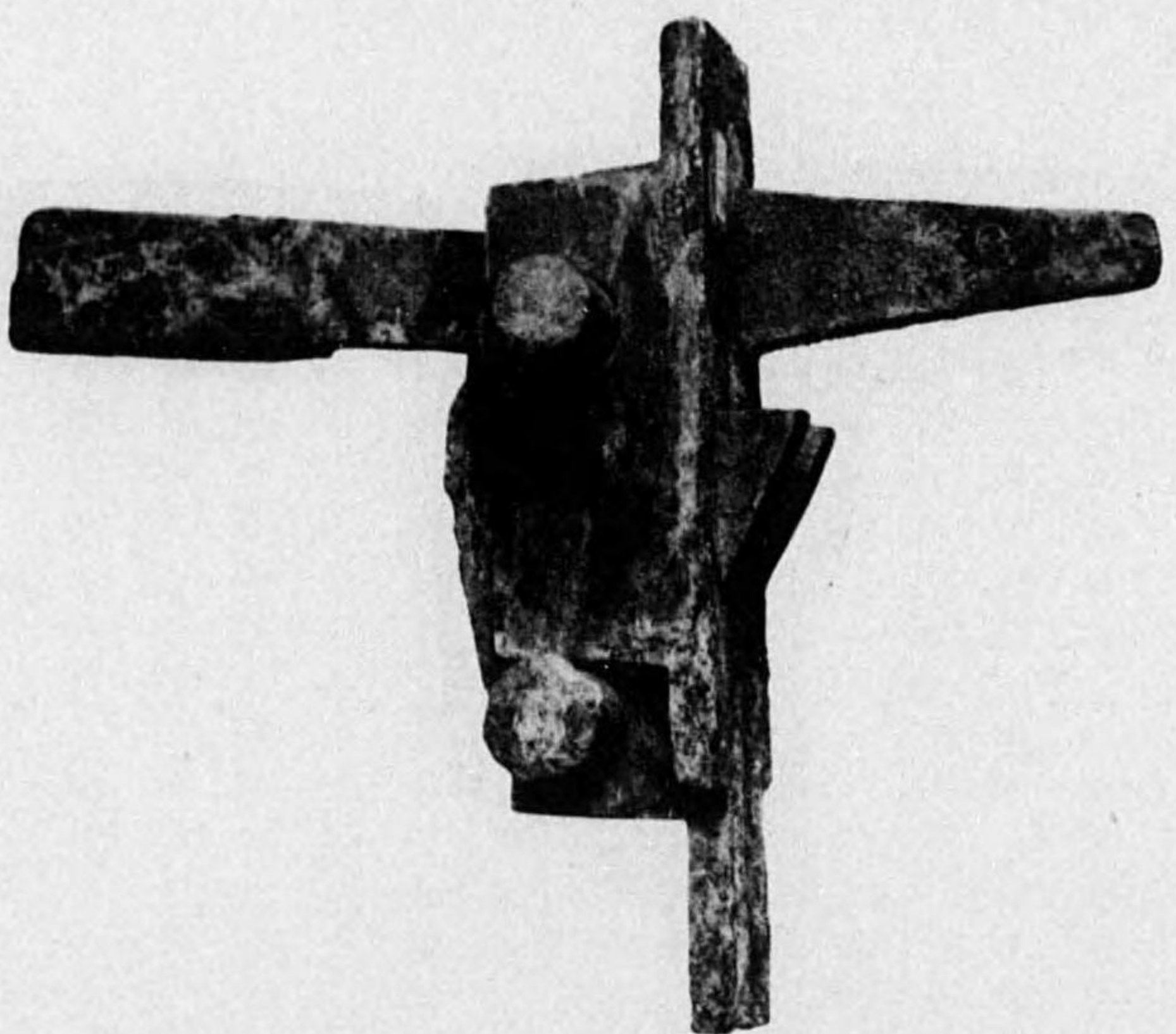
(イ) 總督府博物館藏鐵刀子 二種 (圖版第八五六圖・第八五七圖)

甲は其端折損したれども乙は稍完全に遺つてゐる共に鐵製にして莖端環狀をなし刀身は片刃にして其形甲は折損不明なれも内反りの如く乙は先端に向ひ多少の反りを有してゐる

(八) 弩 機

大同江面第八號墳及び第九號墳より弩機を發見せしことは既に説いた又大正七年兵器製造所敷地内よりも發見され大正十三年平壤府發掘の古墳より木臂の猶一部遺存せる者が出土せる外盜掘古墳中よりも數個發見された是等は其形制皆殆一樣であるゆゑに今特に此に東京美術學校藏弩機をそれ等の代表として掲ぐることにする

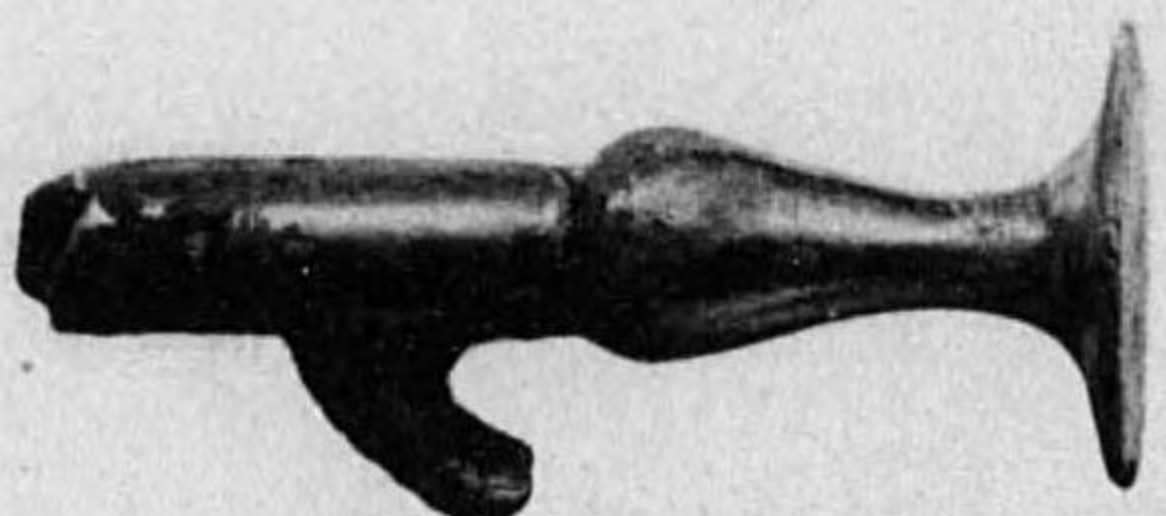
(イ) 東京美術學校藏弩機 (本文第二三七圖)
全體に綠銹群青銹を帶び郭長さ四寸九分五厘廣さ一寸一分四厘割合に完全に保存されてゐる



237



239



238

237 弩 機 (東京美術學校藏)
238 金銅有蓋箭頭金物 (稱都芳樹氏藏)
239 銅製無蓋箭頭金物

(九) 箭頭金物

大同江面第九號墳及び龍岡郡海雲面葛城里甲墳より數種の箭頭金物を出だせしことは前に説いた大同江面第九號墳の如く其端球狀をなせる者他の古墳よりも多く發見された又葛城里甲墳の如く其端四葉花狀をなせる者も稀に出土してゐる今左に是等と多少性質を異にせる者數種を擧ぐる

(イ) 總督府博物館藏金銅有蓋箭頭金物 二種 (甲)及(乙) (圖版第八五三圖)

(ロ) 橋都芳樹氏藏金銅有蓋箭頭金物 (本文第二三八圖)

(甲) は箭幹の上部に當れる所圓筒狀をなし以て箭幹を挿入するに便し一方に鈎狀の絃掛けが着いてゐる絃掛の上は節狀をなし其上一たびくびれて復開き以て蓋狀頭を作つてゐる當初は全部鍍金を施せし者にして猶燦然たる金色を遺してゐる此箭頭金物は既に論ぜしが如く儀式用にして實用の者にあらず實用の者とせばかく頭部の廣く開けるは箭の弦を離るゝ際頭部が絃に觸れて障礙となるであらう

(乙)は(甲)と形式全く同一にして唯小なるのみである

(丙)は(甲)(乙)と似たれども唯筒狀の上部が彼の節狀の代りに恰も花の苞の如くなり本膨れ頭細く先端蓋狀に開いてゐる金色猶鮮かに少しく綠銹を點じてゐる

(口) 橋都芳樹氏藏銅製無蓋箭頭金物 (本文第二三九圖)

長さ三寸二分他の球形頭若くは蓋狀頭を有せる者と異なり唯上を閉塞せる中空圓筒にして一方に割合に大なる絃掛けを有せるは珍らしい中には猶箭幹の木部を存してゐた此の如く無頭無蓋なるは實用に適する者なれば普通實戰に用ひられたる弩箭はかゝる形式であつたかも知れぬ

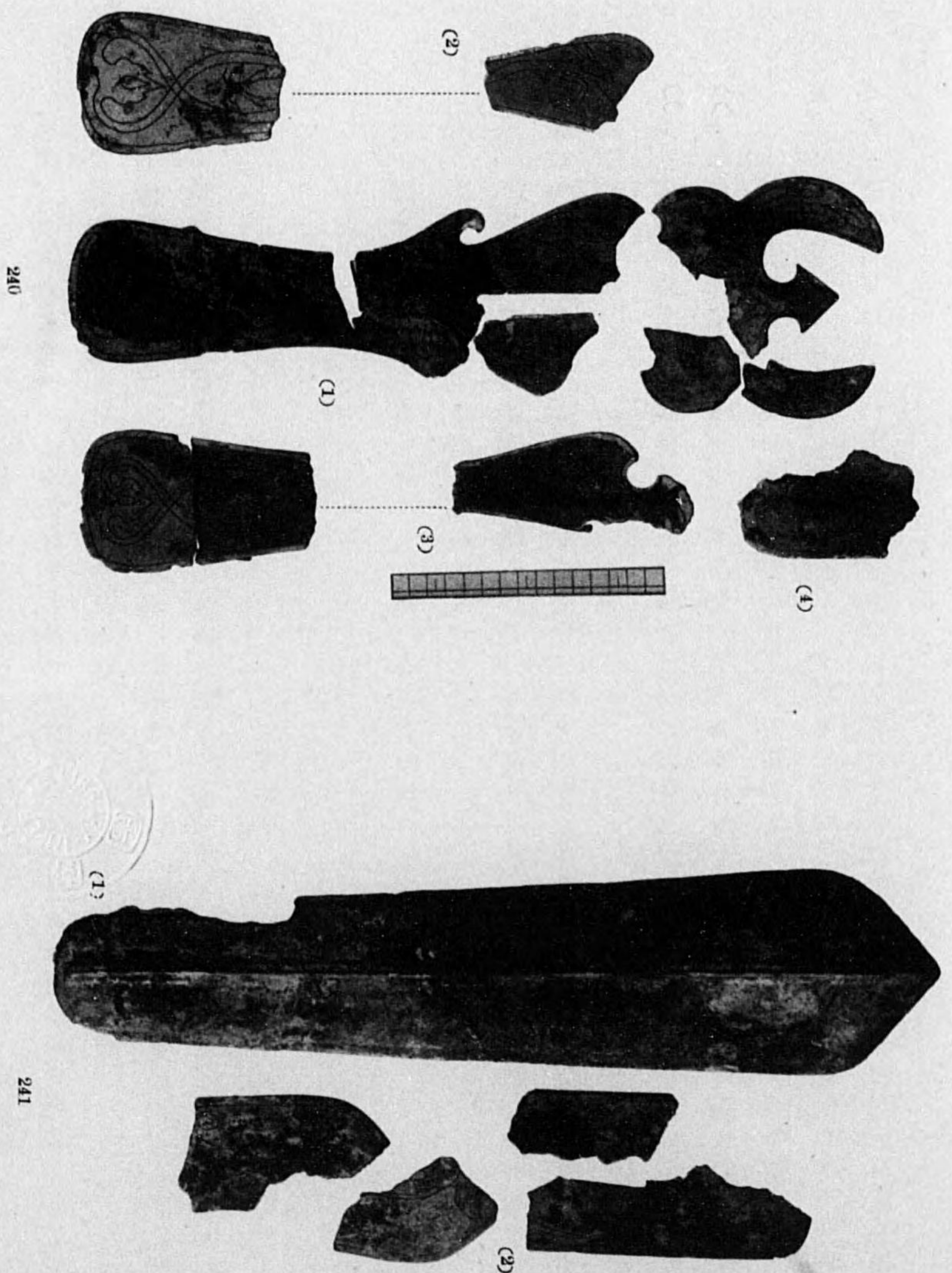
第六章 馬具及車金具

(一) 馬 具

大同江面第九號墳玄室内より馬面轡及び革帶金具等の出土せしことは既に説いた近年古墳盜掘の結果往々馬具に屬する者が發見された其中に就き今馬面及び轡の注意すべき者を説くこととする

(イ) 橋都芳樹氏藏金銅馬面 (本文第二四〇圖)

本文第二四〇圖に示せる馬面は四個に屬する者の如く破損完からず其中(1)は稍全形を窺ふべく(2)は下部と中間の一部のみを存し(3)亦同様下部と中間の一部を存し(4)は唯下部の殘缺である是等馬面は厚さ七厘許り金色猶美しく往々綠銹を點じてゐる其表面には(1)に見るが如く上には双鳳相向ひて尾を高く擧ぐるの狀をなし其中間は低く三角頭を作り多少三鈿



240 金銅馬面殘片
241 金銅馬面及馬面殘片

(橋都芳樹氏藏)
(東京美術學校藏)

の如き形をあらはしてゐる胸部以下は双龍相對して蟠結し其尾端相接して一種火炎様の輪郭を作つてゐる馬面全體の形は上部廣く三鈷狀をなし中間美しき曲線を以て剝形を作り腰以下窄く下端再び擴がりて稍圓く終つてゐる其輪郭の美にして圖様の奇異なる馬面としては最も注意すべき標本であらう其裏面には革帯に取附けんがため處々に鈕を作り出してゐる他の三馬面の斷片亦それ／＼同性質の圖様を陰刻してゐるが特に(4)は殘缺ながら最も優れたる手法を示してゐる又橋都氏蒐集品の中に別に一個形狀相似て圖様無きものがある此種の馬面は恐らくは鍔と稱する者であらう後漢書輿服志に「金鍔の稱あり蔡邕獨斷に「金鍔者馬冠也。高廣各四寸。如玉華形。在馬驥前」と載せてゐるのは此馬面の形式に近い後の我飾馬の莖蒲形銀面は早く此に起原を有するのである

(口) 東京美術學校藏金銅馬面 二種 (本文第二四一圖)

(甲) 長八寸 廣(最大)一寸九分

(乙) 殘缺大さ不明

(甲)は大同江面第九號墳出土の者と同形式にして上廣くして端尖り下狭くして端圓く輪郭に隨ひて狭き縁を一段低く作り上面稍高く膨れ中央を縦てに通して帶狀の剝形が走つてゐる手法極めて精美全體に縁鍔を帯び往々金色を遺してゐる裏面には裏革に繫ぐべき鈕を二ヶ所作り出してゐる

(乙)は殘缺にして四片あり全形を知ることができぬが大要前記橋都芳樹氏藏(本文第二四一

圖の馬面と同様式であらう其表面に孔雀形を陰刻してゐるのが見える

(八) 東京美術學校藏轡 (本文第二四二圖)

轡及勒通して長さ七寸五分 鑣 長七寸三分

銜勒相連なり鑣は別に離れてゐる其形式全く第九號墳出土の者圖版第三七五圖に似て銜の中央に小車輪様を作り勒の腰部は八角形をなし鑣の兩端は互に反對の方向に彎曲し摺扇狀をなしてゐる銅製にして表面に綠銹を呈してゐる

(三) 橋都芳樹氏藏銅轡 (本文第二四三圖)

是れ亦銜と勒は相連續し鑣は別に離れてゐた銜の中央に小車輪様の者を附せるも鑣は九號墳出土の者と異なり兩端反對に彎曲して各一方に羽狀の者を作つてゐる何れも綠青色白綠色に群青銹土銹をあらはしてゐる

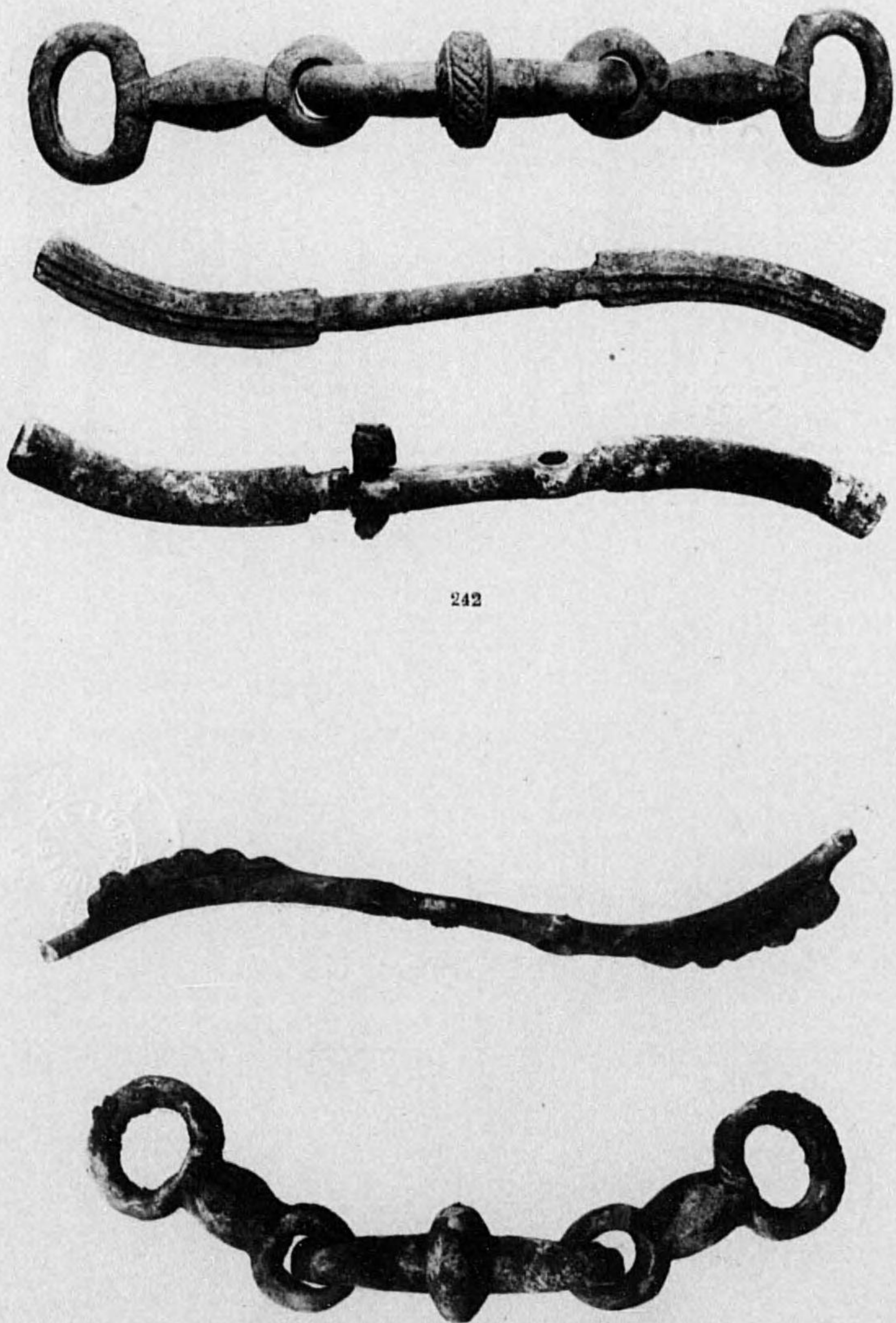
(木) 富田晉二氏藏馬鐸 二個 (本文第二四六圖)

高各一寸五分

何れも小銅鐸にして此種の最も精巧なる者に屬する其口は杏仁狀をなし其兩端稜角を作り體の兩面に乳郭をあらはし上に鈕を作り以て漢鐸の普通なる形式を示してゐる

(二) 車金具

大同江面第九號墳より銅車軸頭を龍岡郡葛城里甲墳より鐵車軸頭を發見せしことは既に



242

243

242 金 銅 轡 (東京美術學校藏)
243 銅 轡 (橋都芳樹氏藏)



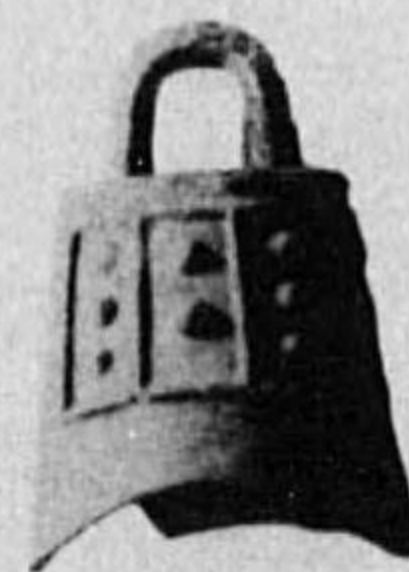
244



245



246



- | | | | |
|-----|-------|----|------------|
| 244 | 金銅車軸頭 | 一對 | } (橋本芳樹氏藏) |
| 245 | 鈴頭飾金具 | 一對 | |
| 246 | 馬鐸 | 二個 | (富田晋二氏藏) |

説いた樂浪古墳より猶他に此種の金具が往々發見された橋都芳樹氏藏の者は其中の逸品である富田晉二氏蒐集品の中にも鐵車軸頭一對ある又橋都氏藏品中に鈴頭を有せる金具がある亦車に屬する者のやうであるから此に併せ説くこととする

(イ) 橋都芳樹氏藏金銅車軸頭 一對 (本文第二四四圖)

高二寸一分五厘 先端徑二寸六厘

短き圓筒狀にして其直徑本窄く先端廣く本には鏝狀を作り出し先端には特に著く縁を大きく作り出してゐる圓筒の中程と其外の方に二條の節狀ありて外節狀と縁との間に長方孔ありて轄を挿すに便してゐる表面は金色猶燦然として多少の錄鏽をあらはしてゐる

(ロ) 橋都芳樹氏藏鈴頭飾金具 一對 (本文第二四五圖)

高三寸六分 口徑二寸三分三厘

此物何に用ひられしか不明であるが或は車の或部分に取付け車の轉進するごとく鏽々たる音響を發せしめた者であるまいか其形稍勾欄の寶珠柱の擬寶珠頭に類し下は太き筒形をなし中間に二條の節狀を作り頭部に四面に透しのある鈴様の者を作つてゐる其一の内部に小石片ありて之を振れば音響を發する而も當初より有りしか或は發掘後土民が特に入れしか不明である外面は全體に水銀色を帯び往々綠青鏽群青鏽を點じてゐる

第七章 銅製容器

樂浪古墳發見の銅製容器には既記九號墳出土の外近年鏡・甌・甌・鍾・斗・壺などが盜掘の爲めあらはれた

(イ) 多田春臣氏藏銅鏡 (本文第二四七圖)

口徑五寸一分

稍厚手にして少く高く下に向ひて開きたる脚臺を有し口縁に近く三條少しく下に離れて二條の細線を繞らしてゐる全體に白緑銹を帯びてゐる

(ロ) 中西嘉市氏藏銅鏡及銅甌 (本文第二四八圖第二四九圖)

銅鏡 高三寸九分四厘 鈔徑六寸九分 口徑三寸五厘

銅甌 高三寸五分 口徑六寸八分 底徑三寸三分

銅鏡は口窄くして縁稍高く腹大にして稍廣き鈔を廻らし底小にして高臺を有し肩部兩旁に各獸環を作りたれども環を失つてゐる獸首は頗る雄渾の風を帯びてゐる

銅甌は廣口の甌狀をなし底稍窄く香臺を有してゐる此香臺は恰も鏡の口縁内に挿入さるゝやうになつてゐる口には稍廣き平縁を繞らし其下及び胸部に多少の凸線帯を作り兩旁に獸首を浮彫にしてゐるが亦環を失つてゐる其底面は縦横線により四區に分ち各區互以違ひに斜線狀に透かしを作つてゐる是れは鏡上に此甌を載せ鏡内の湯を沸騰せしむれば其熱



247

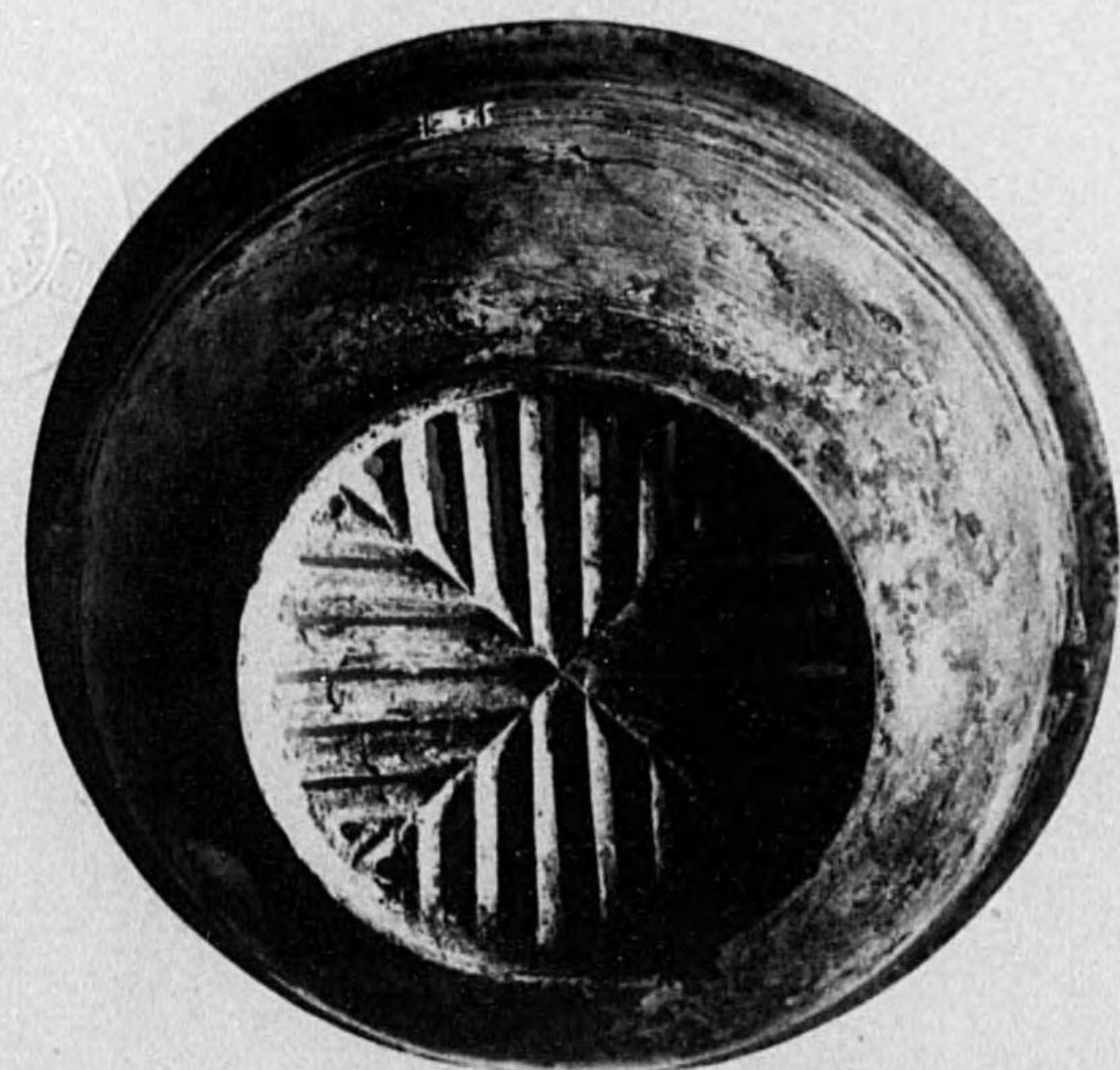


248

247 銅鏡 (多田春臣氏藏)
248 銅甌 (中西嘉市氏藏)



(1)



(2)

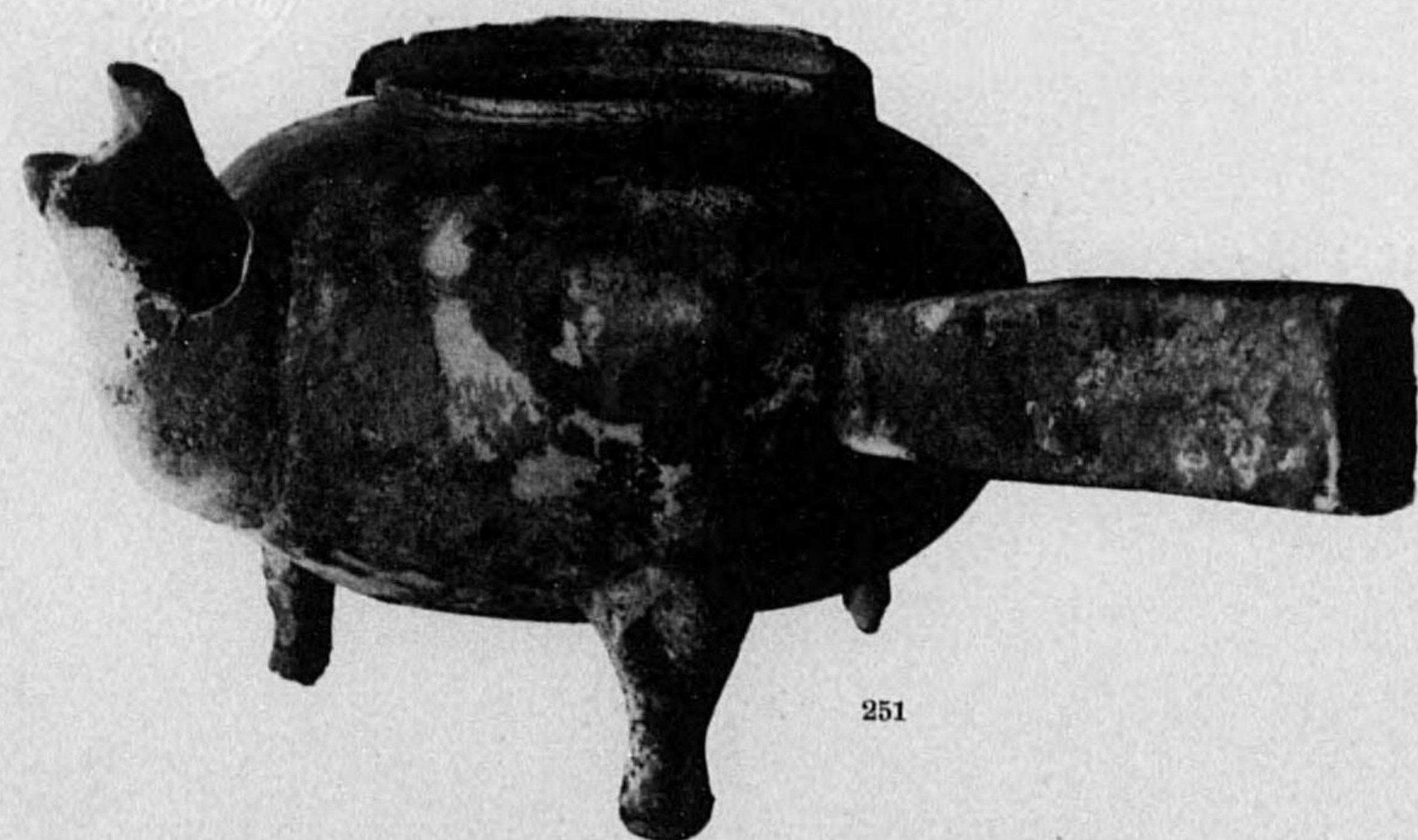
249

(1) 銅 甑
(2) 同 底 面

(中西嘉市氏藏)



250



251

250

銅

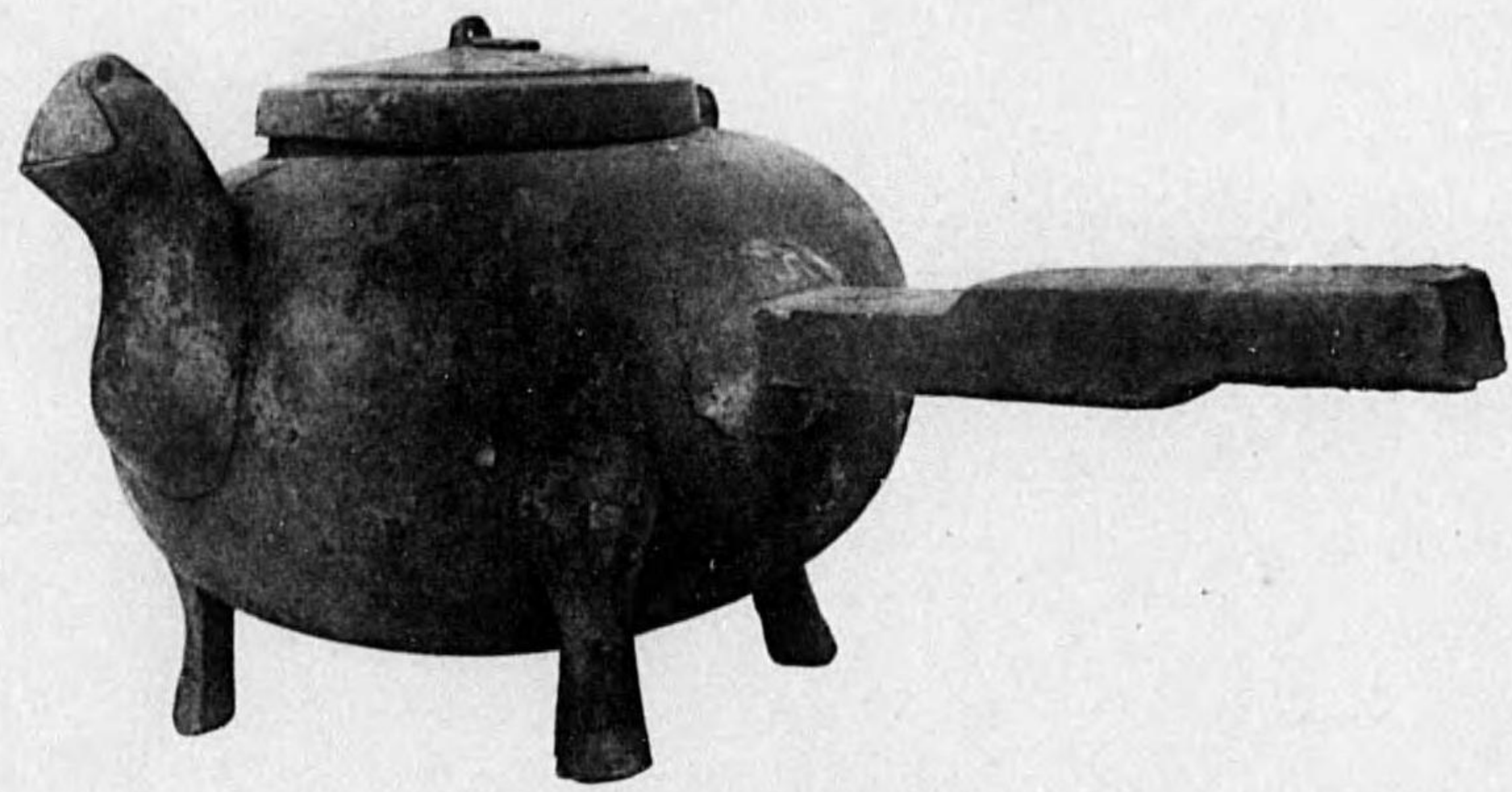
鍾

251

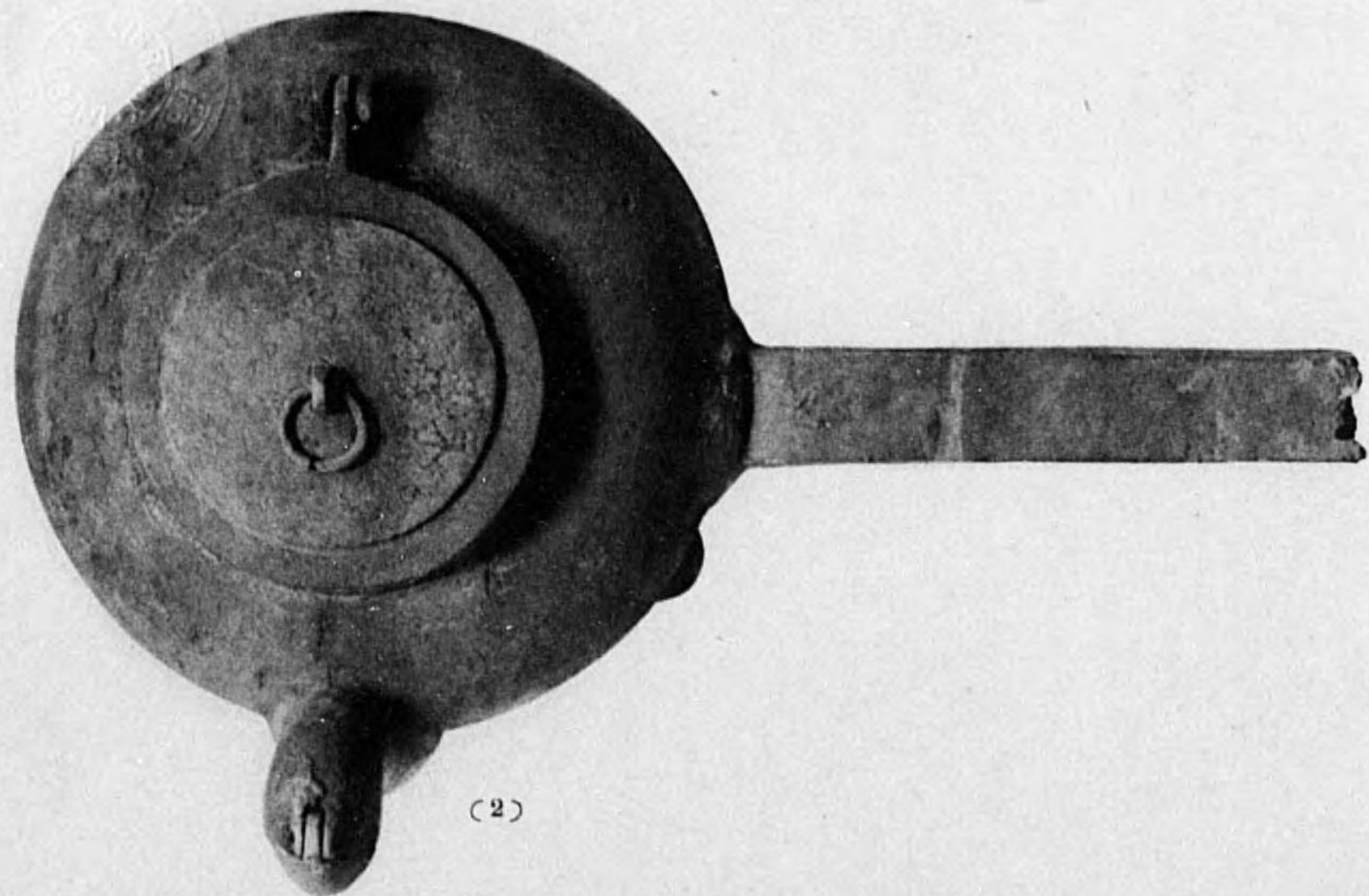
鏝

斗

(富田晋二氏藏)



(1)



(2)

252, (1)(2) 鑊 斗 (平壤覆審法院保管)

蒸氣が此透間を通りて鏡内に入り以て鏡内の米を蒸さんが爲めの手法である是等の銅鏡銅
甌共に技工頗る精鍊當時鑄工の技の發達を示してゐる

(八) 富田晉二氏藏銅鍾 (本文第二五〇圖)

高一尺二寸五厘 口徑五寸一分 腹徑九寸八分 底徑七寸四分

大同江面出土孝文廟銅鍾及び第九號墳出土銅鍾と同形式である前兩者は一は全く脚部を
失ひ一は脚部頗る破損せるも此銅鍾は幸に全形を見ることができ碧玉色黄銅色地に綠青
銹及び美なる群青銹を見はし形體完好獸環の手法亦渾樸の風を示してゐる其底の裏面は特
に美しき紺青色を呈し其銹の剝離せる處に「陽□」の墨書文字あり「陽の下」七の如きも明かでない
猶此他にも文字ありし如くなれども銹に蔽はれて明かでない

(三) 平壤覆審法院保管鐮斗 (本文第二五二圖)

此鐮斗は大正十四年四月の頃大同江面柳寺里の一古墳より出土せし者銅製にして其形急
須の如く蓋あり流あり柄あり下に三足を有してゐる蓋の上には小環あり流の口には蝶番を
有せる三角様の蓋ありて開閉することができやうになつてゐるのは面白柄は斷面長方
中空にして長く中間斗折してゐる三足は各本大にして鐮斗の體に接着し中部稍くびれ下端
再び少しく開きて馬蹄狀を爲してゐる形態技工共に頗る觀るべき者がある本文第二五一圖
富田晉二氏藏鐮斗は是れと同形式なれども蓋破損し流の口蓋を失ひ柄は短く直線形をなし
てゐる寧壽鑑古載する所漢素鐮斗は全く是等と同一形式である

(ホ) 多田春臣氏藏双耳銅壺 (本文第二五三圖)

高五寸四分 口徑三寸九分

口廣く口縁下少しくびれ胸最も廣く腰より次第に底邊に向ひて大きさを減縮し胸部兩旁に簡なる耳を有し内に銅七が入つてゐた

第八章 金屬製雜品

以上説きし以外の銅製器物飾金具金銀製釧指環等が樂浪古墳中より出土した今是等を一括して此章に於て之を説くこととする

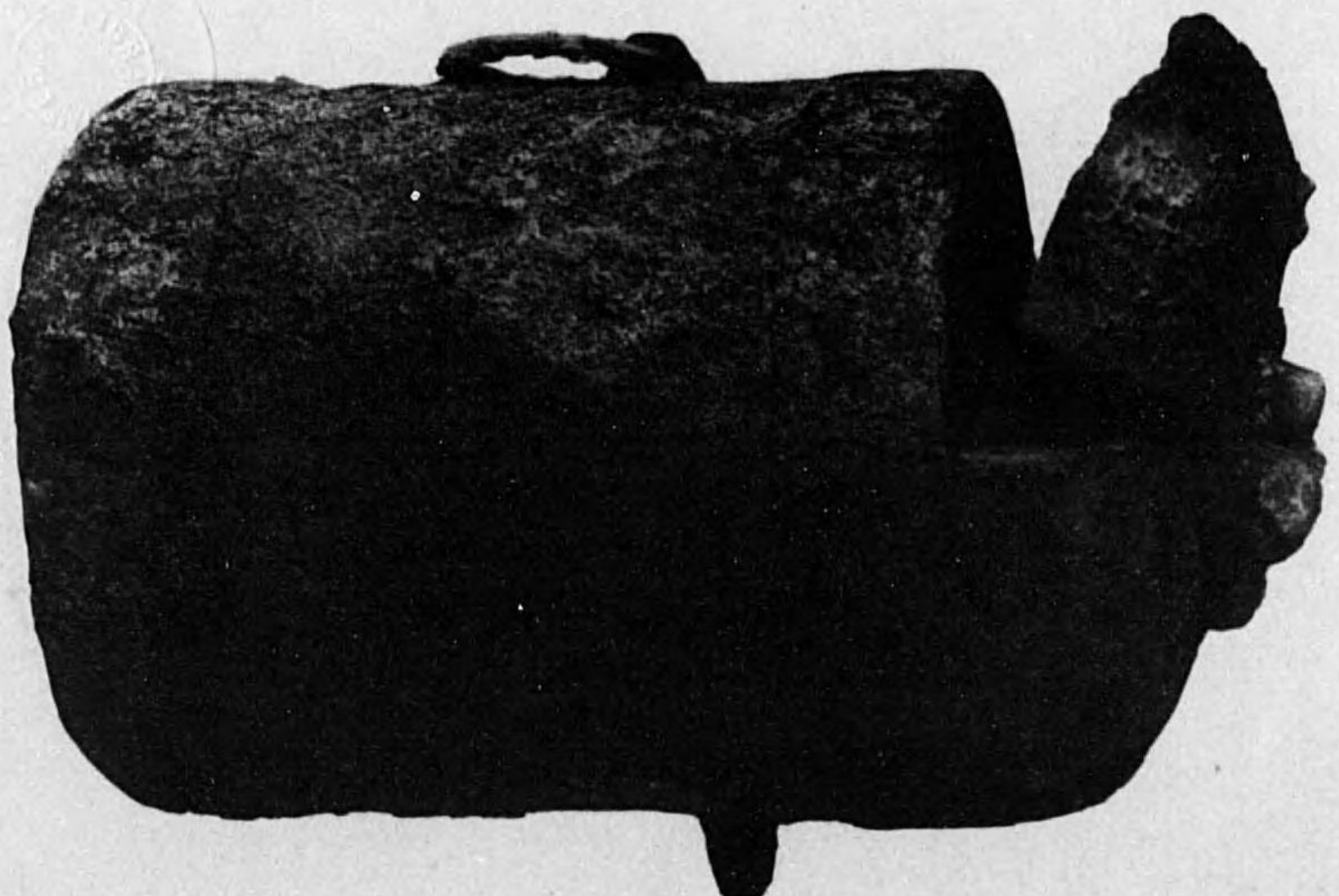
(イ) 多田春臣氏藏銅製轆轤鐙 (本文第二五四圖第二五五圖)

全高四寸四分五厘 徑二寸九分

圓筒狀にして口邊と底邊に稍廣き帯を繞らし上に盤を倒まにせるが如き蓋様あり其頂に蝶番ありて蓋様は中央部より此蝶番によりて回轉して仰向けになるやうになつてゐる即ち是れは轆轤鐙と稱すべきものにして蓋様は仰向けになれば鐙盤として用ひらるゝ蓋上に小なる鈕が附いてゐるのは(今缺損)蓋を仰向けにせしとき其安定を保つために連環にて下の圓筒の胸部に造り出された二小孔を有せる耳に連繋せんが爲めであらう又圓筒の此耳の反對側に遊環のあるは鐙を柱又は壁の折釘に懸けんがための装置であらう(本文第二五五圖)寧壽鑑古に漢轆轤鐙が載せてある其下部は是れと形を異にすれども其上部の蓋の一半が蝶番に



253



254

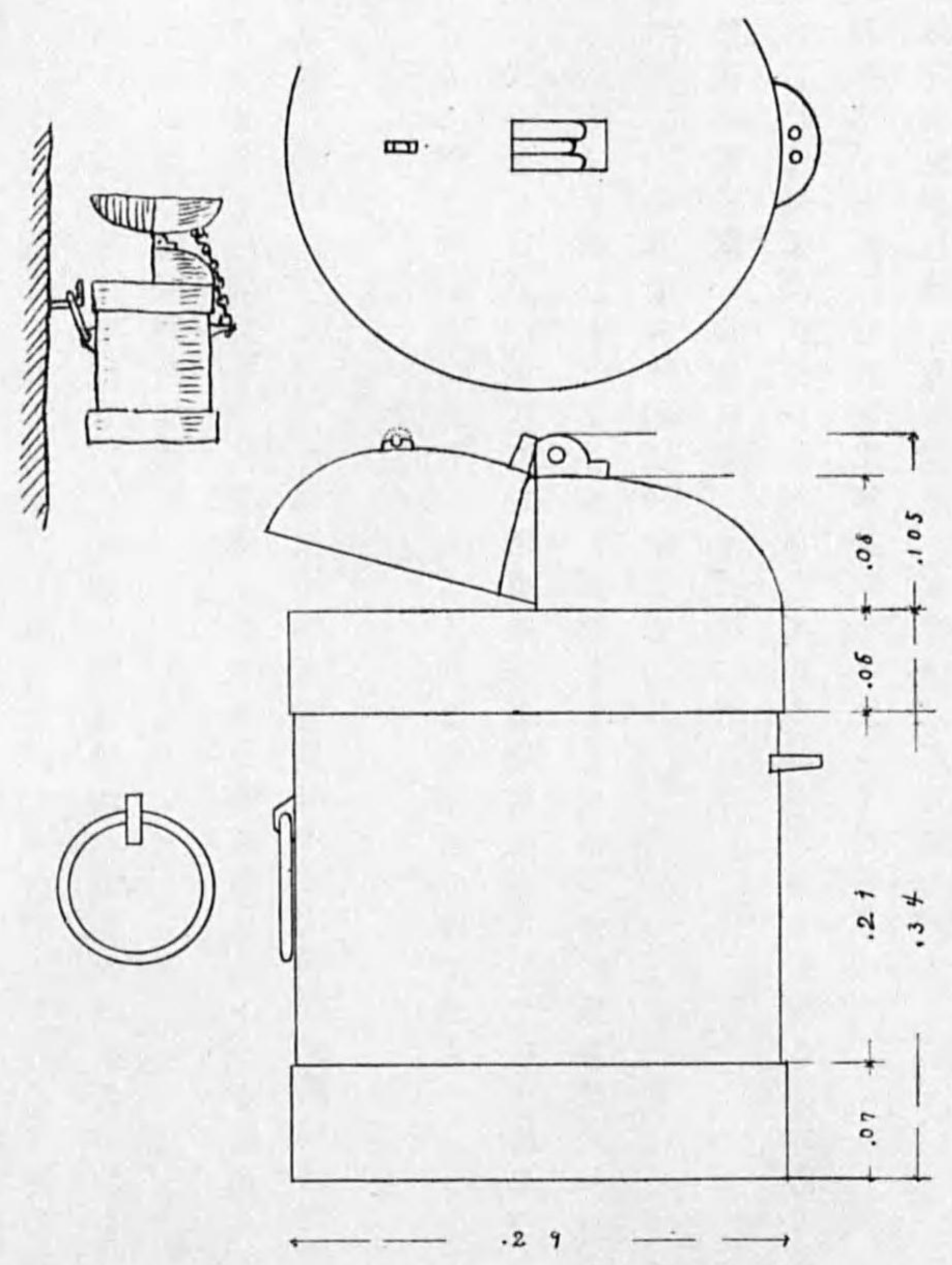
253

254

又 耳 壺 鐙

(多田春臣氏藏)

より廻轉して仰向けになり錠盤の用をなすは是れと同様の手法である



(口) 鳩首杖頭 多田春臣氏藏 (本文第二五六圖)

高二寸二分五厘 長二寸九分五厘
第八章 金屬製雜品

鳩首杖頭 中西嘉市氏藏 (本文第二五七圖)

高二寸三分 長二寸六分五厘

漢代には杖頭を飾るに鳩形を以てしたことは往々文獻に見ゆる。後漢書禮儀志に仲秋按戸比民年七十者授之玉杖杖端以鳩爲飾鳩不噎之鳥欲老人不噎也。と載せてゐる而るに應劭風俗通に

俗説高祖與項羽戰敗於京索遁叢薄中羽追求之時鳩正鳴其上追者以鳥在無人遂得脫及即位異此鳥故作鳩杖以賜老者按少皞五鳩鳩者聚也聚民也周禮羅氏獻鳩養老漢無羅氏故作鳩以扶老。

と載せてゐる思ふに前者は正しかるべく後者は附會の説であらう

今此に採録せるは多田中西兩氏所藏の銅製鳩首杖頭にして短き筒形の上に鳩の形を作りし者手法は頗る古樸なれども多少の雅趣を示してゐる特に後者は簡率の裡寫實の要を得てゐる寧壽鑑古所載漢鳩首杖頭は形制よく之れに一致してゐる

(八) 多田春臣氏藏 鳥首杖頭 (本文第二五八圖)

杖頭に當れる筒形は折損一部を存してゐる其上に耳を有せる一鳥あり首を回らし翼を理ひるの狀を爲せるが其形態技工寧前兩者に優つてゐる

(三) 東京美術學校藏 金錯銅筒 (本文第二五九圖(1)(2))

長八寸四分 徑一寸一分五厘 厚四厘



256



257



258



260



256, 257 鳩首杖頭 二種

257(多田春臣氏藏)

258(中西嘉市氏藏)

258 鳥首杖頭

(橋都芳樹氏藏)

260 金銅鳳形飾金具 二種

(橋都芳樹氏藏)

